

阪神・淡路大震災

西宮市消防の活動記録



震災文庫

5

217

西宮市消防局・西宮市消防団

阪神・淡路大震災

西宮市消防の活動記録



西宮市消防局・西宮市消防団

ごあいさつ

西宮市消防局長

岸本 健治



THE CHIEF OF NISHINOMIYA CITY FIRE DEPARTMENT

平成7年1月17日午前5時46分、震度7という今まで経験したことのない激震に見舞われたあの時から早や1年余りが過ぎようとしています。

ここに改めて犠牲となられた多くの御霊に対し慎んで哀悼の誠を捧げますとともに、ご遺族の方々と被害に遭われました皆様に心からお見舞い申し上げます。

西宮市の地域防災計画は梅雨前線の豪雨及び台風による水害、高潮、山崩れ等の被害を想定したものであり、広域応援協定、大規模災害に対する事前計画等はいずれも局部地域の災害を想定したものでありました。このたびのような市内全域はもとより数市町にまでも被害が及ぶ広域災害は想定していなかった等の背景があり、私達の消防力を遙に超える災害規模と重なり多くの市民の方々の消火、救助活動に頼る結果となりました。

当日6時20分に指揮本部を設置し、倒壊家屋からの救助要請と同時多発火災の双方に対応するため消火隊と救助隊の部隊統制を行い「1火災現場1ポンプ」を基本戦術として持てる資器材を最大限に活用しましたが、これも底をつき徒歩により資器材無しで現場に派遣せざるを得ない実状でした。

このたびの震災は救助する者自身が被災者であり、家族の死亡、負傷等の最悪の事態を乗り越え長期間消防活動等に従事した消防職員・団員の崇高な消防魂を誇りに思っております。

監視用TVの故障等による情報把握の遅れ。

災害規模に対する消防力の不足。

同時多発の火災、救助、救急への対応。

医療機関との通信途絶。

等ほんの一例ではありますが反省することや問題点が多くあります。これらを今後の地域防災計画の中で、また消防行政の中で十二分に活かして「安全で安心できるまちづくり」を進めていく決意であります。

このたびようやく震災記録をまとめることができました。十分な内容とは申せませんが、震度7の激震に対応した西宮市消防局、消防団の活動実態を皆様に報告することが被災地の私どもの責務であると考えております。

最後になりましたが、応援出動をいただいた消防機関、自衛隊、警察の皆様そして初期消火、救助活動等に協力いただいた多くの市民の皆様に厚くお礼を申し上げますとともに、全国の皆様から寄せられた激励とお見舞いに対しましても厚くお礼を申し上げます。

西宮市消防団長

木 嶋 巖



THE CHIEF OF NISHINOMIYA CITY VOLUNTEER FIRE CORPS

阪神・淡路大震災の記録誌の作成にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

身も心も凍てつくあの日、突然の激しい揺れが、我々のふるさを襲った一瞬の出来事、今迄にかつて体験した事のない大震災でした。

死者1千余人、全半壊家屋6万、3日間で火災が41件、そのうち地震発生から約1時間以内に22件の火災がありました。火災の延焼を最小限に食い止めるとともに、人命救助も不眠不休の態勢のもと、必死で限度の72時間以内に漸く作業を終えることが出来ました。

4日目の1月20日から消防団は、消防団担当係長が短期間のうちに調達した給水タンクを38台の消防自動車に積載し、消防自動車の緊急性と地域の実情に明るい利点を有効に活用して、僻地や高齢者を主にした給水活動を続け、2月20日までの1ヶ月間ライフラインの復旧に尽力しました。

各分団が地域に密着しているという特性を十分に生かして団員を速かに召集し、消防局ともお互いに協力し合いながら連携を保ち、必死に活動していただきました。その上、なんと申しまでも消防自動車の完全なまでに充実した配備こそ初期消火に成功し、延焼を最小限度に食い止められた要因であると考えます。

市当局を始めとして市議会の皆様の常々深いご理解をいただいていたことについて感謝いたしますとともに誇りに思っています。

団員各位が旺盛なる消防精神でもって、消火と人命救助が絶対使命とは申せ、自ら家族の死亡、負傷、家屋の全半壊など相当なる痛手を受けているのも顧みず直ちに出動し、1ヶ月余の長きに渉る懸命なる活躍に対しまして心から感謝の誠を捧げるものであります。

また、地域におきまして自主防災組織や婦人防火クラブ、まとい会、消防団OBの方々の活躍協力も大変なものがありました。

この震災で色々な事を体験しましたし、与えられました教訓も確かに多くあります。

今後は、消防団は地域に密着した防災機関として、郷土愛の精神に基づいて、大きな成果をあげた活躍を忘れることなく、地域防災のリーダーとして消防局、消防団、自主防災組織などが三位一体となって災害から自分達の地域を守ってゆかなければならないと痛感いたしました。

最後に、各市町とりわけ近隣の消防団関係より早速心暖まるお見舞い並びに応援隊の派遣など、ご懇切なるご厚意にたいしまして深く敬意を表しますとともに、唯々感謝の他ございません。

有難うございました。

写真で見る市内の被害



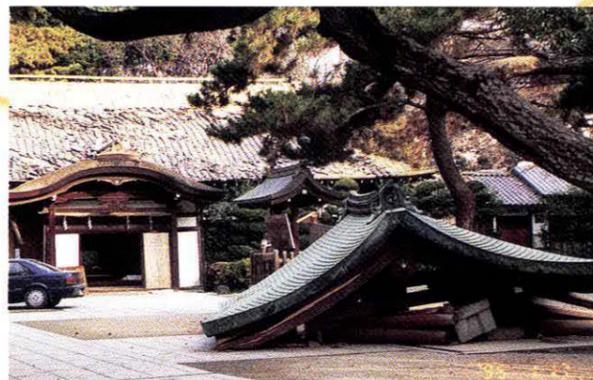
市内各所で発生した火災（神明町・広田町）



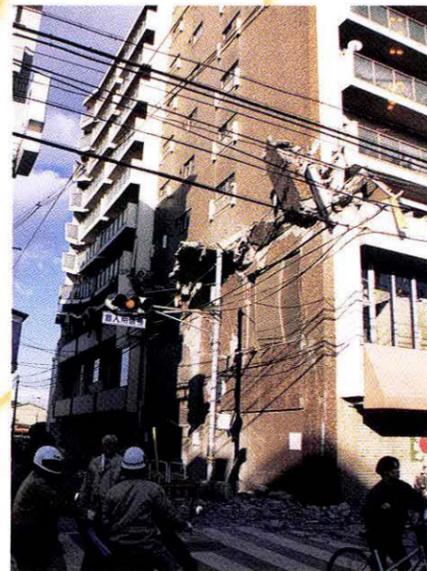
早朝の活気あふれる卸売市場も壊滅的被害を受けた
(六湛寺町)



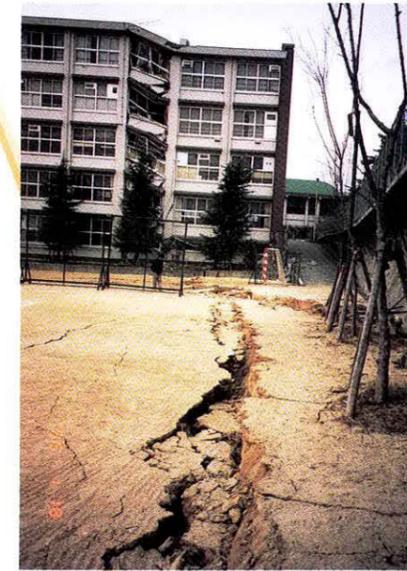
被災した中央商店街・大時計は発生時刻で止っている
(馬場町)



西宮神社の被災状況（杜家町）



中間層が破壊した大型店舗付マンション
(津門大塚町)



校舎グラウンドに地割れを生じ被害を受けた校舎
(高座町・市立西宮高等学校)



倒壊した香栢園市場（屋敷町）



大きな被害を受けた酒造会社（久保町）
※古い酒蔵だけでなく近代的な工場にも被害が出た



倒壊した2階建ての共同住宅では1階居住者に多くの犠牲者を生じた（青木町）



1階ピロティ部分が崩れ倒壊したマンション（安井町）



落橋した阪神高速・湾岸線では走行中の車両も犠牲となった（甲子園浜2丁目）



落橋し走行中の乗用車が下敷きとなった名神高速道路（高畑町）



倒壊した7階建てマンション（甲子園口北町）
※9歳の男児・58時間後に救出



1階店舗が座屈した複合ビル（甲東園1丁目）



阪急・今津線に落橋した国道171号線の陸橋（野間町）



阪神高速・神戸線高架の下敷きとなった車両（市庭町付近）



商店街は倒壊家屋や破損した電柱で道を塞いだ（甲東園1丁目・甲東園市場）



軒並みに倒壊した住宅（青木町）



落橋した阪神高速・神戸線上で間一髪、転落を免れた長距離スキーバス（本町付近）



共同住宅の1階部分が壊れ駐車場の車両も破損（青木町）



倒壊した大学々舎（御茶家所町）



滝消防庁長官に被災・消防活動状況の概況説明
（津門大塚町・消防局）



倒壊した住宅（上大市1丁目）



ヘリコプターによる患者搬送（河原町・市民グラウンド）



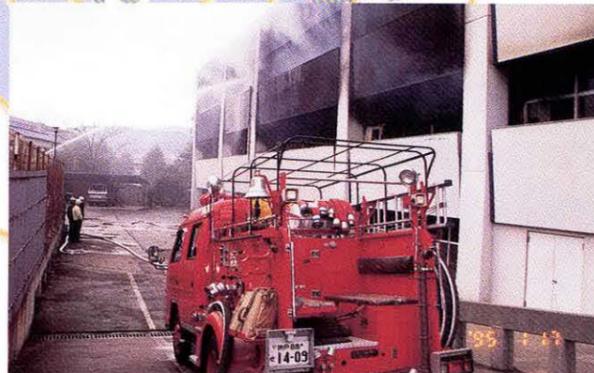
土砂に埋もれた民家から出火し、7棟が全焼した
（仁川百合野町）



7時までに発生した火災は22件に及んだ（広田町付近）



救援物資の搬入（河原町・市民グラウンド）



化学実験室から出火し、炎上する校舎
（一里山町・報徳学園）



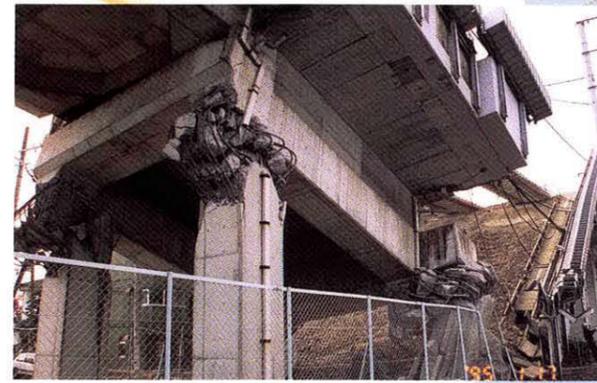
アパート火災の消火（南昭和町）



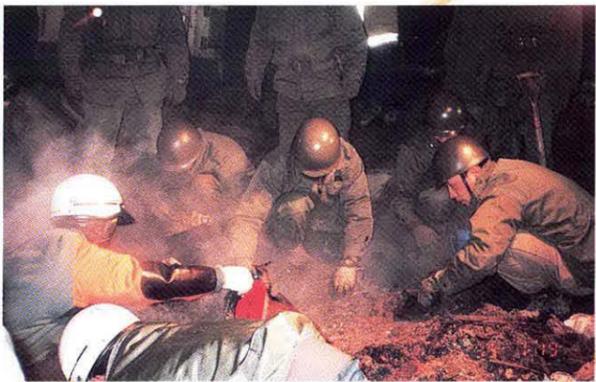
倒壊家屋からの救出活動（西福町）



倒壊家屋内で救出活動を続ける消防団員（青木町）



山陽新幹線高架の落下（上田市1丁目）



土砂崩れ現場では夜を徹して救出活動が続けられた
（仁川百合野町）



フランス災害救助特別隊による救助犬を用いた救出活動
（甲子園口北町）



液状化による陥没した道路（西宮浜2丁目）



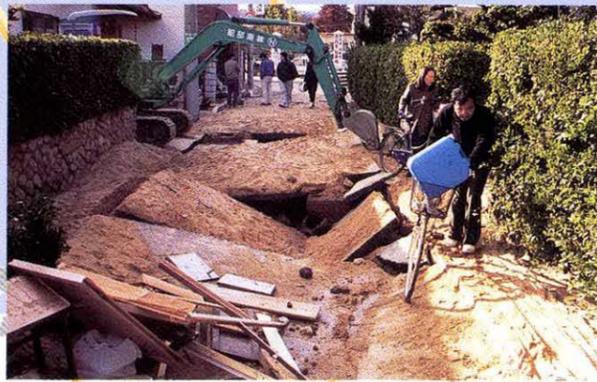
高架の道床が崩れた阪急電車・神戸線（若松町）



重機を使用するの救出活動（青木町）



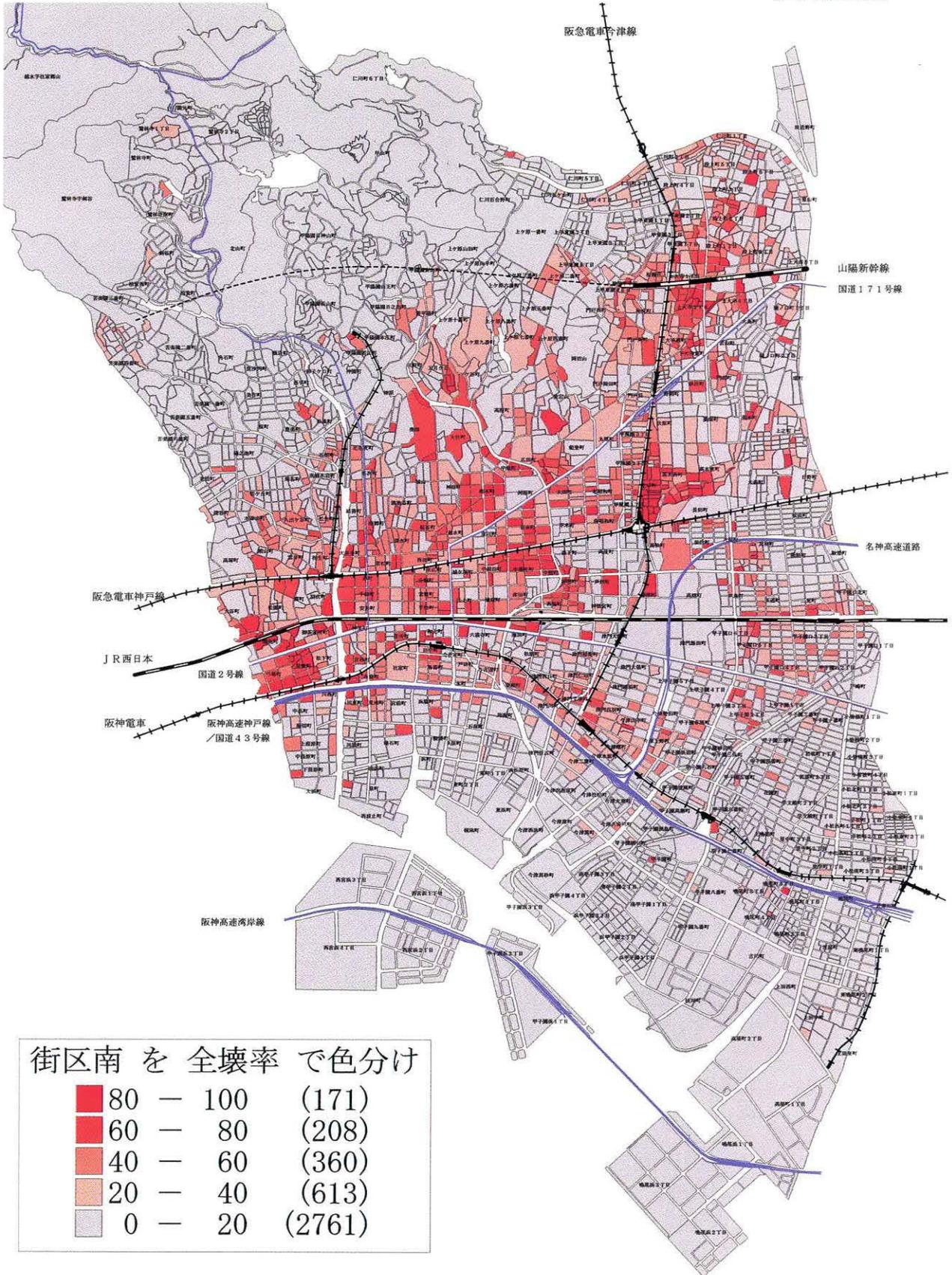
橋梁と道路に段差を生じた国道2号線（神楽町）



住宅街の暗渠が破壊され生活道路も使用不能となった
（段上町2丁目）

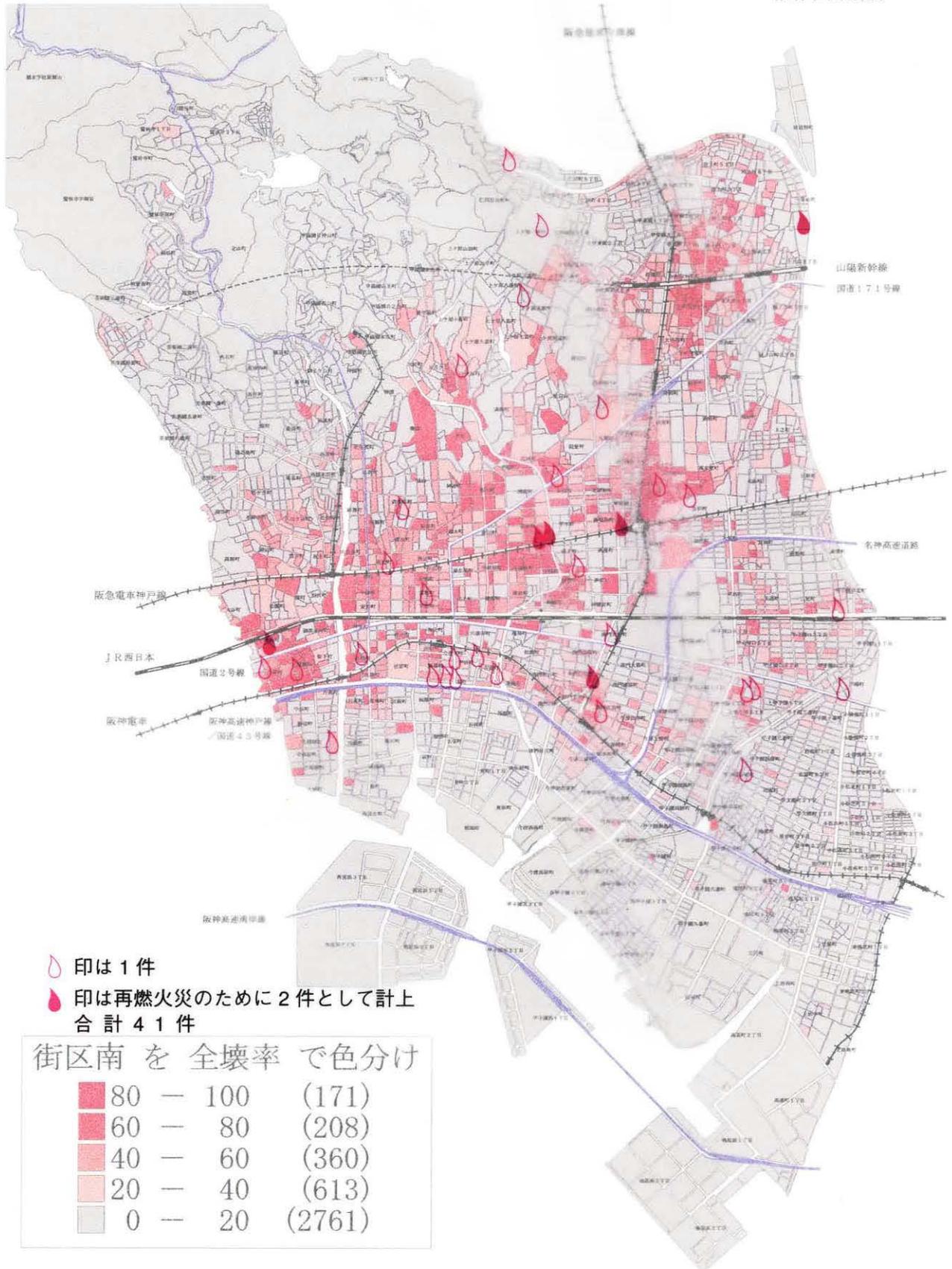
阪神・淡路大震災街区別全壊世帯

(西宮市南部)



震災における火災発生状況

(西宮市南部)



阪神・淡路大震災 西宮市消防の活動記録

目 次

西宮市の特性

第1章 地震の概要

- 地震の発生 2
- 各地の震度 2
- 余震の発生回数 3
- 主な都市・阪神地区の被害状況 3

第2章 西宮市の被害

- 人的被害 4
- 家屋の被害 4
- 避難の状況 4
- 火災による被害 4
- ライフラインの被害と復旧 5
- 鉄道の被害と復旧 5
- 道路の被害と復旧 6
- 各施設の被害 7
- 消防水利の被害 11
- 医療機関の被害 11
- 公共施設の被害 11
- 消防庁舎の被害 11
- 消防職員の被災状況 12
- 車両の被害 12

第3章 消防局の消防活動状況

- 消防体制 13
- 指揮本部の設置 14
- 緊急通報受信状況 15
- 職員の非常参集状況 15
- 連絡情報収集体制 17
- 消火活動 17
- 兵庫県南部地震に伴う火災発生状況 19

■ 火災活動事例 ①～⑨	23
■ 救助活動	32
■ 救急活動	34
■ ヘリコプターによる搬送	35
■ 自主防災組織の活動	36
■ 行方不明者の捜索（ローラー作戦）	37

第4章 消防団の消防活動状況

■ 消防団の組織	38
■ 活動状況	38
■ 給水活動	38
■ 消防団員の被災状況	39
■ 消防団車庫などの被害	39
■ 各分団長の行動	40

第5章 応援及び支援

■ 警察	46
■ 自衛隊	46
■ 消防機関の応援	46
■ ボランティア	47
■ 海外からの応援	47

第6章 復興に向けて

■ 消防車両の整備	48
■ 100㎡防火水槽の整備	48
■ 通信施設の整備	49
■ 自主防災組織の育成・強化	49
■ 救助資器材などの整備	49
■ 緊急消防援助隊の発足	49
■ 西宮市震災対策訓練の実施	49
■ 市民意識調査の実施	50

震災活動消防職員・団員の手記

西宮市の特性

■ 面積

本市の母体である西宮町は、大正14年4月市制を施行し、周辺の町村との合併や、昭和40年代から始まる臨海部の埋め立て等により市域を拡大し、現在の面積は99.87km²となっている。

■ 地形

市域は、南北19.1km、東西13.8kmにわたり、ひょうたん型に広がっている。市域の中央部には東六甲山系に属する山地が東西に横断し、南部は5.5kmにわたって大阪湾に面しているため、海拔0mから900mにいたる起伏と変化にとんだ地形となっている。

■ 地質

地質系統は、中生代の六甲花崗岩及び石英粗面岩類の古い系統と、新生代における神戸層群、大阪層群、段丘れき層及び沖積層といった比較的新しい系統の2つに大きくわけることができる。

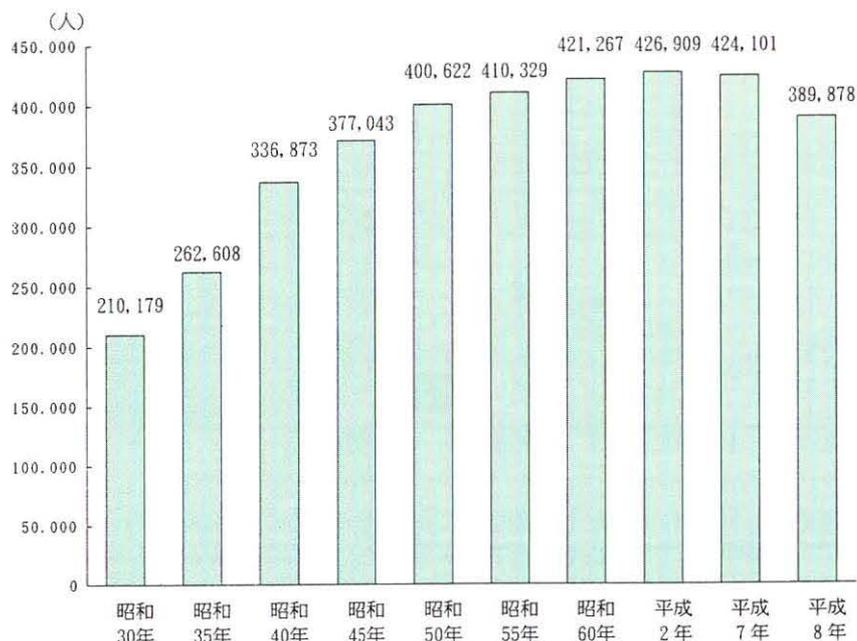
太多田川から北部一帯は主として石英粗面岩類からなり、山口町と塩瀬町の一部では泥岩、砂岩、れき岩からなる神戸層岩で覆われている。

南部の市街地は、花崗岩の風化作用と河川の浸食作用によって、六甲山地の土砂が多量に下流に運ばれ、堆積してできた沖積層のデルタの上に形成されている。

■ 人口

西宮市の人口の推移をみると、昭和30年代に急激に増加したが、昭和40年代にやや緩やかな増加となり、昭和50年代以降は横ばい傾向にあり、平成7年1月現在の市域の人口は42万4千人であったが、震災1年後の平成8年1月の人口は、39万人となった。

図1 人口の推移



第1章 地震の概要

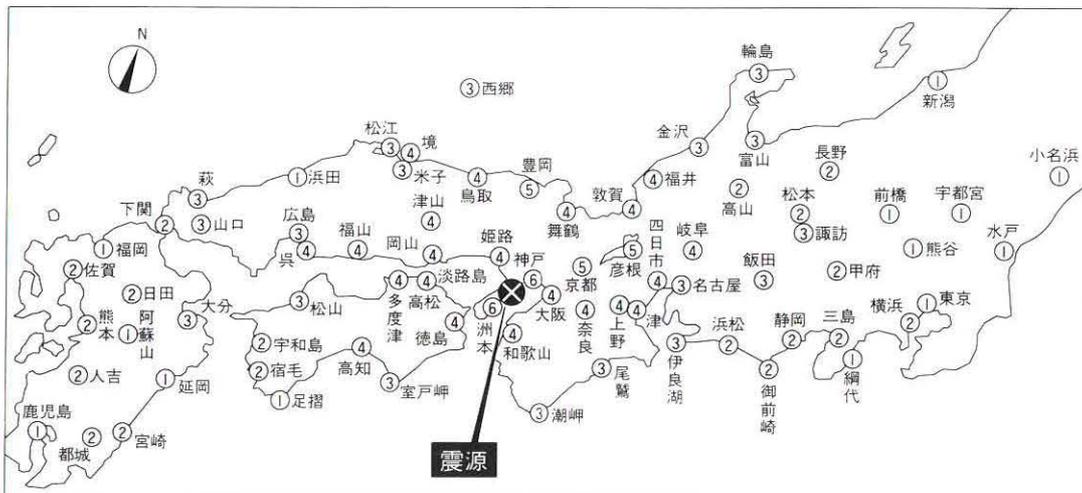
■ 地震の発生 (平成7年1月17日 大阪管区気象台発表)

- (1) 名称：平成7年(1995年)兵庫県南部地震
- (2) 発生日時：平成7年1月17日(火) 5時46分
- (3) 震源地：兵庫県淡路島北部(北緯34°36′ 東経135°03′)
- (4) 震源の深さ：14.3km
- (5) 規模：マグニチュード7.2

■ 各地の震度

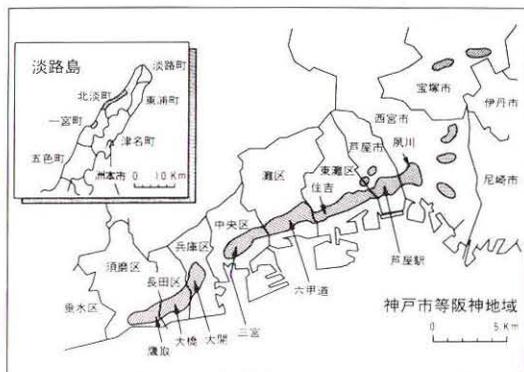
- 震度6 神戸 洲本
- 震度5 豊岡 彦根 京都
- 震度4 津 敦賀 福井 上野 岐阜 呉 境 高知 福山 鳥取 多度津 津山 徳島 岡山 高松 大阪 舞鶴 姫路 和歌山 奈良
- 震度3 名古屋 輪島 金沢 飯田 富山 尾鷲 伊良湖 萩 山口 西郷 広島 松山 室戸岬 米子 松江 潮岬 大分 諏訪
- 震度2 横浜 長野 甲府 静岡 御前崎 松本 高山 浜松 三島 佐賀 宿毛 宇和島 人吉 下関 伏木 河口湖 熊本 日田 都城 宮崎 軽井沢 高田
- 震度1 前橋 宇都宮 新潟 網代 水戸 東京 熊谷 福岡 足摺 浜田 鹿児島 延岡 平戸 小名浜 千葉 秩父 館山 阿蘇山

各地の震度分布図



気象庁は、17日当日に地震機動観測班を淡路島、神戸市とその周辺市の現地調査を実施した結果、震度7（激震）～「（木造）家屋の倒壊が30%以上」の地域は、神戸市須磨区から西宮市にかけて長さ20km、幅約1kmで帯状に広がっていることが確認された。

震度7の分布図



※震度7（激震）の地域（平成7年2月7日気象庁発表）
 神戸市～須磨区高取 長田区大橋 兵庫区大開 中央区三宮
 灘区六甲道 東灘区住吉
 西宮市～阪急夙川駅付近 阪神今津駅付近 阪急西宮北口駅
 付近 甲東園付近
 芦屋市～JR芦屋駅付近 三条町及び山手町の一部
 宝塚市～JR宝塚駅付近 JR中山寺駅付近
 淡路島～北淡町 一宮町 津名町

■ 余震の発生回数

平成7年4月7日9時までの余震の発生回数は1,798回（うち有感地震は217回）で、最大規模の余震は、1月25日23時16分に発生した神戸市及び西宮市の震度4であった。

■ 主な都市・阪神地区の被害状況

都市名	死者	負傷者		家屋の被害		
		重傷	軽傷	全壊	半壊	一部破損
大阪市	16人	4人	353人	194棟	2,131棟	多数棟
豊中市	8人	101人	2,395人	657棟	4,241棟	30,154棟
神戸市	4,484人	14,679人		54,949棟	31,783棟	一棟
明石市	8人	139人	1,745人	2,938棟	6,668棟	21,092棟
尼崎市	48人	983人	6,136人	5,569棟	35,162棟	36,669棟
伊丹市	19人	222人	2,490人	1,393棟	7,496棟	19,566棟
芦屋市	433人	390人	2,785人	4,722棟	4,060棟	4,757棟
宝塚市	116人	60人	2,201人	3,800棟	8,881棟	12,999棟
川西市	2人	71人	476人	554棟	2,712棟	5,999棟
淡路島 (洲本市他10町)	59人	108人	1,119人	3,438棟	5,308棟	15,957棟

(財団法人 全国消防協会 阪神・淡路大震災活動記録誌から)

第2章 西宮市の被害

■ 人的被害（平成8年2月21日現在）

死者： 1,120人
負傷者： 6,386人

■ 家屋の被害

● 世帯数（平成8年3月29日現在）

全壊 34,181世帯
半壊 27,116世帯

● 倒壊棟（平成7年12月26日現在）

全壊 24,645棟
半壊 17,202棟

■ 避難の状況

避難者数：44,351人（最大時・平成7年1月19日）
避難所：194カ所（最大時・平成7年1月20日）

■ 火災による被害

地震の発生直後から市内の各所で火災が多発、午前7時までに22件の火災が発生した。

	17日	18日	19日	合計
発生件数	34件 (再燃火災4件) (車両火災3件)	4件 (再燃火災2件)	3件	41件 (再燃火災6件) (車両火災3件)
焼損棟数	83棟	4棟	3棟	90棟
焼損面積	6,851㎡	—	798㎡	7,649㎡
り災世帯	124世帯	2世帯	28世帯	154世帯
り災人員	274人	2人	45人	321人
死者	13人	—	—	13人
負傷者	2人	—	—	2人

■ ライフラインの被害と復旧（平成7年7月1日現在）

- 水道：市内6浄水場、2配水所や配水管及び給水管が被害を受け、163,800世帯で断水したが、3月28日応急復旧が完了した。
- 電気：発災直後に176,000軒が停電したが、全国各地の電力会社の応援を受け、1月21日で送電可能な世帯へ供給された。
- ガス：市内170,400戸にガスの供給が停止されたが、4月11日にほぼ復旧作業が完了した。
- 電話：市内のケーブル、電柱及びマンホールが被災し、34,000回線が故障したが、1月31日回復した。

■ 鉄道の被害と復旧

J R

- 新幹線：市内の高架橋延長約1.5kmの60%と六甲トンネルが損傷（全線・4月8日開通）
- 在来線：橋梁10カ所、電線・鉄柱を多数損傷（全線・4月1日開通）

阪急電鉄

- 神戸線：高架橋部分が多数倒壊、夙川駅舎損壊（全線・6月12日開通）
- 今津線：高架橋脚部分18本、軌道、電気施設多数が損傷（全線・2月5日開通）
- 甲陽線：軌道、電線等多数が損傷（全線・3月1日開通）

阪神電鉄

- 本線：西宮駅変電所全壊、鉄柱4本倒壊、香櫨園駅付近の盛土一部崩壊、津門川の橋脚ひび割れ等（全線・6月26日開通）
- 武庫川線：盛土の崩壊（全線・1月26日開通）



落橋した新幹線（松籟荘）

■ 道路の被害と復旧

一般国道：国道2号線では夙川架橋継ぎ目が損傷した。国道43号線では阪神高速3号神戸線の橋脚が崩壊し、落下したため通行に支障が出た。国道171号線の阪急今津線にかかる門戸高架橋が落下したため通行止めとなった。このため、国道2号線は迂回車両などにより大渋滞となり、緊急走行に大きな影響を及ぼした。

(門戸高架橋・11月28日復旧)

中国自動車道：武庫川橋、尼子橋が一部損傷したものの、通行に支障はなかった。

名神高速道路：高松町付近で落橋、橋脚部の被害により、上下線通行止めとなった。

(7月29日復旧)

阪神高速道路：3号神戸線の今津水波町、本町付近の2カ所で橋脚損壊による落橋、5号湾岸線では、西宮港大橋付近が落橋、上下線通行止めとなった。

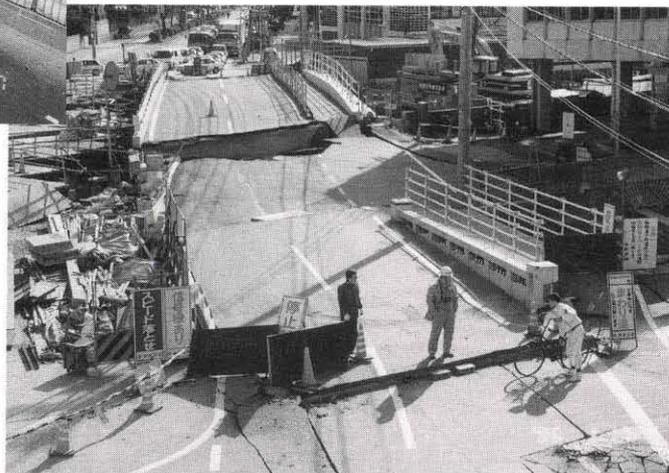
(5号湾岸線市域間・4月29日復旧緊急車両のみ通行可能)

西宮北有料道路：市街地と北部地区を結ぶ盤滝トンネル内2カ所崩落、車道損傷により通行止めとなった。(3月1日開通)

一般道路：液状化現象により、市街地南部地域の道路が地盤沈下、亀裂などの損傷を受けた。



落橋した国道171号線（野間町）



損傷した臨港線・長五郎橋付近（浜松原町）

■ 各施設の被害

港湾施設

西宮浜とを結ぶ臨港道路西宮大橋の橋脚2本が損壊し、全面通行止めとなったほか、西宮地区、甲子園地区埋立地の埠頭、護岸が損壊沈下し大きな被害を受けた。（西宮大橋・11月25日仮復旧）

危険物施設

市内の危険物施設の総数は、発災時632施設で、製造所9施設・貯蔵所398施設・取扱所225施設であった。管轄別に見ると西宮管内273施設、鳴尾管内125施設、瓦木管内146施設、北管内88施設で、市内南部地域に全施設の約86%が集中している。

消防局では、危険物施設の被害状況の把握と二次災害防止のため、1月19日緊急調査を実施した。

被害を受けた施設は182施設で、全施設の約29%に達し、被害区域は西宮浜、鳴尾浜地区の埋立地や国道2号線などの道路周辺に集中したが、地震による火災は発生しなかったものの、配管の折損及び容器の落下破損による危険物の漏洩が11施設で発生している。

建築物、防火壁及び土間などの被害があった施設は159施設で、被害の大きかった15施設は廃止となった。

被害調査の結果、地下貯蔵タンク及び地下埋設配管を有する危険物施設に対しては、定期点検の実地指導を行うとともに、緊急を要する危険物施設については随時特別査察を実施したもので、その結果、9月30日現在で定期点検の実施率は100%となり、平成8年3月31日現在で施設の改修率は100%となっている。

少量危険物施設・高圧ガス貯蔵所など

少量危険物、劇物及び放射性物質などを有する施設の被害はなく、一般家庭に放置された灯油容器の収去及び高圧ガスの漏洩防止のバルブ閉鎖などの措置を講じた程度である。

● 危険物施設などの火災状況

危険物が原因で発生した火災は2件あり、いずれも学校の化学実験室の保管庫に収納されていた危険物容器が棚から落下破損し、他の物質と化学変化を起こし出火したものである。

化学実験室に保管されていた危険物の数量は指定数量の1/5未満であった。

危険物施設の被災状況一覧表

製造所等の区分	施設総数	被災施設数	被災内容				火災・漏洩等のあった危険物施設		
			小計	建築物・工作物	設備	消火設備等	小計	火災	漏洩・流出
製造所	9								
屋内貯蔵所	90	19	23	19	4		5		5
屋外タンク貯蔵所	49	15	31	15	12	4			
屋内タンク貯蔵所	30	4	5	4	1		1		1
地下タンク貯蔵所	179	42	57	24	33		1		1
簡易タンク貯蔵所	3								
移動タンク貯蔵所	41								
屋外貯蔵所	6	2	2	2					
給油取扱所	138	85	106	84	22		3		3
内訳	営業給油取扱所	(84)	(69)	(85)	(69)	(16)	(1)		(1)
	自家給油取扱所	(48)	(10)	(11)	(9)	(2)			
	船舶給油取扱所	(6)	(6)	(10)	(6)	(4)	(2)		(2)
第1種販売取扱所	5	2	2	2			1		1
第2種販売取扱所									
移送取扱所									
一般取扱所	82	13	19	9	8	2			
合計	632	182	245	159	80	6	11		11

備考

1 施設総数は平成7年1月17日現在の総数

2 被災内容欄

・建築物・工作物～危険物施設の主体部分で、製造所のプラント、屋内貯蔵所の建築物、屋外タンク貯蔵所等のタンク、防油堤及び給油取扱所の防火壁、土間等をいう。

・設備～配管、ポンプ及び計量機等をいう。

・消火設備等～固定消火設備等をいう。

3 複数の被災がある施設は再掲したもの。

被災危険物施設の被災内容別一覧表

被災内容	施設数	内 容 別	件 数
建築物・工作物等	159	建物自体に倒壊、傾斜、亀裂等の異常が認められたもの。	69
		防油堤に亀裂、損壊等の異常が認められたもの。	9
		土間、床面に亀裂、陥没等の異常が認められたもの。	58
		防火壁に亀裂、損壊等の異常が認められたもの。	44
		キャノピーに倒壊、傾斜等が認められたもの。	4
		タンク本体に移動、傾斜等が認められたもの。(屋外貯蔵タンク)	7
		上記に掲げる以外の部分に異常が認められたもの。(照明器具、洗車機、窓ガラス等)	12
		小 計	203
設備	80	配管に切断、折損等が認められたもの。	60
		計量機、ポンプ設備に倒壊、破損等が認められたもの。	39
		小 計	99
消火設備等	6	消火設備に転倒、破損等が認められたもの。	2
		消火配管に変形等が認められたもの。	4
		小 計	6
合計	245	合 計	308

※ 複数の異常があるものは再掲したもの。

危険物施設の被災及び改修状況一覧表

製造所等の区分	施設総数	被災施設数	特別査察数	定期点検届出施設数 (微減圧法等)		変更許可申請を必要とする施設の改修状況		廃止施設数
				義務施設数	届出施設数	変更申請を必要とする施設	変更申請数	
製造所	9		9					
屋内貯蔵所	90	19	90			1	1	4
屋外タンク貯蔵所	49	15	49			8	1	
屋内タンク貯蔵所	30	4	30			1	1	2
地下タンク貯蔵所	179	42	179	177	177	26	21	3
簡易タンク貯蔵所	3		3					
移動タンク貯蔵所	41		25					
屋外貯蔵所	6	2	6					
給油取扱所	138	85	138	128	128	32	30	3
内 営業給油取扱所	(84)	(69)	(84)	(83)	(83)	(26)	(26)	(3)
自家給油取扱所	(48)	(10)	(48)	(41)	(41)	(2)	(2)	
訳 船舶給油取扱所	(6)	(6)	(6)	(4)	(4)	(4)	(2)	
第1種販売取扱所	5	2	5					
第2種販売取扱所								
移送取扱所								
一般取扱所	82	13	82	7	7	5	3	3
合計	632	182	616	312	312	73	57	15

備考

- 1 施設総数は平成7年1月17日現在の総数、定期点検届出施設数、変更申請数及び廃止施設数については平成7年9月30日現在の数
- 2 定期点検は地下貯蔵タンク及び地下埋設配管のある施設で震災後に実施し届出した施設について計上したもの。
- 3 廃止施設数は震災によるもののみ計上したもの。



市役所6階付近の状況



消防局消防部事務所の状況

防火対象物の被害

西宮の地場産業である酒造地帯の建物や、国の重要文化財に指定されている西宮神社の大練塀や市内の神社仏閣、大型店舗付マンションが崩壊した。
また、商店街や市場なども大きな被害を受けた。

防火対象物の被災状況

用途		区分	震災前の 対象物数 (H6.12.31現在)	震災による 廃止対象物数 (H8.3.31現在)
1項	イ	劇場・映画館・観覧場等	20	1
	ロ	公会堂・集会場	73	
2項	イ	キャバレー・ナイトクラブ等		
	ロ	遊技場・ダンスホール	15	2
3項	イ	待合・料理店等	2	1
	ロ	飲食店	124	4
4項		百貨店・市場・マーケット等	144	19
5項	イ	旅館・ホテル・宿泊所	64	7
	ロ	寄宿舍・下宿・共同住宅	4,800	515
6項	イ	病院・診療所・助産所	100	1
	ロ	老人福祉施設・救護施設等	82	
	ハ	幼稚園・養護学校等	81	2
7項		小・中・高・大・各種学校	462	15
8項		図書館・美術館等	10	
9項	イ	公衆浴場のうち、蒸気浴場・熱気浴場その他これらに類するもの		
	ロ	イに掲げる以外の公衆浴場	28	10
10項		車両の停車場 船舶の発着場	6	
11項		神社・寺院・教会等	125	22
12項	イ	工場・作業場	592	43
13項	イ	自動車車庫・駐車場	121	8
14項		倉庫	555	8
15項		前各号に該当しない事業所	766	25
16項	イ	複合用途のうち、特定の用途に供する部分を有するもの	1,107	58
	ロ	イ以外の複合用途対象物	519	34
17項		重要文化財等	7	1
18項		50m以上のアーケード	4	
合 計			9,807	776

※ 対象物数については棟数

■ 消防水利の被害

防火水槽などの被害状況を把握するため、1月20日緊急調査を行った。

消防水利の被害状況

施設	基数	被害状況
防火水槽	83	躯体の漏水、地盤沈下による蓋周囲の破損など
消火栓	97	配管破損、埋没などによる使用不能 (発災とほぼ同時に一部の地域を除き断水)
井戸	9	液状化による土砂堆積など

■ 医療機関の被害

市内372医療機関の被害状況は、全半壊した88医療機関、被災して休診中の医療機関などを除いた243の医療機関が負傷者の診療にあたった。(平成7年8月1日・西宮市医師会調べ)

医療機関建物の被害

全壊			半壊		
合計	診療所	病院	合計	診療所	病院
28	27	1	60	57	3

■ 公共施設の被害

西宮市役所(8階建)が被災し、特に6階以上の損傷が激しく使用禁止の状態となった。このため、仮設庁舎の建設及び他の市の施設などに移転し業務を行っている。

また、文化施設であるフレンテホールやアミティーホール(市民会館)も被害を受け、使用不能となり、地域集会施設も大きな被害を受けた。

■ 消防庁舎の被害

消防庁舎の被害状況は、西宮消防署の望楼に亀裂が生じ、3月10日に望楼を撤去した。このため、望楼上にあった無線機用アンテナを3階屋上にアンテナ塔を新設し移した。

また、各消防署所の被害は、内、外壁にひび割れなどを生じたものの、庁舎改修といった大きな損傷を受けなかったが、西宮浜にある局整備センターでは給排水管破裂、市街地南東部に位置する鳴尾消防署は車庫前道路の陥没など、液状化現象による被害を受けた。

署所別被害状況

署 別	被 害 状 況
消 防 局 西宮市消防署	望楼下部及び壁体亀裂（3月10日撤去）、地下雑污水管の破損及び揚水ポンプ故障 車庫後部壁体及び内外壁のいたるところでひび割れ 望楼屋上無線機用アンテナ支持ボルト破損、消毒室傾斜など
整備センター	車庫出入口付近陥没、車両置場地面陥没、給排水管破損
鳴尾消防署	玄関及び車庫前北側道路陥没、庁舎東面壁体亀裂など
瓦木消防署	玄関入口スロープのタイル及び階段室壁体ひび割れなど
北消防署	訓練塔と庁舎間のアスファルトのひび割れ
北夙川分署	屋上及び屋外階段、ホース干し場及び車庫前歩道ひび割れなど
甲東分署	階段南側壁体亀裂、外壁タイル剥離
山口分署	壁体ひび割れ

■ 消防職員の被災状況

地震発生時、自宅において家屋の倒壊及び家具等の転倒により7名が負傷したが、いずれも軽症。

また、地震発生後、勤務中の負傷者は2名で、救助現場活動中に1名、出動準備中に1名が負傷したがいずれも軽症であった。

■ 車両の被害

消防局の防災指導車、西宮消防署のはしご車及び支援車が激しい揺れにより接触し、軽微な損傷を受けたが通常運用に支障はなかった。

第3章 消防局の消防活動状況

■ 消防体制（平成7年1月1日現在）

西宮市消防局の消防力は、局に2部7課、市内に4消防署3分署を配置し、職員数339名で、消防車両は51台を保有している。

消防自動車等の保有数

所属別 車種別	局	西宮	北夙川	鳴尾	瓦木	甲東	北	山口	計
ポンプ車	1	1	1	1	1	1	1	1	8
タンク車		1	1	1	1	1	1	1	7
はしご車		1		1	1				3
シュノーケル車						1			1
化学車					1				1
救助工作車		1		1	1				3
救急車	2	1	1	1	1	1	1	1	9
支援車		1							1
指揮広報車	2								2
査察広報車	1	1	1	1	1	1	1	1	8
資器材搬送車	1								1
人員搬送車	1								1
指揮車	1								1
防災指導車	1								1
連絡車・広報車	4								4
可搬式ポンプ	4	1	1	1	2	1	2	2	14

職員配置

職員数	局	西宮	北夙川	鳴尾	瓦木	甲東	北	山口
339(人)	64	48	37	44	48	33	39	26

■ 指揮本部の設置

消防局は地震直後に市内各消防署に対し「火災の鎮圧及び人命救助を最優先し最善の行動をとるよう」指令し、いち早く駆け付けた消防局長を中心に管制室内に指揮本部を設置した。この指揮本部において、救助を求め殺到する通報及び市内各所での出火情報から被害が甚大であると判断、各署の活動を本部の直轄指揮下に置き、管轄を外した部隊編成を実施し、現場活動の空白地域をなくすよう可能な限り効率的に運用した。

1月17日

- 5 時46分 ----- 地震発生
 - 全市防災指令第3号を運用（発令）
- 5 時48分 ----- 消防局は市内各消防署に対し人命救助を最優先し最善の行動をとるよう指示
 - 救助要請第1報を覚知（松原町倒壊現場～駆け付け）
- 5 時52分 ----- 消防局は最初の火災を自己覚知し（神明町）出動
- 6 時00分 ----- ●全市に災害救助法発令（1/22通知、遡及適用）
- 6 時20分 ----- ●管制室内に指揮本部設置（消防局長、消防部長、消防課長他）全ての火災現場に消火隊を投入する～1火災現場1ポンプ～を基本戦術とする。
- 7 時05分 ----- ●西宮市災害対策本部設置（本部長～市長・市役所4階会議室）
- 8 時20分 ----- 陸上自衛隊伊丹駐屯地から第1陣の自衛隊員（第36連隊60名）が西宮市に向け出発～9時10分到着 救助活動開始
- 9 時00分 ----- ●市災害対策本部員会議
 - 消防公安部より本部長へ災害状況、災害防御活動の状況、活動方針等を報告
- 9 時30分 ----- 市災害対策本部は自衛隊派遣要請及び消防広域応援要請を決定（県災害対策本部へNTT電話、衛星FAXで要請するも故障のため通じず。）
- 9 時58分 ----- 市災害対策本部から兵庫県への自衛隊派遣要請完了（県消防交通安全課へNTT電話により）
 - 「西宮市の被害甚大、自衛隊の派遣を要請します。」
- 11時03分 ----- 三田市消防本部の応援隊が西宮市到着（県内第1陣）
 - （17日中に県下5消防本部1消防団11台35名）
- 12時35分 ----- 大阪市消防局の応援隊が西宮市到着（県外第1陣）
 - （17日中に県外2消防本部6台32名）
- 14時58分 ----- 大阪市消防局のヘリが血液製剤を積んで市立中央体育館グラウンドに到着折り返しクラッシュ症候群（挫滅症候群）の患者を大阪大学医学部付属病院特殊救急部へ搬送した。～震災におけるヘリ搬送県内第1号

1月18日

1月17日から引続いて倒壊家屋からの救出活動展開
(市内各所で警察、自衛隊の救出活動同時展開)

1月19日

前日に引続いて倒壊家屋からの救出活動展開
(市内各所で警察、自衛隊の救出活動同時展開)
消防局は危険物施設被災調査実施

1月20日

市災害対策本部から仁川百合野町の50世帯100人に対して避難勧告実施
救出活動については、市災害対策本部からの情報及び市民からの通報に対応するとともに、特に行方不明者の捜索に重点を置き展開
1月20日から消防団は、38台の消防団車両に500~1,000Lの簡易タンクを積載し給水活動を実施
消防局は地震に伴う消防水利と走行路線の緊急調査を実施するとともに使用した防火水槽に補水(海水、河川水等)

1月21日

市災害対策本部から苦楽園四番町、宝生ヶ丘及び生瀬高台の257世帯760人に対して避難勧告実施
フランス災害救助特別隊(バルバラン隊長以下61名、救助犬4頭)が来日し、甲子園口北町のビル倒壊現場で救助活動

1月22日

ローラー作戦の実施
未救出者が残っていないかを確認するため1月22日から1月30日まで、南部市街地を61ブロックに分割し、消防・警察・自衛隊の合同で捜索活動等を実施

■ 緊急通報受信状況

地震発生直後から、衛星回線を除く市内29回線から119番通報が殺到し、通報内容の殆んどが家屋倒壊による人命救助要請とガス漏れで、17日中の119番の受信件数は4,420件に達した。

■ 職員の非常参集状況

地震発生時消防職員は90人が勤務していたが、勤務中以外の職員は地震発生と同時に勤務場所又は最寄りの消防署に自発的に参集し、1時間以内には40人、2

時間以内には延べ90人となり、3時間以内には延べ160人が参集、当務員と合せ78%の職員が確保できた。

発災からの1時間毎の参集状況

消防吏員337人（招集除外者（研修中、病気療養中等）～16名）		
17 日	参集人員	現在員
5時46分	0人	90人
6時46分（1時間後）	40人	130人
7時46分（2時間後）	50人	180人
8時46分（3時間後）	70人	250人
9時46分（4時間後）	23人	273人
10時46分（5時間後）	18人	291人
11時46分（6時間後）	7人	298人
12時46分（7時間後）	5人	303人
13時46分（8時間後）	4人	307人
14時46分（9時間後）	2人	309人
15時46分（10時間後）	0人	309人
（10時間以後）	12人	321人

招集除外者16名のうち6名は翌日に参集した。

所属別参集状況

	消防局	西宮	北夙川	鳴尾	瓦木	甲東	北	山口	計
吏員数	62	48	37	44	48	33	39	26	337
勤務員	7	14	11	13	16	10	12	7	90
6時46分	11	5	4	5	8	3	2	2	40
7時46分	10	12	4	7	4	2	7	4	50
8時46分	16	8	6	4	9	11	11	5	70

■ 連絡情報収集体制

発災後直ちに情報収集のため緊急出動したが、途上で住民が立ちほだかるように消防車両を止め、倒壊家屋からの救出要請が相次いだ。このため当初は部分的な情報収集にとどまったため、消防職員を私服のまま携帯無線機を持たせ、バイク等で情報収集にあたらせた。また、消火、救助活動中の各隊から逐一現場状況を送信させるとともに、市内各所より非常招集により参集した職員から聞き取り調査を実施し、被害状況の総合的把握に努めた。

また、市災害対策本部が設置（7時05分）されると消防局幹部職員が市災害対策本部に詰め、消防局指揮本部との連絡調整にあたった。

■ 消火活動

部隊編成

地震後、火災を最初に覚知したのは、6分後の5時52分に管制室から職員が火煙上昇を発見したのが最初である。この後、7時までの間に出動隊による発見及び駆け付けなどで22件の火災が発生したが、119番による覚知は1件であった。

発災時の当務員は90人で、消防車両17台（救急車7台21人及び管制室員7人を除く。）62人が火災対応体制であった。指揮本部では市街地全域に及び倒壊家屋からの救出要請と同時多発火災の双方に対応するための消火隊と救助隊の部隊統制を実施した。

火災の発生した地域は、商店街などの老朽木造家屋が密集しており、延焼拡大が危惧されたため「すべての火災現場に消火隊を投入する～1火災現場1ポンプ」を基本戦術として、被害の少ない北消防署のポンプ車2台を消防局に集結させた。

非常招集者が参集し、1分隊に達する毎に査察広報車、資器材搬送車、軽自動車などのあらゆる車両に可搬式動力ポンプ、水管などを積載させて現場に投入するとともに、市内消防団（38台）及び他市応援隊と連携を図った。このため大規模な延焼拡大は回避することができた。

使用水利

発災と同時に市内の消火栓のほとんどが断水し、使用不能の状態となった。このため、防火水槽、井戸、プール、受水槽、池をはじめ水量の少ない河川、溝水などからも土嚢やビニールシート、倒壊家屋の瓦礫などを使用し水をせき止めて取水した。

これは、渇水による教訓から、平成6年9月に「異常渇水に伴う特別消防体制」を各消防署・消防団に対し、次のように通知したことが功を奏した。

- ・ 自然水利の確保と有効活用を図るための部隊運用
- ・ 公共建物、危険地域、危険物製造所などの人命危険対象物の異常時火災警備計画の事前策定
- ・ 積載ホースの増加、土嚢による河川せき止めなどの資器材の増強
- ・ 消防団との連携強化などの徹底

断水時における水利使用状況

水利種別	基数	延べ使用台数	水利種別	基数	延べ使用台数
防火水槽	29	32	溝水	4	4
河川	19	19	屋外消火栓	1	1
プール	2	3	貯水池	1	1
井戸	4	4	受水槽	1	1

初期消火

発災から3日間における火災41件（再燃火災を除くと35件）で、住民が初期消火を実施している火災は28件あり、全体の80%を占める。このうち4件が消防隊の手を経ずに、付近マンションの消火器や家庭の消火器を持ち寄り、あるいは付近の河川、井戸、溝水、学校のプールなどからバケツリレーを行い消火に成功している。



兵庫県南部地震に伴う火災発生状況

火災発生状況

No.	署別	発生日時	発生場所	焼損程度	り災世帯	死傷者	初期消火
1	西宮	1月17日 5:47頃	神明町4	共同住宅 1棟 207㎡全焼	7世帯9人	死者4人	なし
2	瓦木	1月17日 5:47頃	一里山町1	校舎 1棟 1,204㎡半焼	なし	なし	学校職員が消火器使用
3	瓦木	1月17日 5:47頃	上ヶ原一番町1	校舎 1棟 部分焼	なし	なし	学生が消火器使用
4	西宮	1月17日 5:47頃	青木町9	共同住宅 4棟 442㎡全焼	7世帯15人	なし	付近住民がバケツリレーを実施
5	瓦木	1月17日 5:47頃	広田町1	共同住宅・住宅 15棟 1,422㎡全焼 3棟 部分焼	20世帯67人	死者1人	付近住民がバケツリレーを実施
6	瓦木	1月17日 6:40頃	高木西町5	住宅・5棟 522㎡全焼 1棟40㎡半焼 1棟10㎡部分焼 2棟ぼや	13世帯28人	死者1人	付近住民が消火器100本を使用及びバケツリレーを実施
7	瓦木	1月17日 6:55頃	門戸岡田町1	住宅 1棟 110㎡全焼	1世帯1人	なし	消防職員、付近住民が消火器100本使用及び20~30人がバケツリレーを実施
8	瓦木	1月17日 6:55頃	仁川百合野町10	住宅 7棟 543㎡全焼	8世帯26人	死者4人 負傷者1人	付近住民が消火器100本を使用及び住民、学生100人がバケツリレーを実施
9	西宮	1月17日 6:10頃	弓場町9	店舗他 4棟 273㎡全焼	2世帯6人	なし	付近住民が近くのマンション2ヶ所から屋内消火栓を使用
10	西宮	1月17日 5:50頃	郷免町5	住宅 3棟 247㎡全焼 車両 1台 全焼	3世帯11人	死者3人	寮生による屋内消火栓(3ヶ所)使用及び付近住民が消火器、バケツリレーを実施
11	西宮	1月17日 6:45頃	弓場町6	住宅 2棟 156㎡全焼 58㎡半焼	2世帯6人	なし	付近住民がバケツリレー実施
12	西宮	1月17日 6:52頃	若松町4	共同住宅 1棟 143㎡部分焼	8世帯19人	なし	なし
13	西宮	1月17日 6:52頃	津門仁辺町4	共同住宅 1棟 119㎡全焼	6世帯6人	なし	管理人と寮生が自寮の屋内消火栓を使用
14	瓦木	1月17日 6:55頃	一ヶ谷町8	共同住宅 1棟 ぼや	1世帯2人	なし	付近住民が消火器使用
15	鳴尾	1月17日 7:30頃	甲子園五番町2	住宅 1棟 114㎡全焼 3棟 22㎡部分焼	4世帯12人	負傷者1人	家人、付近住民がバケツリレーを実施
16	瓦木	1月17日 6:30頃	甲子園口北町1	店舗・住宅 1棟 173㎡全焼 3棟 部分焼	2世帯6人	なし	付近住民が消火器使用
17	瓦木	1月17日 8:30頃	戸崎町6	店舗 1棟 ぼや	-	なし	なし
18	西宮	1月17日 9:05頃	青木町9	住宅 2棟 156㎡全焼	2世帯7人	なし	付近住民がバケツリレーを実施
19	西宮	1月17日 9:25頃	上甲子園3丁目4	共同住宅 1棟 352㎡全焼	10世帯14人	なし	付近住民が消火器使用
20	瓦木	1月17日 5:47頃	北口町21	1棟90㎡全焼 住宅 1棟 部分焼 1棟 ぼや	2世帯6人	なし	付近住民が消火器使用及びバケツリレーを実施
21	西宮	1月17日 12:30頃	常盤町7	住宅 1棟 122㎡全焼 1棟 部分焼	2世帯7人	なし	付近住民がバケツリレーを実施
22	西宮	1月17日 12:43頃	上甲子園3丁目4	共同住宅 1棟 26㎡部分焼	1世帯1人	なし	なし
23	瓦木	1月17日 13:00頃	一里山町1(再燃)	校舎 1棟 3㎡部分焼	-	なし	なし
24	西宮	1月17日 13:00頃	郷免町5(再燃)	住宅 3棟 ぼや	-	なし	なし
25	西宮	1月17日 17:10頃	与古道町5	共同住宅 1棟 ぼや	2世帯2人	なし	付近住民がバケツリレーを実施
26	西宮	1月17日 17:20頃	津門仁辺町4 (再燃)	共同住宅 1棟 ぼや	-	なし	なし
27	瓦木	1月17日 20:10頃	南昭和町2	共同住宅 1棟 285㎡半焼	16世帯16人	なし	付近住民が市場内の屋外消火栓、消火器使用及びバケツリレーを実施

No	署別	発生日時	発 生 場 所	焼 損 程 度	り災世帯	死 傷 者	初 期 消 火
28	西宮	1月17日 21:30頃	青木町9 (再燃)	共同住宅 1棟 ぼや	—	なし	なし
29	西宮	1月18日 0:55頃	青木町9 (再燃)	住 宅 1棟 ぼや	—	なし	なし
30	瓦木	1月18日 7:28頃	南昭和田2 (再燃)	共同住宅 1棟 ぼや	—	なし	なし
31	西宮	1月18日 16:13頃	馬場町1	共同住宅 1棟 部分焼	2世帯2人	なし	なし
32	瓦木	1月18日 16:20頃	戸田町6	店 舗 1棟 ぼや	—	なし	なし
33	西宮	1月19日 8:11頃	宮西町4	共同住宅 1棟 181㎡半焼	10世帯15人	なし	付近住民が消火器100本使用及び近くのマンションの屋内消火栓を使用
34	西宮	1月19日 17:00頃	上夙原町1	共同住宅 1棟 570㎡全焼	16世帯24人	なし	消火器使用
35	西宮	1月19日 18:00頃	満池谷町5	住 宅 1棟 47㎡半焼	2世帯6人	なし	消火器、水道水使用
36	瓦木	1月17日 6:30頃	上ヶ原六番町1	共同住宅 1棟 12㎡部分焼	3世帯3人	なし	消火器使用
37	西宮	1月17日 6:00頃	本町7 国道43号 線上路上	大型トレーラー 1台 全焼	—	なし	消火器使用
38	西宮	1月17日 6:00頃	本町7 国道43号 線上路上	普通貨物自動車 1台 全焼	—	なし	消火器使用
39	西宮	1月17日 6:00頃	本町7 国道43号 線上路上	普通乗用車 1台 全焼	—	なし	消火器使用
40	西宮	1月17日 7:00頃	津門吳羽町2	共同住宅 1棟 ぼや	1世帯1人	なし	なし
41	西宮	1月17日 5:50頃	津門大塚町7	共同住宅 1棟 ぼや	1世帯3人	なし	水バケツ

地震に伴う出火原因及び時間別一覧表

発 火 源	経 過 等	合 計	出 火 日 時						
			1 5 7	7 9	9 11	11 13	13 0	1/18	1/19
			:47 :00	:00 :00	:00 :00	:00 :00	:00 :00		
		41	22	3	2	4	3	4	3
電 気 ス ト ー プ	ストーブの転倒	3	2						1
化 学 薬 品	硝酸類が混合	1	1						
	金属ナトリウムが水と反応	1	1						
屋 内 配 線	配線がショート	1		1					
水 槽 用 ヒ ー タ ー	水槽の水がなくなり過熱	2	1	1					
電 気 ア ン カ	電気アンカ本体の破損	1	1						
煉 炭 堀 こ た つ	煉炭の上に可燃物が落下	1	1						
ガ ス 湯 沸 し 器	種火に都市ガスが引火	1	1						
飛 び 火	火の粉が屋根に飛び火	1				1			
イ ン タ ー ホ ン	配線がショート	1						1	
蛍 光 灯	蛍光灯のスパーク	1						1	
再 燃	残り火から再び出火	6				2	2	2	
原 因 不 明	建物の火災	18	11	1	2	1	1		2
	自動車の火災	3	3						

火災発生状況時間経過表

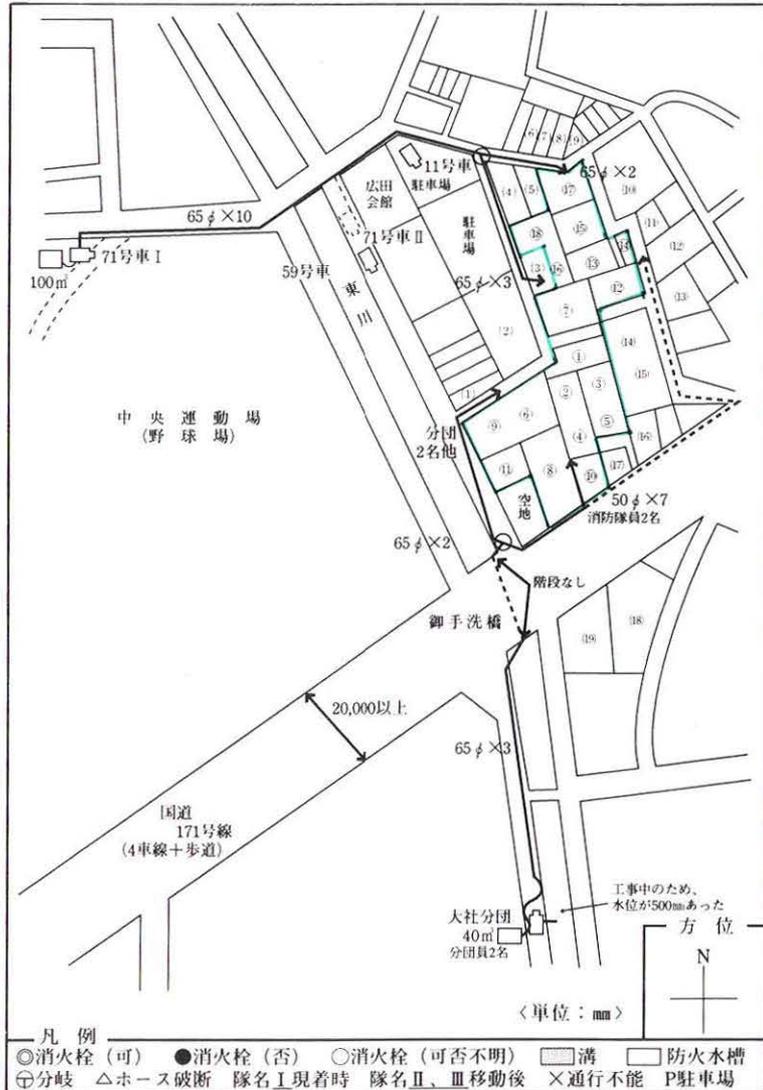
17日

発生場所	経過時間																								初期消火	
	発災	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	23:00	24:00						
1 神明町4 共同住宅	5:54	12号																								無し
2 一里山町1 学校	5:47																									消
3 上ヶ原一番町1 学校	5:47																									消
4 青木町9 共同住宅	5:47																									バ
5 広田町1 文化住宅	5:47																									バ
6 高木西町5 一般住宅	6:40																									消バ
7 門戸岡町1 一般住宅	6:55																									消バ
8 仁川百合野町10 一般住宅	6:55																									消バ
9 弓場町9 店舗	6:10																									屋内
10 郷免町5 一般住宅	5:50																									屋内消バ
11 弓場町6 一般住宅	6:45																									消バ
12 若松町4 共同住宅	6:52																									無し
13 津門仁辺町4 共同住宅	6:52																									屋内
14 一ヶ谷町8 共同住宅	6:55																									消
15 甲子園五番町2 一般住宅	7:30																									バ
16 甲子園口北町1 店舗	6:30																									消
17 戸崎町6 店舗	8:30																									無し
18 青木町9 一般住宅	9:05																									バ
19 上甲子園3丁目4 文化住宅	9:25																									消
20 北口町21 一般住宅	5:47																									消バ
21 常盤町7 一般住宅	12:30																									バ
22 上甲子園3丁目4 共同住宅	12:43																									無し
25 与古道町5 共同住宅	17:10																									バ
27 南昭和町2 共同住宅	20:10																									消 屋内バ

【火災活動事例①】

西宮市広田町1 火災No.5

全 焼：15棟 1,422㎡	全 損：18世帯 55名
半 焼：	半 損：
部分焼：3棟	小 損：2世帯 12名



【特記事項】

(ヒアリング)

- ・地震直後、文化住宅から出火。火災現場の住民は、救助活動をするのが精一杯で初期消火出来ず。
- ・その後、付近住民が現場西側の川の水を汲み上げて消火
- ・出火当時の風は、北東方向から吹いていたが、途中南西の風に変わった。

(消 防 隊)

- ・火災当初は、地元大社分団車両1台と週休、非番の消防職員2名が国道171号線南側にあるマンションの防火水槽に部署、国道通過車両によるホース破断を防ぐため、河川内をホース延長し、西側、南側からの2線放水したが、防火水槽の水が無くなり河川をせき止め取水した。
- ・非番職員は、自宅マンション北側の公衆電話から何度も119番通報を試みるが通じず、6時45分管轄外の鳴尾消防署に電話が通じ、広田町の火災発生を報告する。
- ・その後、消防局車両3台(ポンプ車2台、救急車1台)が、西側市民グラウンド内にある100㎡防火水槽に部署、北側から2線放水と救助活動を実施した。防火水槽の水が無くなり河川に再部署し放水(鎮火：16時00分)

【火災活動事例②】

西宮市高木西町 5 火災No. 6

全 焼：5棟 522㎡	全 損：9世帯 16名
半 焼：1棟 40㎡	半 損：1世帯 3名
部分焼：1棟 10㎡	小 損：3世帯 9名
ぼ や：2棟	



【特記事項】

(ヒアリング)

- ・ 出火直後から付近住民多数が、救助活動と並行して消火器で初期消火に努めたが、瓦礫に阻まれ効果なし。
- ・ 消防隊の放水による道路に流れ出した消火水をスポンジでバケツに集めたり、消防車のサブ・ラジエーターからの放出水をバケツに集めるなど、種々の方法でバケツリレーによる消火活動を行う。

(消 防 隊)

- ・ 現場近くで救助活動を実施していた消防局のタンク車が無線指令により出動、始め積載水のみで対応するが、その後、地元高木分団の中継水を受ける。
- ・ 消防団は、現場北東直線距離約300mの農水路に部署し、水路をせき止め取水、ホース23本を延長した。
- ・ 後続の徒歩部隊が、署から可搬式動力ポンプを持ってきて、現場西側直線距離約50mの農水路をせき止めて水利部署し、1線放水した。
- ・ 現場に対し水の絶対量が不足のため、現場南側の阪急電鉄西宮車庫内にある屋外消火栓からホースを延長、中継水を受ける。(屋外消火栓の水槽容量165㎡)
- ・ 屋外消火栓使用については、昨年の異常渇水時における特別消防体制の一環として、近隣市場火災対策で事前に協力方依頼していた。

【火災活動事例③】

西宮市仁川百合野町10
火災No. 8

全 焼：7棟 543㎡	全 損：8世帯 26名
半 焼：	半 損：
部分焼：	小 損：



【特記事項】

(ヒアリング)

- 地震直後に大規模な土砂崩れが起こり、7棟が埋る。
- 最初は救助活動をしていたが、夜が明け出し明るくなってから、瓦礫の中から煙が出だしたと思ったら、あちらこちらでドンドンという音がして、一瞬のうちに燃え広がった。
- 大学生を中心とした付近住民100名位が消火器を持ち寄り消火したが消えず、最寄りの消防署に駆け付け通報する。また、消火活動と並行して救助活動も実施していた。
- 消防隊到着後もホース延長などを手伝うとともに、近隣家屋から風呂の残り湯をバケツリレーで消火にあたる。(最長約200m)

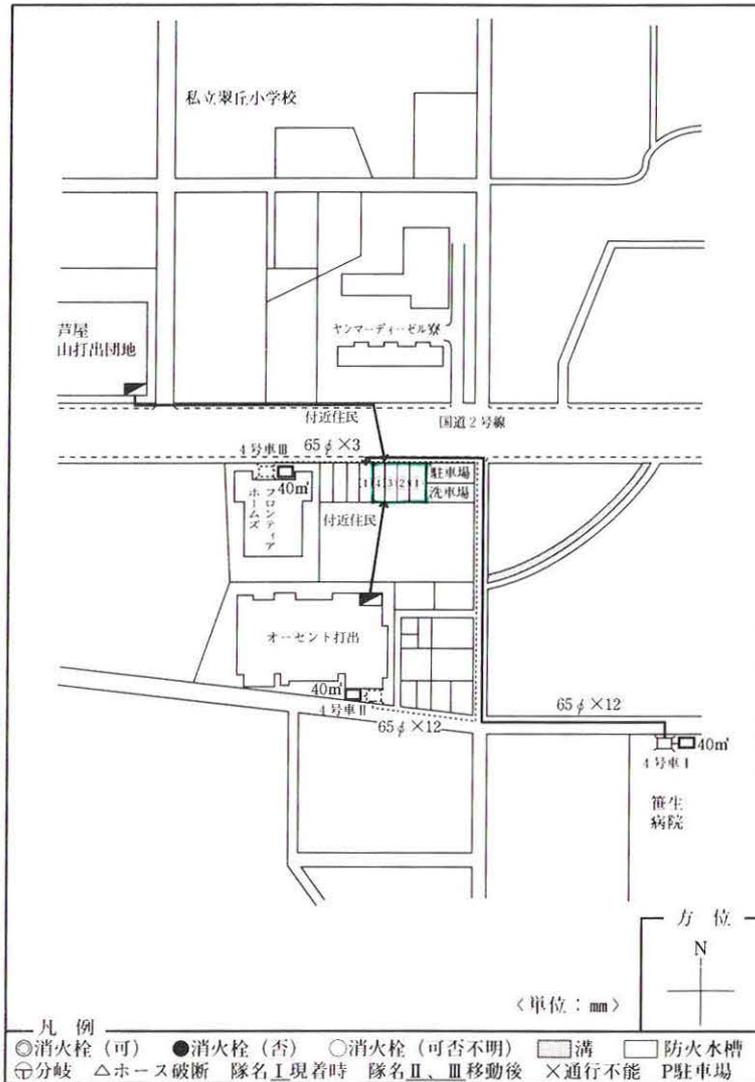
(消 防 隊)

- 消防局ポンプ車2隊が出動、先着隊は到着時マンションの受水槽を使用して消火活動を実施したが、水が無くなり、バケツリレーの水を受水槽に入れて貰った。後着隊が現場から直線距離約450mの防火水槽(40㎡)に部署し、ホース延長してきたので中継を受け、救助活動と併せ実施
- 防火水槽の水も無くなり、土砂崩れ現場東にある阪神水道企業団内の貯水池に再部署する。

【火災活動事例④】

西宮市弓場町9 火災No.9

全 焼：4棟 273㎡	全 損：2世帯 6名
半 焼：	半 損：
部分焼：	小 損：



【特記事項】

（ヒアリング）

- ・地震直後に、鉄骨造平屋建1棟1店舗の物品販売店から出火
- ・一気に室内が炎に包まれ、すぐに西隣の店舗に延焼、さらに西隣の事務所兼住宅に延焼しているとき、付近住民が出火建物南側マンション（オーセント打出）の屋内消火栓から、さらに出火建物北側のマンション（芦屋山打出住宅）の屋内消火栓から国道2号線を横断し、消火にあたる。

（消 防 隊）

- ・災害情報収集隊（指揮広報車）が、自己覚知後、直ちに車載無線で管制室へ連絡
- ・可搬式動力ポンプを積載した広報車が出動するも、夙川橋に約50cmの段差が出来、上下線とも大停滞していたため、中央分離帯を走行し、現場南東の防火水槽に部署し放水する。
- ・先に部署した防火水槽が空になり、現場南の防火水槽へ転戦したが、水が空になったため、さらに現場西の防火水槽へ転戦した。
- ・延べ3時間30分の放水の末、10時46分鎮火する。

【火災活動事例⑤】

西宮市郷免町 5 火災No.10

全 焼：3 棟 247㎡ 車両 1 台	全 損：3 世帯 11 名
半 焼：	半 損：
部分焼：	小 損：



【特記事項】

(ヒアリング)

- ・地震直後に倒壊した、木造瓦葺 2 階建 1 棟 1 戸の専用住宅の 1 階台所付近から出火
- ・北隣の 1 階が崩れ 2 階が傾いた、木造瓦葺 2 階建 1 棟 1 戸の専用住宅に延焼
- ・火がさらに、南隣の木造瓦葺 2 階建 1 戸の専用住宅に延焼しようとするとき、現場の東約 100m 離れた安田火災海上・青雲寮の寮生が、寮の屋内消火栓 3 ヶ所からホースを延ばすとともに、付近住民が消火器と水バケツリレーを行い初期消火にあたる。

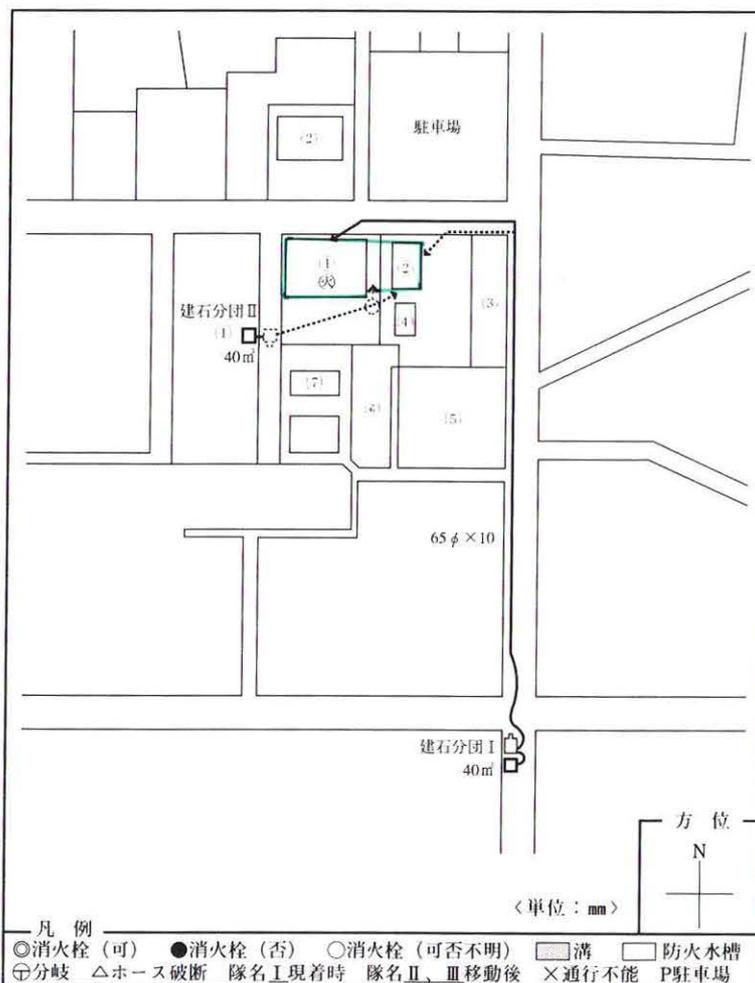
(消 防 隊)

- ・災害情報収集隊 (指揮広報車) が、自己覚知後、直ちに車載無線で管制室へ連絡
- ・可搬式動力ポンプを積載した広報車が出勤し、現場北西の防火水槽に部署し放水する。
- ・付近住民などによる消火活動により、延焼阻止が図られており、火災は最盛期を過ぎていた。

【火災活動事例⑥】

西宮市弓場町 6 火災No.11

全 焼：1棟 156㎡	全 損：1世帯 4名
半 焼：1棟 58㎡	半 損：1世帯 2名
部分焼：	小 損：



【特記事項】

(ヒアリング)

- ・地震により、木造瓦葺2階建1棟1戸の専用住宅が倒壊し、4名が生き埋めとなり、付近住民による救出作業実施中、約1時間後に1階居間から出火
- ・生き埋め4名のうち、救出可能な2名を救出後、出火建物西隣の香櫨園グリーンコーポなどから消火器で消火にあたり、使い切った後、同コーポ内の防火水槽から水を汲み上げ、バケツリレーを行う。

(消 防 隊)

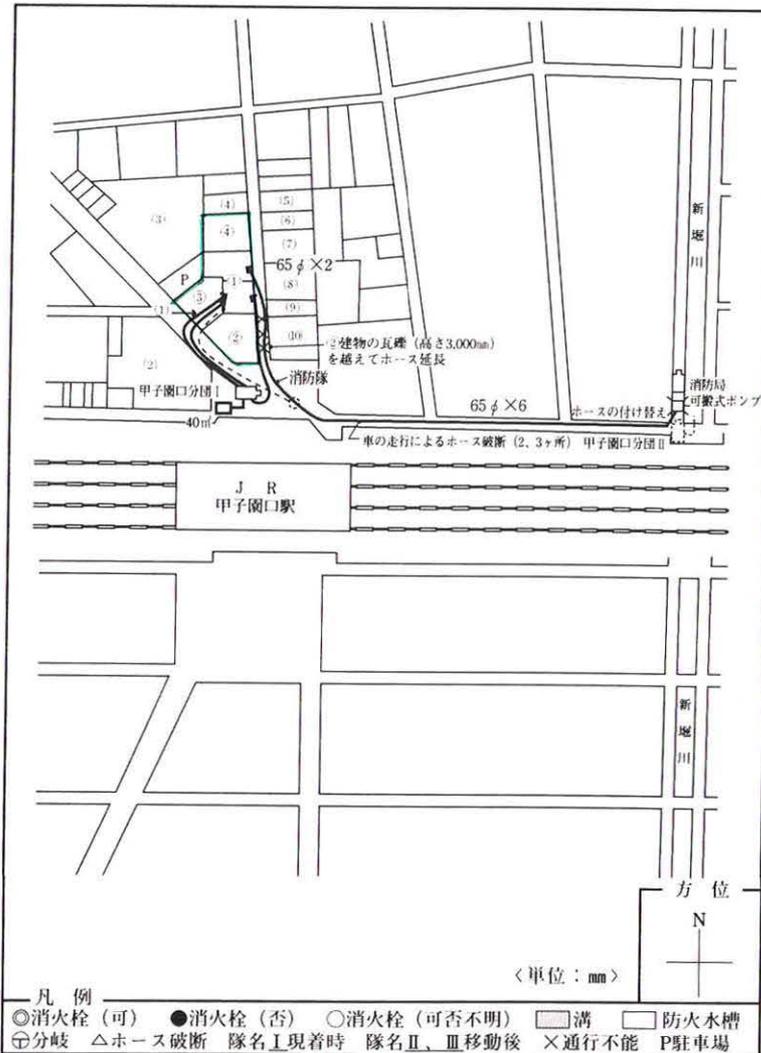
- ・災害情報収集隊（指揮広報車）が、自己覚知後、直ちに車載無線で管制室へ連絡
- ・地元建石分団が出動、現場南東の防火水槽に部署、現場直近で分岐2線放水する。
- ・部署した防火水槽が空になり、香櫨園グリーンコーポ内の防火水槽に転戦部署し鎮圧する。
- ・分団車庫前の道路は、建物倒壊により南下出来ず、また、国道2号線に行くまでの道路はブロック塀が倒れ通行不能であった。このブロック塀の除去は、付近住民の協力を得て迅速に撤去出来た。

【火災活動事例⑦】

西宮市甲子園口北町 1

火災No.16

全 焼：1 棟 173m ²	全 損：1 世帯 3 名
半 焼：	半 損：
部分焼：3 棟	小 損：1 世帯 3 名



【特記事項】

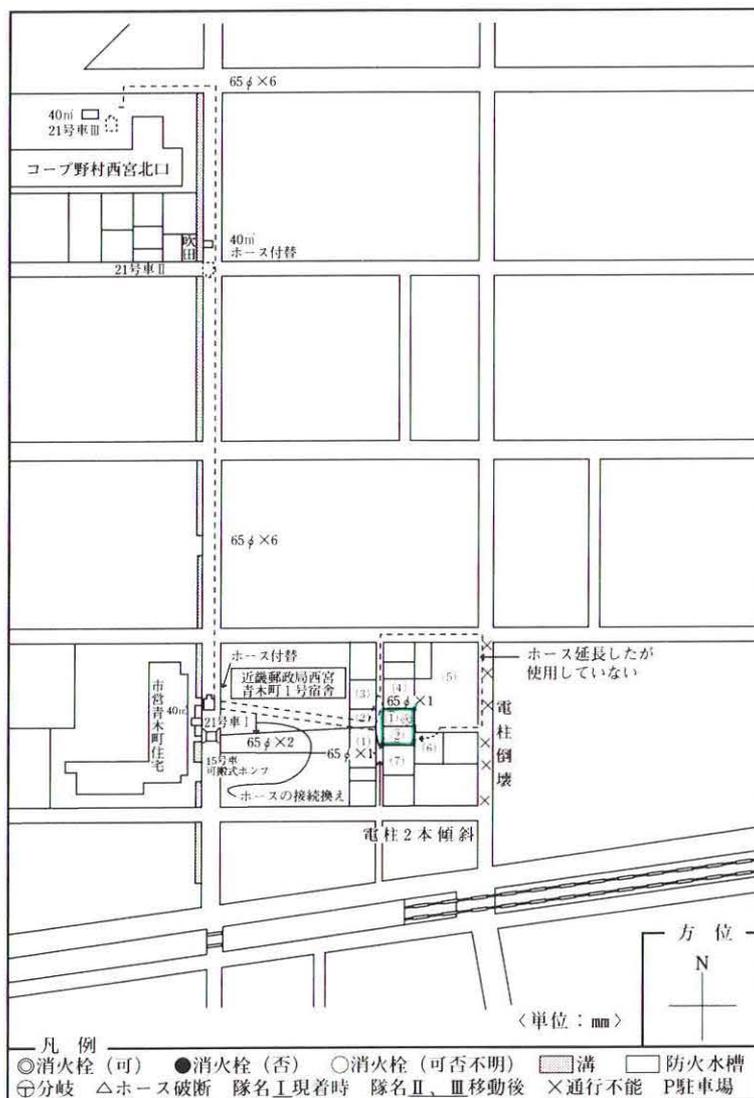
(ヒアリング)

- ・地震後しばらくして、軽量鉄骨造一部木造鉄板葺 2 階建 1 棟 2 店舗付住宅の 1 階店舗部分から出火
- ・付近住民が消火器で初期消火活動するも、一気に燃え上がり、隣接する南北及び西側のビル 3 棟の外壁を焼焦した。(消 防 隊)
- ・地元甲子園口分団が直ちに出動、現場南側の防火水槽に部署し 3 線放水するとともに、出火建物南のホーキビル (RC造 7 階建店舗付住宅) が倒壊しており、居住者の救出活動と並行して実施する。
- ・その後、可搬式動力ポンプを積載した消防局軽自動車が出動、現場から東約 400m 離れた河川に部署、放水するも噴砂がポンプ内に詰り、使用不能となった。
- ・火元建物東側への延焼は、倒壊ビルの瓦礫 (高さ 3 m) を乗り越えてホースを延長して行わなければならない、消火活動は困難を極めた。
- ・甲子園口分団は、先に放水していた防火水槽の水が無くなり河川へ転戦部署し、消防局のホースを接続し放水を続け、約 2 時間後に鎮圧したが、倒壊したホーキビルのガス管破裂に伴い、炎が噴出していたため、消火活動を続行する。

【火災活動事例⑧】

西宮市青木町9 火災No.18

全 焼：2棟 156㎡	全 損：2世帯 7名
半 焼：	半 損：
部分焼：	小 損：



【特記事項】

(ヒアリング)

- 地震発生直後の5時47分頃、当火災現場の真北に隣接する共同住宅など4棟442㎡が全焼する火災が発生し、8時56分に鎮火した。
- その後の9時05分頃、南側に隣接した木造瓦葺2階建の住宅2階北側押入付近から出火
- 付近住民が側溝の水をバケツリレーし初期消火にあたる。

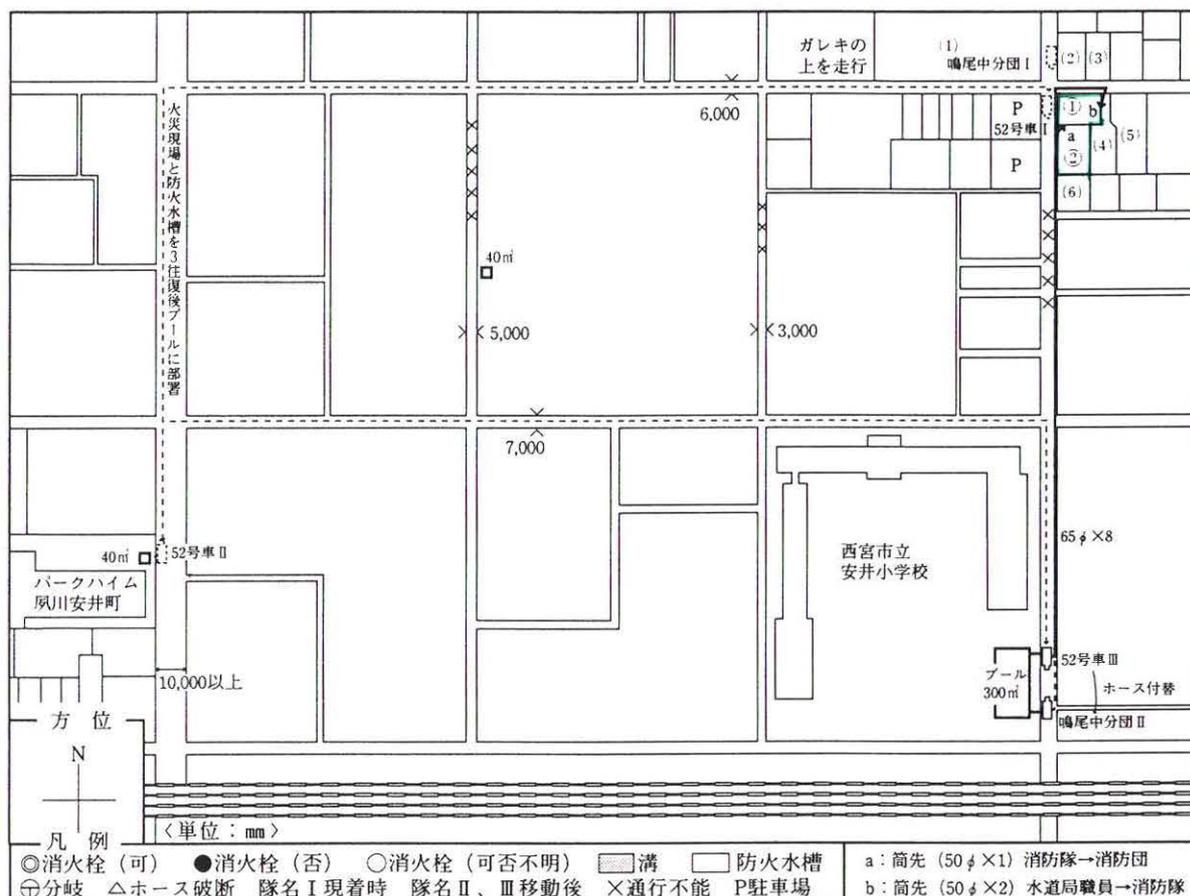
(消 防 隊)

- 119番通報により覚知、消防局からポンプ車1台及び可搬式動力ポンプを積載した資器材搬送車1台、安井分団が出動
- 可搬式動力ポンプは、現場から西約60mの防火水槽に部署し放水する。その後、防火水槽の水が無くなり、放水を停止する。
- ポンプ車は、現場から北西約120mの防火水槽に部署し、現場直近で分岐2線放水した。防火水槽の水が無くなり、さらに北約130mにある防火水槽に転戦部署する。

【火災活動事例⑨】

西宮市常磐町7 火災No.21

全 焼：1棟 122㎡	全 損：1世帯 2名
半 焼：	半 損：
部分焼：1棟	小 損：1世帯 5名



【特記事項】

（ヒアリング）

- ・地震発生により建物が倒壊し、生き埋めとなった居住者1名を付近住民が収容後、約6時間後に木造瓦葺2階建1棟1戸の専用住宅の建物中央部から出火
- ・付近住民が現場から南約170mの安井小学校プールから、バケツリレーによる消火にあたる。

（消 防 隊）

- ・現場近くで救助活動中のタンク車が自己覚知し、救助隊員を残し現場に向うと、火災は最盛期で南側へ延焼寸前であった。
- ・付近住民に小学校のプールまでのホース延長を依頼し、その間積載水補水のため、現場西側の防火水槽を往復し、消火にあたる。
- ・その後、鳴尾中分団が到着、プールに部署しタンク車のホースを分団ポンプ車に付け替え、1線放水する。

■ 救助活動

部隊の編成

同時多発の倒壊家屋から要救助者を生存救出するためには、発災から72時間（3日間）がタイムリミットであるとの危機感を強く持ち、文字どおり不眠不休の体制で救助活動にあたった。部隊の編成については119番通報、駆け付け要請の内容から優先度を判断し、救助工作車、救急車、広報車を中心として救助要請現場1件につき1台を基本的な編成とした。

救助活動の特徴

出動隊の現場指揮者は、輻輳する無線の中、指揮本部からの指令を受けながら、自隊の人員と保有資器材を最大限に活用するとともに、消防団員、警察官、自衛隊員をはじめ特に付近住民の支援を得ながら活動を展開した。

市域全域にわたる現場のため、各出動隊は転戦に転戦を重ね、昼夜に及ぶ現場活動となり、資器材の一部（チェーンソー、エンジンカッター等）は長時間の使用による故障及び燃料切れのため、使用できなくなることが多く、万能斧、バール、鋸などの器具を使用しての人力のみの手作業となり困難を極めた。

大規模倒壊現場

瓦礫の山と化したような耐火建物の大規模倒壊現場は、数隊の人員と保有資器材の使用だけでは、救出に長時間を要するため、人員の大量投入による人海戦術とクレーンなどの重機が不可欠であった。

人員の投入については、警察、自衛隊と協議し対応するとともに、重機は市災害対策本部に緊急要請し救助活動を展開した。

救出人員

発災の日の17日に救出した人員は518人（内生存救出330人）で、全救出人員658人（内生存救出348人）の78.7%（生存救出者の94.8%）を占める。

救助器具使用状況

重量物 排除	油圧ジャッキ	18
	可搬式ウインチ	1
	マット型ジャッキ	4
	大型スプレッター	6
	ワイヤーロープ	2

破 壊	万能斧	88
	ハンマー	29
	削岩機	1

切 断	油圧切断器	1
	エンジンカッター	23
	チェーンソー	27
	鉄線カッター	39
	空気鋸	3
	空気カッター	2

一 般 救 助 用	ロープ	23
	スリング	10
	カナビラ	2
	二連はしご	2
	平坦架	1

そ の 他 器 具	投光器	11	斧	32
	強カライト	123	鷹口	41
	ボール	234	つるはし	8
	スコップ	234	鎌	15
	鋸	224	鉋	4
	車載ジャッキ	39		

救出活動状況

月 日	出動件数	救出人員	出動台数	出動人員
1月17日	404件	518人 (生存) 330人 (死亡) 188人	414台	3,243人
1月18日	120件	97人 (生存) 16人 (死亡) 81人	166台	1,299人
1月19日	57件	38人 (生存) 2人 (死亡) 36人	135台	1,082人
1月20日	4件	4人(死亡) 4人	4台	20人
1月21日	7件	0人	10台	43人
1月22日	3件	1人(死亡) 1人	4台	20人
1月23日 2月7日	15件	0人	23台	307人
合 計	610件	658人 (生存) 348人 (死亡) 310人	756台	6,014人

■ 救急活動

救急活動の状況

震災直後は、救出依頼、応急処置依頼、一時避難所として各消防署へ付近住民が押し寄せた。このような状況下で、当日の救急出動は70件で90人を搬送した。

発災当日は救出が最優先で、救急隊も現場へ行き着くまでに途中で止められ、その場で市民の協力を得て救出作業を行い、救出された負傷者は、救急隊のみでなく、家族や近隣者など市民が直接医療機関へ搬送する状況であった。

軽症者については、近くの医療機関での受診を勧めるなど自力対応を求め、救急隊は重症患者の搬送を優先した。

これらの搬送にあたり、集団災害時のトリアージは、心肺停止傷病者の優先順位を後位にすると理解はしているものの、家族などを説得し、救出を最優先とする苦汁の決断を迫られた。そして救急救命士が特定行為を実施するにも、医師の指示を得られる状況ではなく、傷病者への輸液が必要と判断しても心肺停止以外の傷病者には実施できない現行法規の下、特定行為以外の応急手当を行い搬送せざるを得なかった。

救急出動状況

(件)

年 \ 日	17	18	19	20	21	22	23~31	1月 (17~31)	2月	3月	4月
平成7年	70	130	92	76	79	60	507	1,013	1,066	1,066	1,022
平成6年	31	31	24	20	32	29	249	416	816	920	894

(5月以降は例年並の件数となった。)

医療機関の状況

被害の甚大な地域の主な医療機関へは、各々1,000人が押し寄せる状況で、医療機関もカルテに記録として残ったのはごく僅かである。

各医療機関は屋外まで傷病者で溢れ、ロビーは勿論、廊下も両側に点滴された負傷者が寝かされて、幅40cm強のストレッチャーがどうにか通れる状況であった。

診察室、手術室は医療機器や薬品棚が倒れたり散乱している状況で、懐中電灯の下で縫合手術を行ったところもあり、医療機関も必死の対応が続いた。

そのような中、各医療機関で医薬品が底をつき始め、消防局へ医薬品や酸素の補給要請が相次いだ。

消防局では、関係業者に連絡をとり、医療機関の必要とする医薬品を調達に市外へ走り、17日夕刻から医療機関への配送を開始し、配送を終えたのは18日夕刻であった。

主に外傷・鎮痛対応医薬品15種類と輸液セット及び医療用酸素(10Lボンベ)を延べ6医療機関へ配送した。

その後も患者への給食調理用プロパンガス、ガスこんろの補給要請により、携帯用ガスこんろとカートリッジガスボンベを調達し、2医療機関へ配送した。

市外搬送状況

電気、ガス、水道などの途絶と医療用機器類の被災で検査、手術、血液透析などが十分にできない医療機関の状況から、救急活動は当日午後より、被災地外の医療機関への搬送が主となった。

搬送先医療機関選定は、各医療機関医師のこれまでの医療従事経験による人脈と消防局間の連携で確保できたのが殆んどである。

市外搬送状況（1月17日～31日）

県内搬送	県外搬送	計
129件	97件	226件

搬送の手段は、ヘリコプターと救急車であったが、救急車による市外搬送には長時間を要し、大阪府下への搬送は往復4時間を要する状況であり、県境・市境での中継搬送を行った。

■ ヘリコプターによる搬送

ヘリコプターは、震災当日午後に1回、挫滅症候群の患者を大阪大学医学部付属病院へ1名を搬送したが、発災当日、被災地から唯一のヘリコプター搬送であった。

ヘリコプター搬送にあたっては、搬送先の臨時ヘリポートの選定、収容先医療機関までの搬送手段など、送り出す側、受け取る側の医療機関及び消防本部とヘリコプター出動機関による調整に時間を要したが、1月31日までに17件の搬送を行った。

ヘリコプターによる搬送状況

	17日	18日	19日	21日	22日	24日	25日	26日	27日	28日	31日	計	
件数	1	1	2	1	1	2	3	2	2	1	1	17	
応援機関	大阪消防	大阪消防	自衛大阪消防隊	海上保安庁	中日本航空	名古屋消防	横浜消防	大崎玉消防	神戸消防	札幌消防	名古屋消防	横浜消防	9機関

■ 自主防災組織の活動

このたびの阪神・淡路大震災で、各地域の自主防災組織も災害現場などで救出、救護及び救援の活動を行った。

自主防災会の初動活動状況（各防災会からの報告）

防災会名	活動内容	反省点
用海地区団体協議会防災会	<ul style="list-style-type: none"> ・酒造会社からタンクを借り飲料水を確保した。 ・救援物資を配布した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・皆が被災しており人集めに苦労した。
今津地区自主防災会	<ul style="list-style-type: none"> ・炊き出しを行った。 ・救援物資を各避難所に配布するのを手伝った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・会員の殆んどが被災しており人集めに苦労した。
甲陽園連合防災会	<ul style="list-style-type: none"> ・避難所の確保をした。 ・備蓄食料（カンパン）などを配布した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・防災会のメンバーは高齢者が多く、もっと活動できる若い人の育成が必要 ・情報収集・伝達する防災無線の設置が必要 ・水、食料は2、3日分150人分程度の備蓄が必要
甲陽園連合防災会第3区防災会	<ul style="list-style-type: none"> ・初期の段階は、家族の安全確保に努めた。 ・出足が遅れたが、各自が活動した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自主防災として活動は十分できなかった。
甲陽園連合防災会六軒・五月ヶ丘防災会	<ul style="list-style-type: none"> ・避難所の確保をした。 ・負傷者の応急処置を行った。 ・地区内の被害状況を調査し、消防署に報告した。 ・食料の調達、炊き出しを行った。 ・情報を収集し、避難者等へ提供した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・避難所が遠く不便である。（避難所・大社中学校）
鳴尾東連合防災会	<ul style="list-style-type: none"> ・状況調査のため、区域内を巡回した。 ・ガス漏れをガス会社に通報 ・独居者宅などを巡回し、安全確認するとともに、水、弁当の配布を行った。 ・拡声器を使って、火災予防を図った。 	
鳴尾北連合防災会	<ul style="list-style-type: none"> ・メガホンで避難を呼びかけたり安否を確認した。 ・救出活動や倒壊物の片付け ・避難所での応援活動実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・トランシーバーの使用方法が不徹底であった。
甲子園口東連合防災会	<ul style="list-style-type: none"> ・震災時には、防災活動の機能は果たせなかった。 ・震災後、炊き出しや夜回りを実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・防災会の活動拠点が避難所のため、防災会の役員が集結する場所がなく困った。
甲武会防災会	<ul style="list-style-type: none"> ・活動は出来なかったが、1/18・19日に公営住宅の75歳以上の方に炊き出しを行った。 ・震災に関する情報チラシを貼付けた。 	
昭和園防災会	<ul style="list-style-type: none"> ・防災の活動は出来なかった。 ・震災後、役員が地区内の被害状況を見回った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・研修会で地震の場合は、火を消せと教わったが、局面では行動がとれなかった。
堤町防災会	<ul style="list-style-type: none"> ・各役員のうち連絡可能な範囲で、役員の手持ち班の人的被害状況の報告を求めた。 ・会長は直ちに町内を一巡、状況把握に努めた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・役員の手持ち班を確立していたが、電話がかかりにくかった。 ・規約や防災計画のマニュアルどおり行動することが困難であった。
広田防災会 丸橋八番防災会	<ul style="list-style-type: none"> ・被害が多くて、活動するような状態ではなかった。 	
生瀬地区防災会	<ul style="list-style-type: none"> ・地区の巡回、状況確認実施 ・震災直後の炊き出しなどを実施した。 	

■ 行方不明者の捜索（ローラー作戦）

発災から19日までの3日間で市消防局の全救出人員のほとんどにあたる653人（うち生存救出348人）を救出し、仁川百合野町、甲子園口北町の倒壊現場各1ヶ所を残し、ほぼ全市内での救出活動を終えたため、活動の主眼を行方不明者の捜索に重点を置いた活動（ローラー作戦）に切替えた。

これは、特に被害の甚大な市南部地域の市街地を7ブロック61地区に分割し、住民基本台帳を基礎資料として、全住居を対象に消防、警察及び自衛隊合同で徒歩による確認調査を実施した。

この結果を死亡者、避難者、医療機関収容者、建物損壊状況の各リストの照合、調査分析し、安否の不確定世帯を抽出した。この作業を繰り返し、最終的に安否を確認できなかった世帯の居住建物に重機などを投入し捜索するとともに、消防、警察による電話調査で安否を確認した。その結果、行方不明者なしを確認した。

ローラー作戦実施状況（1月22日から1月30日）

実施内容	事前調査	徒歩調査	調査分析	捜索活動	合計
	2日間	3日間	2日間	2日間	9日間
人員	消防 13人	消防 215人 警察 636人 自衛隊 580人	消防 20人 自衛隊 20人	消防 51人 警察 54人 自衛隊 34人	消防 299人 警察 690人 自衛隊 634人



第4章 消防団の消防活動状況

■ 消防団の組織（平成7年1月1日現在）

西宮市消防団の組織は、1本部33分団で消防団長以下732名（条例定数755名）、消防ポンプ自動車38台を保有している。

保有車両等

指 令 車	消防ポンプ自動車	小型動力ポンプ
1台	38台	12台

消防団員数

団 長	副 団 長	理 事	分 団 長	副分団長	部 長	班 長	団 員
1人	7人	1人	33人	37人	38人	111人	504人

■ 活動状況

市内33消防分団の団員は地震の発生後、自発的に分団詰所に参集、担当区域内の消火、救助及び負傷者などの搬送に従事した。

17日午後からは、消防局指揮本部の部隊編成の下、消防職・団員合同で消火、救助負傷者搬送などの各種活動を実施した。

■ 給水活動

救出活動が終了した20日からは、消防団車両に熊本県や滋賀県から調達した簡易タンク（500～1,000ℓ）を積載し、市内の断水箇所をきめ細かく回って給水活動を2月20日までの1ヶ月間実施した。

消防団の活動状況

	出 動 車 両	出 動 人 員
消 火 活 動	104台	647人
救 助 活 動	314台	3,328人
負 傷 者 等 搬 送	81人	(負傷者 38人) (死者 43人)
給 水 活 動	567台	2,191人

■ 消防団員の被災状況

地震発生時、自宅において家屋の全壊により2名が死亡し、倒壊した家屋の下敷きとなり負傷した2名は重症のため入院を要した。

■ 消防団車庫などの被害

市内の消防団車庫及び詰所38ヶ所のうち、11ヶ所が建物傾斜、外壁モルタル剝離などの被害を受けた。

団車庫の被害状況

分 団 名	被 害 状 況
上 大 市 分 団	建物傾斜、屋根瓦崩落などにより全壊した。
高 木 分 団	詰所基礎剝離、屋根瓦及び外壁崩落などにより全壊した。
建 石 分 団	鉄骨基礎3ヶ所剝離、外壁崩落などにより全壊した。
夙 川 分 団	建物傾斜、外壁クラックなどにより半壊した。
鳴 尾 北 分 団	屋根瓦崩落、外壁クラックなどにより半壊した。
段 上 分 団	外壁クラック、詰所入口サッシ破損による一部損壊。
門 戸 分 団	屋根瓦崩落
越 木 岩 分 団	詰所入口土間盛上、内壁崩落、外壁クラック、サッシ破損
船 坂 分 団	棟瓦崩落、外壁・内壁亀裂、石垣及び土間亀裂
芦 原 分 団	シャッター破損
用 海 分 団	車庫西側部分沈下、土間亀裂



消火作業中の消防団員（甲子園口北町）



給水活動を実施する消防団

■ 各分団長の行動

団長以下33分団の団員は、通信連絡が途絶され消火栓が破壊し、瓦礫と化した街で、迫り来る炎と助けを求める声の中、火災の鎮圧と人命救助を絶対使命とし、自ら被災しながらも死力を尽くして闘い、延焼を最小限に留め、倒壊家屋から多数の人命を救い出し、市民は勿論、全国の消防関係者から地域防災の手本として高い評価を得た。

過酷で長かった17日の震災直後に素早く行動を起こした各分団長の行動を紹介する。（3月30日開催の分団長会議での記録）

● 浜脇分団長

阪神西宮駅周辺の倒壊家屋現場で救出活動を実施。救出用器材が不足し、消防局にジャッキを借りに行くが、全て使用されて無く、救出に困難を極めたが、11人を救出した。その後、8時半に発生した戸崎町の火災に出動。引き続き、上甲子園の消火活動を実施した。

● 用海分団長

すぐさま、与古道町の倒壊家屋現場に出動し、3人を救出。その後、消防局隊と合同で市庭町の救出業務に従事し、14時頃女性1人を救出。16時頃、戸田町の火災を覚知し出動。鎮圧後も合同で産所町の倒壊家屋現場で18時頃に男性1人を救出した。

● 安井分団長

直後に発生した神明町の火災現場に出動。消火作業とともに付近の倒壊家屋現場で15人を救出し、焼死体2体を収容した。鎮圧後、青木町の火災に出動。周辺で10人を救出し、消防局隊と現場交替し、当日は午前1時過ぎまで残火処理を実施した。

● 建石分団長

車庫前にガレキが散在し、車両を出動させるのに苦労した。弓場町と郷免町で火災が3件発生していた。弓場町6番の消火活動に当たるとともに、周辺の倒壊家屋現場から18人を救出した。団員がほぼ集まったのは昼頃。弓場町の火災鎮圧後、郷免町の火災の残火処理を実施した。

● 芦原分団長

6時過ぎに分団車庫へ行くと、既に団員が3名ほど集まっていた。神明町の火災現場に向かおうとしたが、倒壊家屋からの救出要請者が殺到し、各団員の手を引き哀願するため消防車をそのままにし、西福町他で10人を救出した。各現場には参集した団員も加わった。その後詰所に戻り、他の団員が出動していた青木町の火災現場に向かった。

● **大社分団長**

広田町の火煙発見。参集途上の消防局員と協力し、マンションの防火水槽から取水し放水。民家が密集し、火勢も強いため、水槽水では不足すると考え、東川からも取水し、ある程度鎮圧してから現場西に移動し、積載していたPP土俵20袋で川の水を堰き止め放水した。途中、燃料がなくなったため灯油40リットルで代用、ガソリンスタンドで軽油の購入を命じたが、開いておらず遠方まで捜すのに苦慮した。

● **夙川分団長**

直ぐに詰所に行くと全員が集まっていた。車両は車庫から出し、火災に備えた。2班に分け、阪急の南北地区で救出活動を実施した。雲井町、殿山町他で13人を救出した。倒壊家屋からの救出は困難を極め、付近住民よりチェーンソーを借用し棟木を切り救出した。南越木岩町では消防局隊と合同で1人救出した。

● **越木岩分団長**

朝から区域内で救出活動に従事。樋之池、南越木岩、豊楽、菊谷、西平町他で付近住民の協力を得て、また民間の重機を借用し13人を救出した。その後、消防局と合同で相生町で3人を救出した。

● **段上分団長**

農家が密集した地域であり、団員20人中16人の家が全壊した。団員の隣近所の救出活動に忙殺されたため、消防車は出ていない。段上町1丁目から6丁目までの倒壊家屋からの救出は15人を数えた。道路損壊や通行障害が激しく、救出活動は全て徒歩で実施した。夜は報徳学園の消火活動に従事。段上小学校のプールを使用した。

● **門戸分団長**

7時過ぎに門戸岡田町で発生した火災に16人で出動。参集途上の消防局員と合流し、消火栓が断水のため、四十谷川を倒壊家屋の瓦礫で堰き止め、1戸のみで延焼を阻止した。消火活動中、丸橋町の救出要請が入り、半数をそちらに向かわせた。昼過ぎに下村副団長から上大市地区の被害が甚大で転戦するよう連絡が入り、現場へ出動し5人を救出した。

● **上ヶ原分団長**

団員が各地区に点在しているため、招集後に各地区の被害状況が即座に収集できた。付近住民の応援を求め救出活動を実施した。関西学院大学の下宿生が多い地域であり、上ヶ原三〜十番町一帯で、学生15人、住民6人を救出した。

● **下大市分団長**

すぐさま団員を招集し、担当区域内の下大市東、西町、甲武台住宅、門前町一帯で救出活動を実施した。2階建文化住宅の1階部分が軒並み潰れていたり、「く」の字に折れており、救出活動は困難を極めたが15人を救出した。

- **神呪分団長**

分団車庫のシャッターが壊れていた。区域内の生き埋め現場は数多く、倒壊家屋の下から助けを求める声があるところから救出活動を実施し、神呪、上甲東園、松籟荘1番で6人を救出し、5人の生存救出に成功したが、1遺体は家族に確認してもらった。

- **上大市分団長**

新幹線の架橋が落下し、全壊家屋が多く生き埋めは40人程発生した。1分団のみで地区内の救出に対応したため、活動は困難を極めたが、上大市2丁目を中心に10人を救出した。救出道具がなく、金テコ、ロープで行った。消防局や団本部に連絡し、応援を求めたかったが、連絡手段がなかった。

- **今津分団長**

6時過ぎには全員が集合していた。周辺現場の救出活動に団員5人が出動し、他は詰所で火災に備えた。今津水波、久寿川、二葉町の4箇所生き埋め情報があり出動し、8人の救出に成功した。その後、上甲子園の火災現場に出動した。

- **津門分団長**

団員に連絡し、6時30分頃集合した。浜田町の生き埋め現場に出動し、曙町の2ヶ所で6人救出した。残りの団員は津門周辺のパトロールを実施。その後、津門仁辺町の消火活動に出動。引き続き消防局より上ヶ原方面の救出要請があったので出動した。救出後、再び津門仁辺町の再燃火災に出動した。

- **高木分団長**

分団長自身が生き埋めとなった。すぐに招集のサイレンは鳴っていた。1時間後に救出され詰所に赴いたところ、団員は全員救出活動のため出動していた。農家の梁は大きいため、救出は困難で詰所に置いていたジャッキを活用した。高木東、西町で14人救出した。7時頃に詰所西側で火災が発生したが、事前にポンプ車は農業用水に部署していた為慌てなかったが、約400メートルのホース延長に苦労した。

- **瓦木分団長**

6時頃、倒壊家屋の下敷きとなった重傷の女兒を消防車で病院搬送。その後、大屋町、瓦林、中島町の倒壊家屋から救出活動を実施。困難を極めたが8人を救出した。救出後、甲子園口北町の火災に出動し鎮圧後、無線傍受機で高木西町の火災を覚知し、再び出動した。

- **甲子園口分団長**

JR駅前のホーキビルが倒壊。6時頃ホーキビルに向かったが途中で救助要請があり、なかなかホーキビルに到着できなかった。ビルの北側から出火したため、救出にかかっているものはその場に残し、団員5人で消火に向かった。

駅前の防火水槽を使用。応援部隊要請のため、団員一人を消防署に向かわせた
が、応援部隊はすぐには来なかった。その後消防局より可搬ポンプを積載した
軽四輪車が到着し、新堀川に部署したが液状化のため、途中焼き付き自隊が新
堀川に変更し放水を続け、夜中の3時過ぎに鎮火した。救出は、甲子園口、二
見町一帯で12人救出した。

● **上甲子園分団長**

近くの文化住宅が倒壊し3人ほどで救出活動を実施。近隣の文化住宅でも要
請があり7人を救出した。また倒壊した文化住宅より出火し22時まで消火活動
に従事。断水の為上甲子園中学校横の川に水利部署したが、水が少ないため車
載のブルーシートで水を堰き止めて放水した。夜中に再燃したため再出動した。

● **鳴尾中分団長**

鳴尾市場南の民家が3軒倒壊したため、半数の団員で救出に当たった。2人は
生存救出したが3人は死亡していた。その後、鳴尾町5丁目の文化住宅等で救
出活動を実施した。これらの救出には、東、西、小曽根分団から応援してもら
い合計7人を救出した。救出後、消防局の指示により市民グラウンドにヘリ輸
送された血清を取りに出動した。

● **鳴尾西分団長**

すぐに八車副団長の自宅に行き、鳴尾市場南の救出現場に応援出動。その後
国道43号線南の倒壊現場に出動し、消防局隊等と合同で救出活動を実施し3人
を救出した。その後消防局に行くよう指示を受け赴き、午後からは広田町他2
件の救出現場に出動し2班に分かれ活動し男性と老人夫婦を救出した。ここ
でも消防局隊と行動を共にし、死亡収容者は病院に搬送し検死を受け、中央体育
館の遺体安置所まで搬送した。

● **鳴尾北分団長**

甲子園五番町で火災が発生したため、詰所に行き招集をかけた。車庫の
シャッターがなかなか開かなかったため、シャッターを壊して車を出した。現
場では消火栓が使えないため、防火水槽に部署し放水した。火勢は屋根を突き
抜け最盛期であった。2線放水で防御したが鎮圧まで時間がかかった。その後
花園町の救出現場で消防局隊と共に活動していたが五番町の火災が再燃したた
め反転した。

● **小松分団長**

鳴尾北の応援要請があり、五番町の火災に出動した。消火活動中に上甲子園
3丁目の火災が発生し、消防局隊の指示で転戦した。火災鎮圧後、鳴尾消防署
長の指示で花園町の救出現場に出動し消防局隊と共に活動した。

● **小曽根分団長**

6時50分に鳴尾市場南の救出現場に出動し1人救助。その後国道43号線南の

倒壊現場に出動し救助活動。その後、上甲子園3丁目の火災現場に出動し、次に甲子園口北町のホーキビル現場へ、その後甲子園口3丁目の救出現場に出動し1人救出した。救出後、清水町、二見町の倒壊家屋現場に出動した。

● **鳴尾東分団長**

区域内は液状化が激しいため、道路の損壊状況調査を実施。終了時に鳴尾市場南の救出要請が入り出動。当現場での救出者を車両で兵庫医大病院まで搬送し、引き続き国道43号線南の倒壊現場の救出活動の応援。その後の指示を団長に仰いだところ、消防局に集結するよう指示があったため局に到着。そこで甲子園口3丁目へ出動指示を受け出動し、小曾根分団と合同で作業実施。ここでも、当現場の救出者を兵庫医大病院まで搬送した。

● **名来分団長**

区域内を巡回し被害状況調査実施。塀の倒壊や屋根瓦の落下があった。負傷者はいなかったため団員の招集はしなかったが、昼頃に団長から消防局に集結するよう指示があり出動した。局の指示により浜脇方面に出動。消防局隊と行動を共にし2人生存救出。3人死亡救出。その後苦楽園方面の倒壊現場に出動した。

● **下山口分団長**

区域内を巡回し被害状況調査を実施。塀の倒壊や灯籠の倒壊があった。団員の招集はかけなかったが、昼頃に指示があり消防局に出動した。指示により安井町の倒壊家屋現場に出動し、現場付近にいた自衛隊と合同で作業を実施。梁の下敷きとなっており困難を極めたが1人生存救出した。その後自衛隊と共に投光器を使用し付近の搜索活動を実施した。

● **上山口分団長**

すぐさま、三役に連絡し6時30分に27人の団員招集を完了した。車両で区域内を巡回し、狭い道は3～4人が組となり調査を実施した。通行障害物件を除去し8時に一旦招集を解き幹部9人が詰所に残り、山口分署と連絡を取り合い他団員は自宅待機とした。地域内の民生委員と連絡を取り独り暮らしの老人宅を訪問し無事を確認した。指示により消防局に集結し救出現場への出動要請を受けたが地理不案内のため消防局員1人が同乗し弓場町、郷免町で2人、安井町で2人それぞれ救出した。

● **中野分団長**

6時10分に詰所に出動した。団員は自主的に16人が参集した。午後に消防局に出動し指示により江上町、青木町の倒壊家屋現場に出動した。地理不案内のため消防局員1人が同乗し江上町で老女を生存救出。青木町で2人死亡救出した。

- **船坂分団長**

6時過ぎに団員2人と共に区域内を巡回し救出要請があり消防局隊と合同で活動したが救出済みを確認した。とりあえず給水作業準備にかかり、婦人会に炊き出しを指示した。本部の指示により消防局に行く途上、安井町Nマンションで住民から救出要請を受け上山口分団金仙寺班と共に活動実施。建設協会2社の協力を受け2人を生存救出した。後1人残っているとの情報を得るも重機でないと無理であり、要請すると共に救出活動を継続したが重機が調達できず、0時30分関係者と調整の上、到着した消防局隊と交代した。

- **生瀬分団長**

詰所備え付けのサイレンが使用できないため車両のサイレンで招集した。ガス漏れが発生していたため火気使用についての広報をしながら区域内を巡回した。生瀬東町で生き埋め発生との報があり出動し、9時過ぎに4人を救出した。その作業中、宝生ヶ丘でも生き埋めがあるとの情報を得たので、団員の半分を回して1人を救出した。その後、消防局に向かい千歳町の倒壊家屋現場に出動し6箇所の現場で6人を救出した。

- **名塩分団長**

神社の灯笼が倒れ下敷きになった人がいるとの情報があり救出のため出動した。既に死亡していたが収容後地域内の巡回を実施。午後から本部の要請により消防局に参集し局員1人が同乗し夙川方面で救出活動を実施。救出した女性をポンプ車で病院搬送した。

第5章 応援及び支援

■ 警察

発災直後から市内の西宮、甲子園両警察署は倒壊家屋からの救出などについて、消防局と連携をしながら活動が続け、甲子園口北町のビル倒壊現場や仁川百合野町の崖崩れなどの大規模な現場に多数の人員を投入し、救出活動を行った。

■ 自衛隊

発災当日の17日8時20分に近傍派遣により、陸上自衛隊伊丹駐屯地から第1陣の自衛隊員（第36普通科連隊60名）が西宮市に向け出発、9時10分到着救助活動を開始した。17時には増援部隊も到着し、警察と同様に大規模倒壊現場に主力を投入した。

■ 消防機関の応援

震災当日17日の11時3分に三田市消防本部が県内第1陣として、また12時35分県外から第1陣として大阪市消防局が到着、19日までの3日間他都市消防機関から献身的な消火、救出、救急活動等の応援を受けた。

他都市消防機関の被応援状況

月 日	応援機関	台数	人員	活動内容
1月17日(火)	宝塚市消防本部	4台	9人	(消火・救急・救助)
	三田市消防本部	2台	6人	(救助・物資搬送)
	猪名川町消防本部	2台	7人	(消火・救助)
	大阪市消防局	4台	25人	(救助活動)
	多紀郡消防本部	1台	4人	()
	和歌山市消防局	2台	7人	()
	伊丹市消防局	1台	4人	()
	宝塚市消防団	1台	5人	(消火活動)
小計	7本部 1消防団	17台	67人	
1月18日(水)	尼崎市消防局	1台	4人	(救助活動)
	川西市消防本部	1台	5人	()
	多紀郡消防本部	3台	10人	(救助・物資搬送)
	猪名川町消防本部	4台	13人	(救助活動)
	尼崎市消防団	1台	5人	()
	伊丹市消防団	1台	7人	()
川西市消防団	1台	6人	()	
小計	4本部 3消防団	12台	50人	
1月19日(木)	尼崎市消防局	1台	4人	(救助活動)
	川西市消防本部	1台	4人	()
	三田市消防本部	1台	4人	()
	多紀郡消防本部	1台	3人	(救急搬送)
	氷上郡消防本部	1台	5人	()
	猪名川町消防本部	2台	7人	(救助活動)
	豊中市消防本部	1台	3人	(救急搬送)
小計	7本部	8台	30人	
合計	11本部 4消防団	延べ37台	延べ 147人	

■ ボランティア

発災から1週間後の1月25日から26日の2日間、財団法人・日本防火協会（東京都）が市内小学校などの避難所に近畿圏内（京都、滋賀、大阪など）の婦人防火クラブ員の協力を得て、心暖まる豚汁の炊き出しを受け、避難者から感謝された。

■ 海外からの応援

フランス災害救助特別隊（バルブラン隊長以下61人、救助犬4頭）が21日来日し、甲子園口北町のビル倒壊現場で警察、消防局とともに救助作業を実施した。同隊は22日以降の3日間は神戸市の災害現場で活動し、1月25日帰国の途についてた。



自衛隊による給食活動状況（六湛寺町）



婦人防火クラブ員による炊き出し
(安井小学校)



フランス災害救助特別隊（西宮警察署）

第6章 復興に向けて

「安全で安心のできるまちづくり」を目指し、西宮市震災復興に向けての各事業を推進するための実施計画を策定した。

■ 消防車両の整備

- ・小型動力ポンプ付積載車購入（7年度実施） 10台
- ・救援車購入（7年度実施） 4台
- ・高規格救急車（特殊）更新（7年度実施） 1台



小型動力ポンプ付積載車

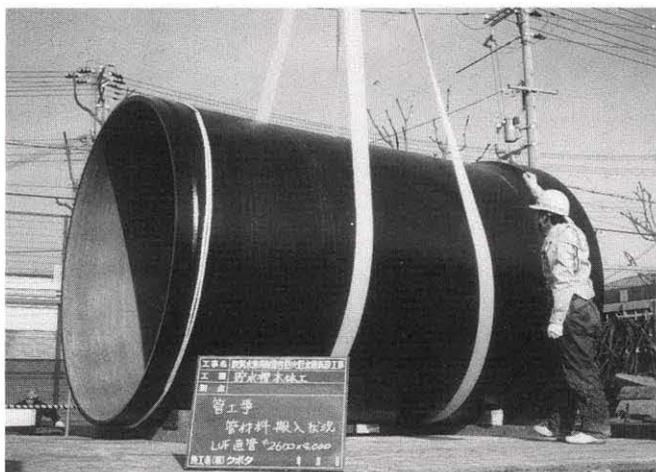


救援車

■ 100㎡防火水槽の整備

当市の防火水槽は、平成7年4月1日現在930基（公設364基、私設566基）あり、うち100㎡防火水槽15基が設置されているが、震災時断水により消火栓が使用できず、防火水槽などの有効性が実証された教訓から、防火水槽整備計画を策定し、消火栓を除く防火水槽などの消防水利が未設置20区域に毎年1基以上の耐震性100㎡防火水槽を設置する。

- ・耐震性100㎡防火水槽設置（7年度実施） 2基
- ・飲料水兼用型100㎡貯水槽（7年度実施） 1基



飲料水兼用型貯水槽の搬入状況（今津中学校）



飲料水兼用型貯水槽の標識（今津中学校）

■ 通信施設の整備

- ・全国共通波の整備
- ・消防局と医療機関とのネット・ワーク
- ・携帯無線機（災害時参集職員用）の整備
- ・消防緊急情報システムの導入（平成9年4月運用開始）

■ 自主防災組織の育成・強化

- ・新規防災会の結成
- ・防災会への防災器材の寄託

■ 救助資器材などの整備

- ・個人装備の充実
- ・高度救助資器材の導入

■ 緊急消防援助隊の発足

- ・国内で発生した大規模な災害時における全国の消防機関が相互に迅速な援助体制を確立する緊急消防援助隊が平成7年6月30日発足され、当局も消防部隊、救助部隊、救急部隊に各1隊の3隊を登録した。

■ 西宮市震災対策訓練の実施

- ・震災後1周年にあたる平成8年1月17日5時46分、神戸市消防局、尼崎市消防局、芦屋市消防本部、警察及び自衛隊並び海上保安部などの参加協力を得て、初動体制確立訓練・現地派遣訓練・情報収集訓練・初期消火訓練・救出救護訓練・サイレン吹鳴訓練・同時多発火災消火訓練を実施した。

また、市民、学校及び各事業所においても9時のサイレンによって、避難や初期消火などの自主訓練を実施した。



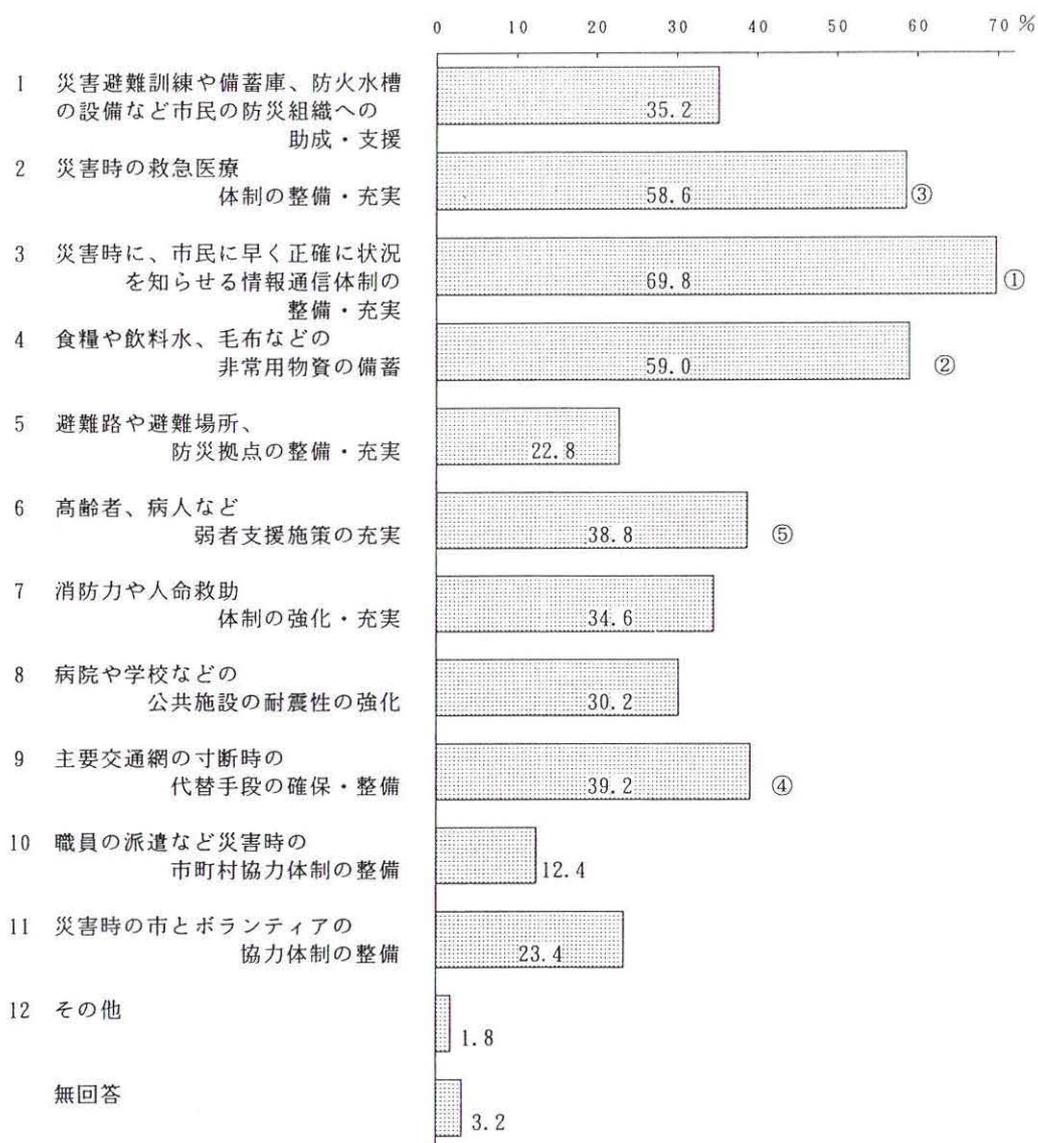
西宮市震災対策訓練状況（西宮浜四丁目）

■ 市民意識調査の実施

西宮市では、大震災への防災対策の基礎資料とするため、平成7年9月に20歳以上の市民5,000人を無作為抽出して、市民意識調査を実施した。有効回収率は70.5%で過去最高の回収率となり、市民が震災復興によせる市政の期待のほどをうかがわせた。

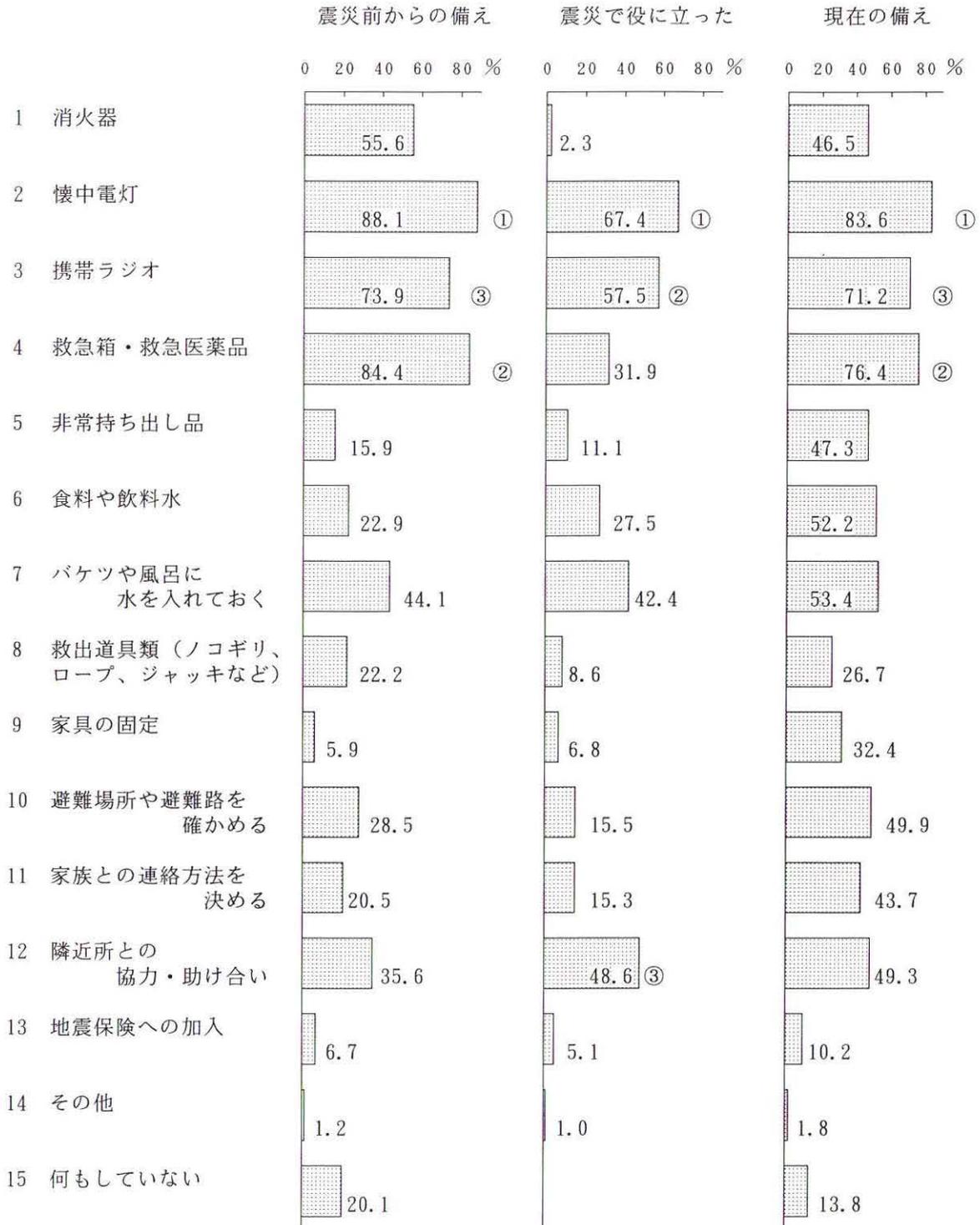
質問項目は27項目のうち消防関係の意識調査結果は次のとおりであった。

(質問) どのような防災対策を西宮市に希望されますか。特に重点をおくべきこと、5つ以内を選んで下さい。(複数回答)



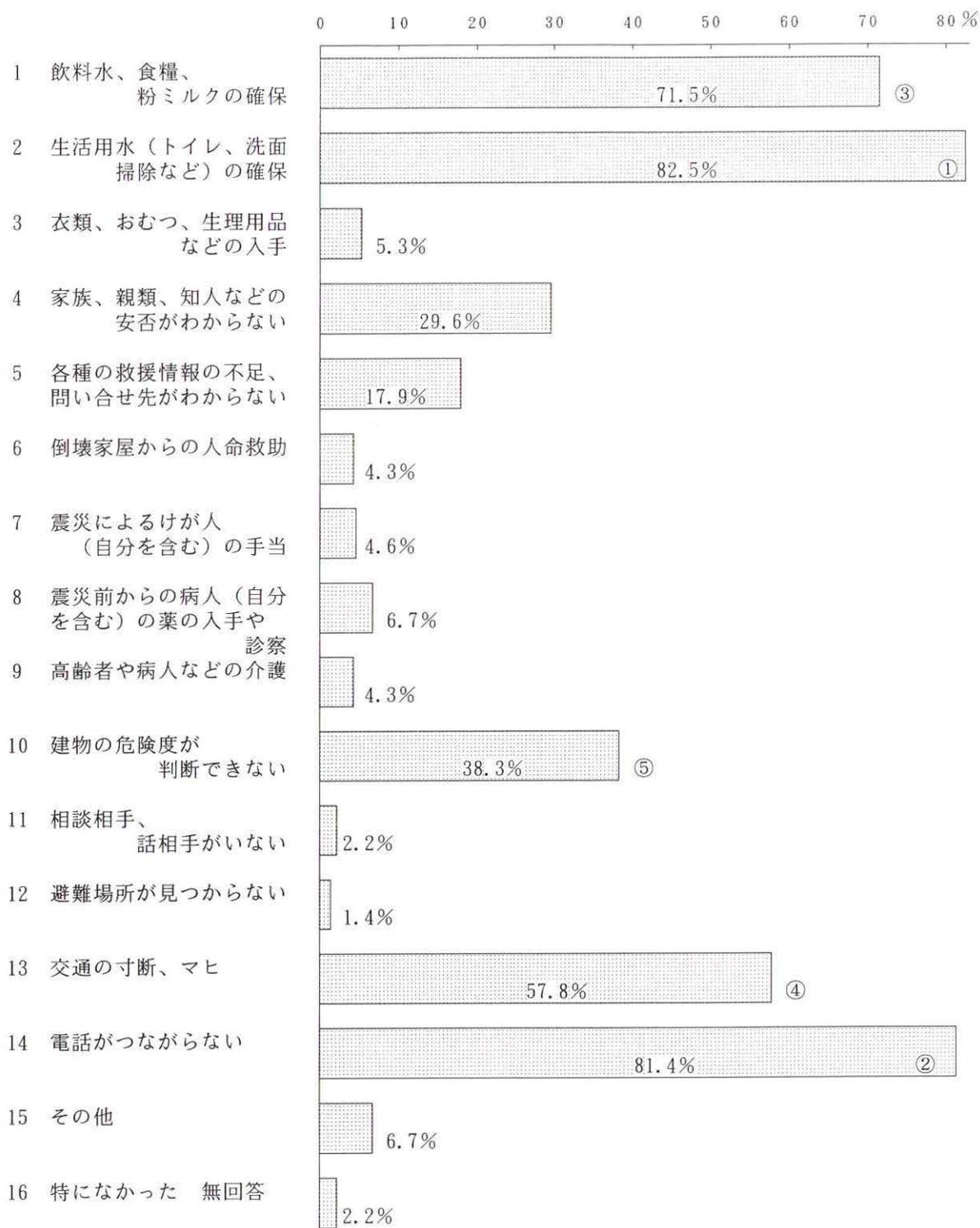
総回答数 ～ 15,107

(質問) お宅では、災害にそなえて、どんなことをしておられましたか。
それは今回の震災で役にたちましたか。
また、現在どんなものをそなえましたか。 (複数回答)



(質問) 震災後、どんなことでお困りになりましたか。

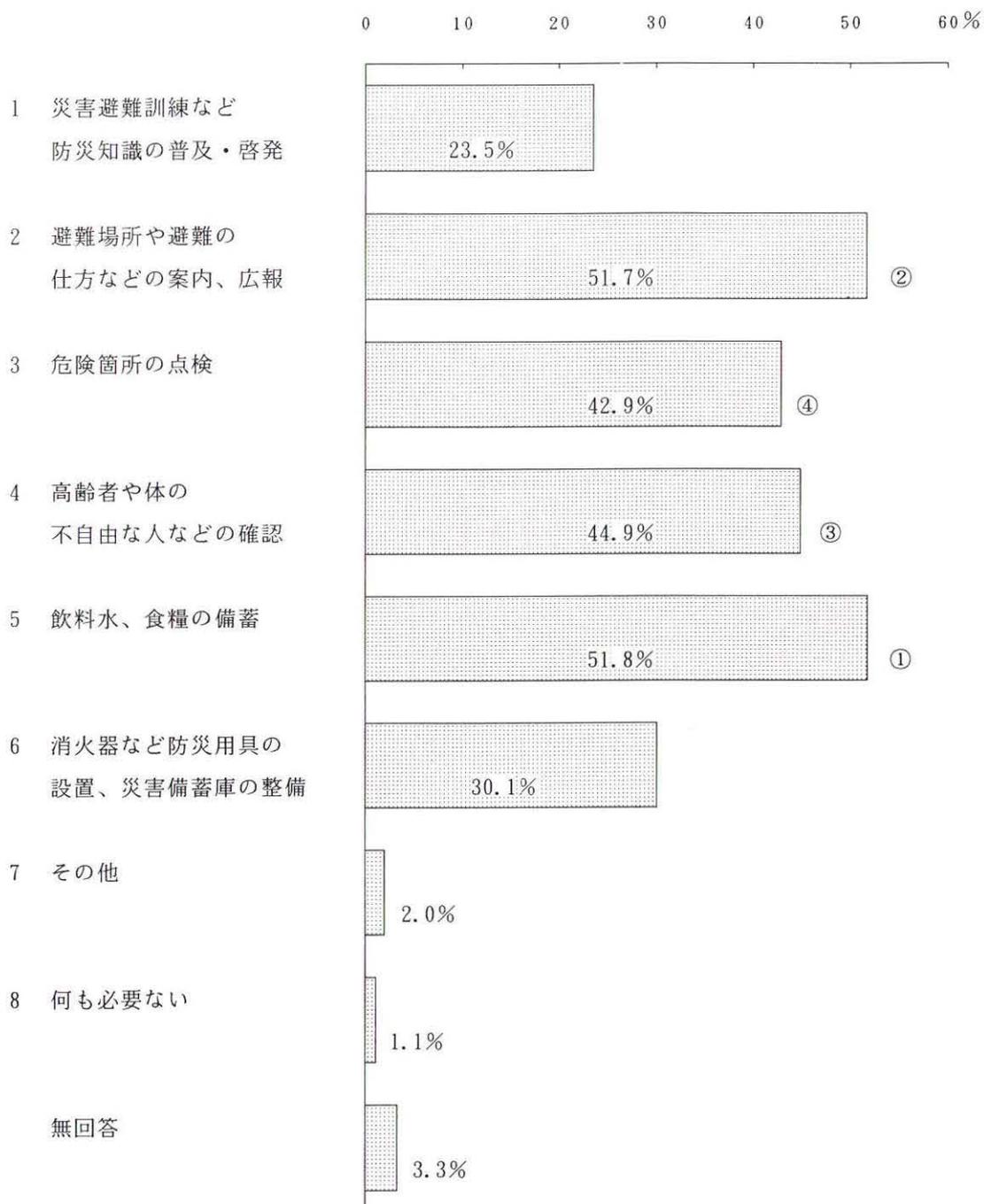
(複数回答)



総回答数 ~ 14,691

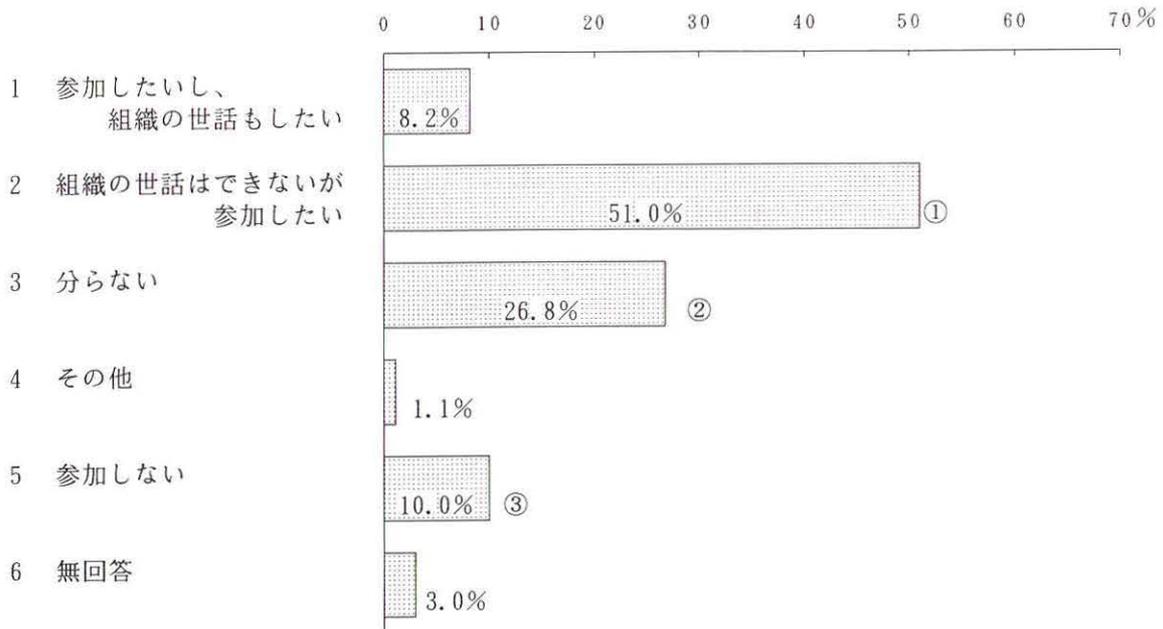
(質問) あなたが、自治会や町内会に取り組んでほしいことは何ですか。

(複数回答)

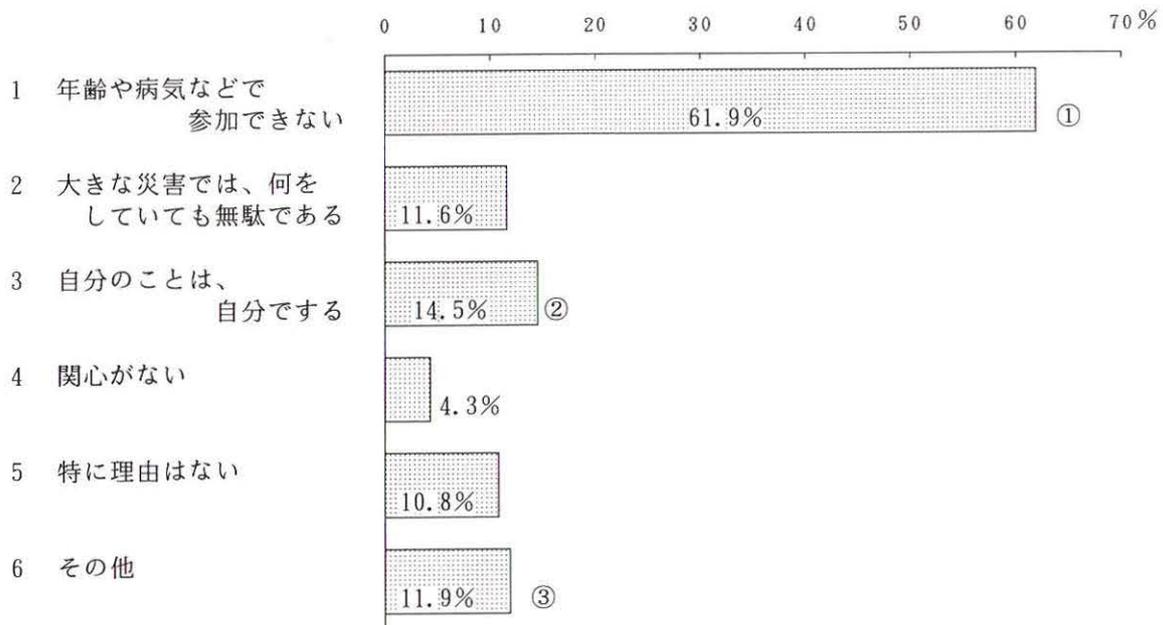


総回答数 ~ 8,854

(質問) あなたは、お住いの地区に防災知識の講習や防災訓練などを皆で行う自主防災会ができれば参加されますか。(複数回答)



◎ 「参加しない」と回答した理由を2つ以内の複数回答で尋ねた。



■ 震災活動消防職員・団員の手記

※ 消防職員の所属は震災当時

人命最優先・最善の行動をとれ！

管 制 室
福 山 光

それは仮眠中のこと。

「何や！どないしたんや、止れ……」

「ガクン・ガクン」といった突き上げるような激しい揺れと、形容し難い轟音の中、私の上に重たく覆い被さった物があった。

それが三連のスチール製ロッカーであることと、尋常でない事態に陥ったことを察知するのに数秒たりとも要しなかった。が……

平成7年1月17日午前5時46分、私はこの時、わずか20秒足らずのこの揺れが死者5,502人、負傷者約41,500人、全半壊家屋193,000戸余り、経済損失10兆円以上という未曾有の大地震発生の瞬間と知る由もなかった。

発生の前日、すなわち1月16日午前9時から就勤した私は、極めて平穏なうちに、後数時間で24時間の勤務を終えようとしていた。

当日の勤務員は7名、指令員2名を除き他の4名と私は、仮眠室の一番出入口に近い位置で仮眠していた。

覆い被さるロッカーと雑品の中からはい出すと室内は真っ暗、足元常夜灯すら消えている。

「停電だ！」普段なら何の苦もなく、仮眠室から管制室まではほんの10メートルばかりを進めばよい。しかし、この時ばかりは勝手が違っていた。庁舎そのものが修羅場と化していた。

「危ない。足元を固めなくては」と思った私は上履きではなく、短靴を着用した。

わずか10メートルの距離をどのように進んだのか、定かな記憶を持ち合せていないのは、大きな興奮と動揺のせいだろう。

それはもう「必死」、今想えばこの単純な言葉程、当時の私の心情を表すのに当を得た言葉はない。

管制室に入ると、様相の一変した室内に勤務員2名の大声と、全てが点灯、異様に光る119番着信ランプが飛込んできた。

「119は生きている。」

「とにかく明りと無線を」私は別室消防課へと走り、戦場さながらの室内から、強力ライト1個と携帯無線機2台を見つけ出し、すぐさま管制室へと駆け戻る。この間数分、まさしく「火事場の底力」。この時程、自分の行動が速やかだったことはかってなかったかも知れない。

無線統制卓に就くと「にししょう〇〇、××現場に向かう」と、ある小隊長の声。

「ヨシッ！基地局はOKだ。」と、しかしこの時、この先数十時間にわたり、部隊と無線統制に就くことになるうとは到底考え及ばないところであった。

他の勤務員は119番の対応にフル活動、専用線の確認を指示すると、「OK」との報告。

119番・無線基地局・有線と消防の生命線は絶たれていない。

あとは我々だ。そう思った時、不思議と自分の中にある種の落ち着きを覚え、強力ライトの余光を頼りに、できる限りの記録を残すべく散乱する中から雑用紙をかき集めた。

各署の受付には何十人、何百人が救助を求めて押し寄せているという。

その中、「管制室！ 部隊への指示を。」の各小隊長の声、時を同じくして「各隊に告ぐ。全ての事態に人命救助を最優先として最善の行動をとれ。」

これが全隊に向けて発した、管制室指示としての私の第一声である。

「アパートが全壊、7名程生き埋めがいる。」

「ガスが洩れている。非常に危険。」

「ビル崩壊。生き埋め多数。声がしている。」

「新幹線の橋脚崩壊、脱落。」

「国道の陸橋が倒壊、落下。」等々……

信じられない。まさに悪夢としか言いようのない信じ難い情報が矢継早に入ってくる。

「生きている。応援隊を……声がしている。」

「燃え移る。応援を……」それはもう絶叫に近かった。

残念だが私は無論、おおかたの職員の経験も、知識も、はたまた西宮消防の消防力をもはるかに凌いだ事態と認めざるを得なかった。

「全ての隊が出動活動中。応援隊は出せない。各隊は近隣住民と協力して、でき得る限りの救助作業にあたれ。」何度、何度、この言葉を繰り返したことだろう。

「何とかしたい。応えてやりたい。」
応援要請に応えられないもどかしさ。

……無念……ただ、ただ 無念……

次々と参集する非番職員。

西宮消防局管制室に指揮本部が設置されたのは、いち早く駆けつけた消防局長を中心に、平成7年1月17日午前6時20分のことである。

直ちに非常招集がかけられたが、この時すでに各職員は、自発参集としての行動を起こしていた。

また、事の重大性から自衛隊の派遣要請の指示を受けるも、受入側の機器の障害からこれを断念せざるを得なかった。

立続けに入る119番と、各隊からの要請に可能な限り対応したい。車両部隊のみならず徒歩部隊も編成される。

「目前に生き埋めがある。人と機材があれば生存救出可能」現場からの焦躁感溢れる声が管制室内に流れるが、分かっていてもこれが不可能。

……激しいジレンマに包まれる。……

一方、119番の緊急通報受信にも、苦渋の対応を強いられる。

何時間経ったのだろう。いつまで続くのだろう……この事態は無限なのだろうか？

一瞬そんな思いが脳裏をよぎる。

気がつけば就勤後3日目の朝。家を守る妻子のことが気掛りだ。妻は子供は大丈夫だろうか。せめて安否だけでもと膨らむ思いは、この渦中にあっても払拭することはできなかった。それは覚悟の職業選択だ。と批難されても、今の私は甘受するつもりでいる。

わずか20秒足らずの「揺れ」が残した爪痕は今なお深く残っているが、発災以後私は、いや西宮消防は一生懸命だった。できる限りのことはやっ

た。決して満足感はないけれど、それでも西宮消防は一生懸命頑張った。

反省すべき点もある。

消防団の動きの把握、道路情報の早期収集、119受信後の優先順位の決定、機器の耐震固定化等々……だがここでそれを列挙しようとは思わない。

ただ教訓とすべきは、近畿圏で大地震は起こらない。この慢心にも似た気持ちは戒めなければならない。どの地にあっても十分起こり得る可能性がある。今となっては決して「対岸の火事」ではない。

このことは誰もが、肝に銘じておかななくてはならない事実だということである。

平成7年1月17日の反省

整備センター

村本保夫

1月17日早朝、激しい縦揺れに続く横揺れにより起こされたが、一瞬何が起こったのかわからず、ダンプカーか飛行機が家に突っ込んできたと勘違いする程の激しさであった。揺れが治まるまで金縛りにあったごとく身動きできなかったが、一呼吸して妻及び子供3人の無事を確認して安心した。

家族全員は2階で寝ていたが、真っ暗闇の中、転倒している家具類により歩くこともままならず手探りで階下に降りたものの、足の踏場も無いほど部屋は散乱しておりどうしたら良いのか思案していたところ、幸い子供が小さなポケットライトを持っていたため、これを頼りに懐中電灯を探し出し、家の中を点検しようと各部屋のドアを開けようとしても大半のドアは開かず、体当たりしてようやくこじ開け、取り急ぎ電気のメインブレーカーを切った。

ここでまず第一の反省

「備え在れば憂いなし」の諺の通り各種訓練等を通じて、市民に防災意識の啓発に努めてきたが、いざ自分のこととなると家具の転倒防止対策、非常灯の把握等何一つ実行できていなかった

ことを深く反省している。

それから表に飛出してみると、倒壊した家も無く、また救助を求める声も無かったため、地震の被害はそれほどでも無かったと思い込み、剥がれた外壁の後片付けをした。

第二の反省

近隣の状況から、被害は大きくないと思った判断の甘さ。

表の片付けをしていた最中（時間ははっきりしない）、東の空から黒煙が上昇しているのを発見、とっさに火災が発生、それも我が家から2軒隣位と直感（実際は4軒隣であった）、急いで119番通報するも通じないため向いの人に続けて電話するよう依頼し、火災現場に向ったところ既に初期消火の域を脱していたが、近所の方が消火器で消火を試みていた。

私はこのままでは延焼拡大してしまうと感じたが、頼みの消防車が来なければ打つ手が無い。しかしこのまま手をこまねいて見ている訳にも行かず、とりあえず消防車が来た場合の水利を確保しようとして自宅の西を流れている四十谷川をせき止めることを考え、行動に移った。幸いにもせき止める物には不自由しなかった。…落下した隣の家の玄関のひさし、壊れたブロック塀のかけら…これらを近くに居合せた人と協力して川に投込み堰を築いた。（この時点では、私は断水していることを知らなかった。）

そうこうしている内、けたたましいサイレンの音が聞こえた。「消防車が来た。これで消火できる。」と内心安堵した。サイレンが鳴っている方向に向うと、地元の門戸分団の車両が神戸女学院前の消火栓に部署しようとしているところに遭遇した。分団員が慌てている。…断水の為取水できないのである。

ここから私の戦闘開始である。

直ちに消火栓から吸管を外させ先の四十谷川へ部署変更した。私は機関担当し、分団員の方に放水準備を依頼した。

建物火災では、通常4～5台の消防車が出動するが、今回は1台で対処しなければならない。包囲態勢を取り、延焼防止を図らねば。

…水量は十分あったので吸管を2本投入し、2線放水を指示した。建物は、角地にあり南面と西面に筒先を配備し、延焼防止に努めた。

しばらくして、もう1線追加しようとしたが、筒先とホースが無い。屋内注水をしようとしても破壊道具（はしご、掛矢等）が無い。道具は他の分団員の方が近くでの救出作業に使っていた。仕方なくこのままの態勢で放水を継続した。屋前位（時間ははっきり覚えていない）には、延焼のおそれが無くなったため、分団員の方に後を引継いだ。

私は、4日程前から風邪で仕事を休んでいた。しかし、この時ばかりは風邪どころではなかった。取り急ぎ濡れた服を着替え、消防局に向った。

ここで反省

本件火災では、運良く消防団車両が1台とは言え、来てくれたため消火できたが、こなかった時のことを思うとゾッとする。車両及び資器材の不足を痛感した。また何らかの方法により屋内注水をもっと早くすれば、消火時間を短縮することができたかも？

整備センターではなく、とりあえず消防局に出勤しようとしたが、青木町で一人住いの母親が気に掛かり立ち寄って見ようと単車を飛ばした。青木町方面からも黒煙が立ち上がっているのが目に入った。不安にかられながら家に着くと、全壊であった。母親の姿はない。どうしたのだろうと思っていた時、隣に住む姉が出てきた。額から血が流れていた。聞くと倒れてきた家具で傷を負ったそうだ。もちろん家は全壊である。姉から母親の事を聞くと、幸い母親の寝ていた場所は壊れず、けがもしていなかったが腰が抜け動けずいたため、姉と子供で外に担ぎ出したとのことで安堵した。しかし、まだ出勤するわけにはいかなかった。

南向いの家の娘さんが、母親が家の下敷になっているから「助けて！」と叫んでいる。辺りを見

ると、あっちこっちで生き埋めの人がいるらしく、近所の人を持ち寄ったノコギリ、パール、車のジャッキ等で救出活動をしていた。人力では、作業はなかなかかどらない。付近住民、警察官等が協力して何人かを救出した。私も協力して3人(南向いの家の母親を含む)の救出に成功した。しかし重機の必要な現場も多数あった。

ここで第四番目の反省

重機とまではいなくても、そこそこの救助資器材が数多く手元にあつたらと悔やむとともにこのような広域での大災害では、我々消防、警察等だけでは到底対処できないため、全市における地区防災組織の早期結成を図り、住民が一致協力する体制作りが急務であることを痛感した。

付け加えて私事ながら、市民の公僕たる公務員であると思いつつ、やはり人の子、母親の事が最初に気に掛かり、行動したことが心の隅に引っ掛かった…。

救出活動が一段落した後、急いで消防局に出動してみると、庁内はまるで戦場のようなパニック状態であった。

私は、上司から消防課員の調査班に入るよう命令され直ちに行動に移った。業務内容は、救助要請のあった119番通報現場への安否の確認であった。

資搬車に便乗し出動するも、交通渋滞、倒壊家屋、折れた電柱、道路陥没等の障害を避けながらの現場確認であったが、大半は自力脱出、救出済みであり、これの確認の為付近住民への聞き取り、避難所への調査等結構時間を費やした。

生き埋めの可能性のある現場には、救助隊の出動要請等を連絡しながら各地を廻ったが、特に夙川方面の被害が大きかった。

道路の至る所から漏れているガスがかげろうのように噴き出しており、二次災害に注意しながら危険との隣り合わせの行動であった。

何回かの調査を終え帰庁後は、本来の業務である後方支援活動についた。

出動車両の燃料補給の確保、車両及び各種機器の故障に伴う応急修理体制等…。様々なことが

あった長くて短い、また一生忘れることのできない1月17日が過ぎ去った。

大地震との葛藤（我が分隊と住民）

予 防 課

野 田 善 治

平成7年1月17日5時46分、大地震が自宅の2階で妻と就眠中、何の前ぶれもなく突然やってきた。

私は本能の赴くまま妻を抱き寄せ覆い被せ、揺れの治まるのをじっと息をこらして待っていた。

揺れが治った直後、別の部屋にいた子供に声をかけ無事を確認し、暗闇のなか部屋から出ようとしたが、タンスや本棚が倒れ身動きがとれず、どこが出口なのかさっぱり判らなかったので、本棚から懐中電灯を手探りで見つけタンス類を乗越え階段を降りようとする、階段が落下していたため、2階から梯子で実兄の手助けにより避難した。

家の2階は殆ど垂直に建っているが、1階は西側に1.5mも傾いていた。

その後、近隣者2名を梯子で救出したのち、子供たちを妻に託し着のみ着のまま消防局に自転車で出動した。出勤途上、東上空から黒煙が3ヶ所上がっているのを確認するも、とにかく消防局へと急いだ。

出勤し作業服に着替えようとした時、既に出動し指揮をとっていた消防課長より、「中野、小川、中谷と君の4名で弓場町の火災現場に出動せよ。4号車に可搬式を積載している。無線は……」の指示により出動、現場到着後、直近の消火栓を点検するも予想どおり水圧ゼロのため、防火水槽に部署、消火活動に従事する。この消火中、多数の住民から「家が倒れ生き埋めになっている。ケガ人が多数いる。ガスが噴出している。」等の通報が引っ切りなしに入ってくる。その度に無線で応援要請するが返って来る応答は、「応援は無理、現場で対処せよ。」であった。

市内全域が壊滅的な状態で消防隊だけでは到底対処できないことは判りすぎるほど判っている

が、やはり応援が来ておれば何人かは救出できたのでは……また、人命が第一か消火（命令）が優先か、たった4名で何ができるかとジレンマに陥っていた。

火災が鎮火状態になった後、20時頃まで現場近隣の救出に向い何人かを救出したものである。

現場での我々消防に対する住民の意識は、手前みそになるが一口で言えば「信頼」という言葉に尽きるのではないかと思われた。それだけに何とかして、消火、救出を迅速に行うことが出来ないかと思った。

我々に通報してくる住民に「皆さん方で救出して下さい。我々は消火で手が一杯、応援もありません。市内全域がこんな状況です。」この言葉で殆どの住民は理解を示し近隣住民と協力して救出していた模様でトラブルはなかった。

最近は、住民同士の付き合いが少ないと言われているが、いざこのような災害が発生したら、殆どの住民はじっと悲しみに耐えて一致協力して助け合っている情景は本当にすばらしいことだと感じた。

最後になりましたが、この震災で亡くなられた皆様のご冥福を心からお祈りします。

生還から災害現場へ

西宮消防署

和本 誼 紉

その時！はまだ自宅1階で眠りの中。

突然の激しい揺れでとっさに立上がったが、後にそれぞれの体験者が語るように、立て揺れの後横揺れがきたのか、何秒位の揺れであったのかは全く分からない。

立上がった体が激しく揺さぶられる内、天井が落下してきたので肩に力を入れて全身で支えようとしたが、それは空しい抵抗であり、なされるままに家の下敷になっていくのが分った。

「死にたくなかったもこのように死ぬ時もあるのだな！」この脳裏をよぎったものは何だったのか、もっと生への執着があってもよいのに……。

しかし幸いにも体一つが寝伸びて入るだけの空間にすっぽりと収まっており、そろりと手先・足先を動かし、何処も挟まれていないことが確認出来たので、渾身の力をこめて覆い被さっているものを押し上げようとしたがピクリともしない。助けを待つしかないことを悟った。

家族の安否を確認するために全員の名前を大声で呼び掛けると、

1階隣室で寝ていた妻は、「これ何、どないなってるの」「お父さん！大丈夫」「ゆう子！さよ子！大丈夫」「ゆう子の成人式が終わったばかりなのに死んでたまるか」

妻も体一つが入るだけの空間にいる様子。

私が頭越しに手を伸ばすと丁度届く位置に妻の手が伸びてきてまずの無事を確認。

2階ベッドで寝ていた長女は（後で聞いた事も含めて）、

揺れと同時に怖いため布団を被って、何かが崩れる音を聞きながら地震が収まるのを待ち、布団をめくると「うそ一何で屋根が前にあるの」

「ワー空が見えてる」「お父さん！お母さん！（移動しながら泣き声で）」

2階和室で寝ていた二女は、「何かに挟まれて動かれへん」

タンスに足を挟まれていたが、何とか自力で脱出出来た模様である。

二女は最初に西宮警察署へ、次に西宮消防署へと救助を求めて駆け込んだが共に所在と名前を聞いたのみで来てくれそうもないと感じたと語っていた。

特に消防署には他の人も救助を求めて受付前で列をなしていたとの事である。

家の外へ飛出し我が家の倒壊に気付き、駆け付けて来てくれた近所の人呼び掛けに、応答するが聞こえていない様子。

中からは良く聞こえているのだが……。

さらに、覆い被さっているものを叩いて知らせようとしたが、叩くと埃か壁土の様なものが顔に落ちて息苦しく、声で必死に自分の存在を知らせた結果やっと気付いもらえ、救出にかかるうとするが、瓦礫の山を前に何処から手を付けてよいか分からない様子が中から感じられる。

近くに住む父妹弟等も駆け付けて来た模様。

それでも埋もれた位置を大体確認が出来、作業にかかってきている。

その作業は、屋根瓦を取除き、野地板・天井板を剥がし、2階の畳を包丁とナイフで切って約50センチメートル大の穴を開け、同階の床板を捲り折って人が出れる大きさの穴を開ける手順である。

途中で一度だけ外の緊迫した様子があった。それは「消せ！消せ！」の声と叩き踏み消す様な物音であった。

垂れ下がった屋内電気配線がショートし何かに燃え移ろうとしたのだという。

「火事になったらやばいな！」と思った。

救出作業を行いながら安否を気遣う外からの呼び掛けとは裏腹に、埋もれて窮屈ながら体の何処も圧迫されていない安心感からか、外に対して「中は大丈夫だからゆっくり作業を進めてくれ！」と返答し、妻とは互いに励ましながら色々とお話をしていたのです。

その中で妻は「早く出て助ける方に回りたいのでしょうか？」とも……。

先ず私が救出され、次に未だ埋もれている妻を救出するために、上記の畳を切る手順以下を私が行い妻も脱出することが出来、地震発生から約1時間、幸運にも恵まれ、2人共無傷で生還することが出来たのでした。

見ると、2階建の家全体が瓦礫の山様に崩壊し、救出された穴には私と妻の頭部が有った所を二分する形で梁が落下し、三角状の空間にそれぞれが入っていた事が初めて理解出来たのである。

この事は、後の救出現場に於いての惨状を見る度に、正に奇跡としか言いようがないとは思わずには居られなかったのです。

パジャマ代わりのトレーナーとジャンパー姿で、署まで約5分の距離を徒歩で向い、署内を見ると受付員を残して人員車両共出払い、数人の自発的参集の署員を見掛けた。

服を着替えて出動体制を整えると同時に甲子園五番町の火災出動指令。

既に駆け付けていた梶本司令補と初めて顔を見る北署の鈴鹿消防士との3人で隊を編成し、広報

車にホースと消火栓キーを積載し、現場到着、放水するべく消火栓を開放するも一滴も出ない。

ほぼ同時に到着した消防団と協力して防火水槽から放水、途中で水槽が空になり他の水槽に部署替え。3棟を焼いて8時過ぎに概ね鎮火となった。

引続き転戦を求めると、戸崎町の火災への出動指令があり、現場到着するも同様に消火栓から水が出ないため、状況報告とポンプ車出動を管制室に無線連絡し現場を離れた。

続いて、平木町の一般民家及びアパート倒壊現場へ……。

以後、果てしなく続く救出活動や消火活動へと立ち向かうこととなるのです。

もっと助けることが出来たのでは、もっとやれたのではと思う一方で、ほぼ全職員が被害を受けていながらの活動は、公共のためこれが任務だとは言いながら、使命感に支えられ本当に皆が頑張ったと思うのです。

余震の続く中での救出活動、放水した水が凍る寒さの中、夜を徹しての消火活動……、死力を尽くしての活動であったが、正直なところ「何とかつい因果な職業やナー！」と思ったのは私だけだろうか。

しかし、活動を通しての隊員同志の信頼感、連体感が改めて認識でき、この様な職員達と今後もしょに仕事を続けて行けることの喜びを感じずにはいられません。

二度と経験したくないことではあるが、重要なこと、必要なこと……、何かを与えてくれたとも思うのです。

震災活動手記

北夙川分署

大村忠男

平成7年1月17日・午前5時46分、北夙川分署1階・消防仮眠室にて当直仮眠中、怒り狂った地の神の手荒い方法でたたき起こされる。しばらくの間、何が起きているのか判断もつかない。掛け時計の落ちる音がする。安全な場所に移動しよ

うとするが、あまりにも激しい揺れのため立つこともできず四つ這いのままジッと揺れのおさまるのを待った。

揺れがおさまると同時に車庫に飛出し、車両の点検中、救いを求める付近の住民数人が駆け付けてきた。

通報を受け救出現場へ向うも、二階建であった住宅がほとんど平屋になっており、電柱は折れ傾き、道路は波打ち亀裂が走り、漏れ出た都市ガスが鼻をつく。

ポンプ車で出動したため、これと言った救助機材も持たず、全て手作業で救出にあたった。機材があれば少しでも早く救出ができたのにと悔やまれる。

何件かの現場を回り、印象深いものとしては、仁川百合野町の土砂崩れ現場における大学生を中心とした付近住民の消火協力と人命救助の活躍である。

水が出ないため、大勢の住民が道路に縦一列になり風呂の残り湯をバケツ・リレーで運び、火災家屋の消火にあっていた。その長さは約200mにおよぶ。

また、火災家屋内に取り残された生存者の救出にも大活躍をした。

最近の若者は、自己本意で他人の災難などは見ても見ぬふりをするとよく言われているが、“やる時はやる”と、心強く感じられた。

その反面、「川に押し流され、土砂に埋もれた者を早く助け出せ！」と中年男性が言いよってきたので、「1現場に消防車1台がやっとなです。あなたが行ってやってください。」と協力依頼すると、口をもごもごさせその場から立ち去って行った。人はさまざまである。

後日、救出された男性のコメントが新聞に掲載されていた。

…足を挟まれ逃げ出す事が出来ず、半ばあきらめていたところパールの様な物が入ってきた、これで足を挟んでいるものを押し広げたところ救出された。

…との記事である。鉄の棒1本が人間の命一つ助けたのだなと感慨深く思うと共に41号車に積載し

ていたパールの行方が判明する。

人類が初めて経験した未曾有の大災害、日頃の備えも何一つ通用せず遠慮なく襲いかかってきた。

人は口々に「もお、ええ!」、「もお、いらん!」とこぼすが、これからが正念場である。

命は助かったものの住む家も、職場も失い途方にくれる人が大勢いることを忘れてはならない。

テレビの震災報道を見ては、当時の事が思い出されあまりの恐怖と酷さにわけもなく自然と涙が流れ出てくる。

母親の死を知らず、崩れた家の前で無邪気に遊ぶ小学生の姿は、今も忘れられない。

二度と、この様な不幸な事が起こらないよう心から願うとともに、災害から市民を守る防人として精進することを心新たに決意し、勤務に邁進する毎日である。

1995・01・17・05・46 一生忘れる事の出来ない数字になった。

心の葛藤

鳴尾消防署

中 鳴 良 光

地震当日私は、午前5時まで受付け勤務でその後交替して仮眠室で仮眠をとっていた。

午前5時46分突然背中を突き上げられ、布団の上で飛び跳ねているような状態で目が覚めた。揺れる中で部屋の引き戸が大きな音をたてて開いたり閉じたりしている光景が今でも焼きついている。初めは余りにも激しい振動だったので、地震とは思えずトレーラーがぶっかったと思った。訳も判らず受付け前に飛んでいき、外を見ると周りには停電で真っ暗だった。直ぐに近所の人達が詰めかけてきて「あっちでガスが漏れている」「こっちで家がつぶれている」など皆が口々に叫んでいた。直ちにポンプ車で出動し救助活動が続けるうち、管制室からの指令で火災現場へ向かおうとしましたが少し進むと「人が生き埋めになっている助けてくれ」と、引き止められ現場に向かうこと

も出来ない状態だった。

あちこちの家が倒壊し何処から手をつければいいのかわからず「誰かいますか？居たら返事してください」と、声をかけ、声がするところを優先して救助していくしかなかった。救助活動が続ける中、考えることはやはり家族の安否だった。神明町の火災現場で自宅が見えたとき一目で倒壊しているのがわかった。その瞬間私は、両親の死を覚悟した。いま直ぐにでも助けに行きたいという気持ちと、消防士としてこの現場を離れることは出来ないという使命感の葛藤が続く中、両親を見捨てて涙を流しながら無我夢中で救助活動をしていました。その日は、23時頃まで飲まず食わずだった。

帰署後、救急隊員から渡辺病院で私の両親に会い、母親が怪我をして入院しているが命に別状のないことを聞き、生きていてくれてよかった。もし死んでいたら自分の取った行動を一生悔やまなければならなかったかもしれない。

本当に生きていてくれてよかった。

しかし、その喜びもつかの間19日に叔母が亡くなったという知らせが入った。地震による負傷で胸が陥没し、それが原因で呼吸不全という診断であった。

今回の地震で多くの命が奪われ、私以上に辛く哀しい思いをした人が多くいると思うと地震に憎しみさえ覚えた。

もう二度とこの様な思いはしたくない。

二つの涙

瓦木消防署

服部員己

1995年1月17日未明、救急隊寝室で浅い眠りについている。突然の激しい揺れで目を覚ます。あまりにも激しい揺れのため夢ではないかと疑うが、寝室の他の3人も起きている。夢ではない。

地震と直感したが、被害の大きさは全く予想出来ないものであった。

庁舎内を見て歩くと事務机がバラバラ、書棚が倒れている。

受付に行くと付近住民が救助を求めて続々とやって来ている。

「子供が、おじいちゃんが、おばあちゃんが家の下敷になっている助けて下さい。」

「今、全車両出動しています。メモに住所と氏名を書いて下さい。後からすぐ行きます。」こう言うしか出来なかった。

その数、百数十人は来たと思われる。

この時、相当な被害状況であると感じたが、まだ、あの甚大な被害を想像することは出来なかった。

出動車両等からの被害状況の連絡はない。情報が足りない。火災の駆け付け通報がある。

広範囲に被害が及んでいることは確かである。住民への対応が困難になってきた。「早く統括指揮者がほしい。」焦りが出てきた。「早く明るくなれ、なれば何とかなる。」心の中でつぶやく。

そうこうしていると高木地区から応援要請があり、救急隊2名と救助活動に向うが、現場はあまりにも被害が大きく、人の手ではどうしようも出来ない有様である。

隊員2名は消火活動等に当り、私は「負傷者がいる」と住民に手を引かれ、単独行動をとることになってしまった。

負傷者はすでに死亡していた。若い女性である。他の場所では6~7才の女の子が死亡している。

トリアージを行った。家族に救急搬送は出来ないと説明する。

早く救急体制を立て直さなければ重症者に対応出来ない焦り、隊員2名を探しながら救急車に戻るが隊員は見当らない。

途中、誰かの声がした。「震源地は淡路島、被害は神戸から東へ広い範囲でメチャクチャだとラジオで言っていた。」

不安が頭の中をよぎった。須磨の家族の安否だ。妻や子は無事だろうか。もしかして…。

しかし、今の自分は、家族には何もしてやれない。

今、出来ることは、この場の住民の救出である。「家族の無事を信じよう。信じるしかない。」

時間が経つにつれ救出された者が多数あられ

る。死亡、重症者等さまざまである。

本来、ここでトリアージを行うべきであるが、トリアージなど出来る状況ではない。その家族が許すわけがない。

大災害の現場におけるトリアージは、今後の課題である。

このままでは、救急活動が出来ない。体制立て直しのため自己判断で帰署することにした。

付近にいた消防隊の機関員と2名で戻る。

管制室へ無線連絡「39号車は一旦帰署する。現場では救急活動が困難である。以後は現場からの要請出動とする。」

その後、何件かの出動要請があった。ガスの漏れ現場、救助活動、負傷者の搬送等を行い、気が付けばもう日も暮れ、あたりは暗くなっている。

家族とやっと連絡がついた。無事である。「食べ物はない。ガス水道も出ないが、何とかやっている。娘（6才）がよく手伝ってくれる。」と言う。

私も「当分帰れないだろう、頑張ってもらいたい。」と伝える。

帰宅したのは、7～8日後。妻と娘の元気な顔を見ると目にうっすらと涙が…。

ふと、思い出した。倒壊家屋の下で死亡した母親の腕の中から1人の幼い女の子を無事救出した時、やはり目に熱いものがあった。

もう、こんな涙はいらない。

兵庫県南部地震を体験して

甲東分署

岩見眞吾

私は、震災当日西宮市瓦木消防署甲東分署において当務主任としてその朝を迎えた。1月17日5時46分2階仮眠室で仮眠中ゴォーという地響がしたと思うと下から突き上げる様にドォーンという音がして私の体は数10cm飛上がった様に思う。そして横振れが約10秒間続いた。「あっ、地震だ」と思ったが声がでない、私はスチールロッカーの前で寝ていたためロッカーが倒れると思い、とっ

さに頭から布団を被り身構えた、その瞬間ロッカーが倒れてきた。実際のところ立ち上がって逃げる余裕がまったくなかった。仮眠室のあちこちで「わあー」とか「地震やー」「大丈夫かー」と言う声が聞こえる。私はロッカーの下からぬけ出し、私の隣に寝ている藤本君を見ると完全にロッカーの下敷となり、身動き出来ない状態である。2・3人でロッカーを起こし「大丈夫かー」と聞く、布団の中に入ったままの状態はどうやら怪我也なく助かった。

仮眠中の者の内2・3人の人は、ロッカー上の物品や時計・鏡等の落下物で頭や腕にかすり傷を負った程度で全員無事であった。署員は一瞬ざわめいたが即庁内状況の確認や庁舎の屋上に上がって市内状況の確認等各人は行動に移った。

倒れた庁内物品の整理をしている余裕はない。各車出動準備体制を取った。全員がガレージに集合出動体制で待機中5時55分頃4・5人の市民が駆付けて「〇〇で家が倒れているすぐ来て下さい。」とそれぞれが一斉に言う。その後も5人10人と駆付け庁舎1階救急仮眠室は一時的に避難所となり人であふれた。

私は、5時55分西宮市上ヶ原六番町の家屋倒壊現場に向い7名を救出、その後管制室の指令により分銅町・常盤町方面に転戦3件の救助作業と1件の消火作業を実施、更に、南昭和町の火災現場へと転戦して甲東分署へ帰署したのが翌18日1時30分頃で、出動から帰隊まで約19時間30分ある。今から思うと“火事場のくそ力”とよく言われるが、一時も気を抜くことなく各現場では必死の思いでの救助・消火活動の連続であり、隊員は疲労困憊で限界に達しており、食料に有り付けたのは南昭和町の火災現場で既に0時を廻ってからである。隊員は、使命感から不平を言うどころか逆に、この未曽有の大災害の中で多数の人命救助が出来たと、消防人で有ったことの誇りすら感ずる晴ばれとした顔に私は安堵したものである。

特に印象にのこる4件目の救助活動では（分銅町・磯貝方）72歳の老女が倒壊家屋の1階で下敷になっており、家屋は1階部分が完全に倒壊し、2階部分はやや傾いて残っている。2階床面は地

面から1mもない現状で2階は西面にずれる様に倒壊した1階に乗っている。そのため、要救助者は2階和室の真下であると聴取するも声をかけると応答は東側の部屋の下から聞こえる。この位置は部屋と部屋との間の2階の梁や崩壊した階段等がれきが複雑にからんだ場所で、声の確認は取れるが破壊救出位置の決定に手間取った。又、余震も続いており2階部分が倒壊していないといえども管柱等は折れ曲がり、いつ崩れるか判断しがたい状況で、建物内部での救助作業を命ずるのに躊躇したのも事実である。

掘出し救出に際しては、切ってはならない柱(2階部分の倒壊・要救助者の損傷等の危険性)等もあり、細心の注意を払いながらの作業であった。やっと要救助者の身体を発見、要救助者は3・40cmの隙間で布団の中にいる。パール・チェンソー・スプレッター等を用いて救出しようとした時、住民が駆付けてきて「裏の倒壊した家が火事です。」と言う、「この人を助けるのが先だ、近隣者のバケツリレーで対応して下さい。」と依頼し救出作業を続行“尻に火がつく”とはこのことで必死の思いの作業が続く、もうすこしだという時にまた住民が来て「私たちではどうにも出来ません、ものすごい勢いで……隣へ燃え移ります。そばの消防車も燃えそうです。」と言うので、2名が消火活動に向い、私と藤本君が残り早く救出せねばとあせる気持ちと、火の手をなんとか押さえて欲しいと必死の作業でなんとか救出、火災現場に駆付けると隊員と市民が協力して放水中であった。

幸いにタンク車であったので即放水出来て一時的ではあるが一応火の手は押さえられたが、すぐ下から火の手が上がる状況で長時間放水態勢を取る必要があり、市民に水管延長協力を依頼し、安井小学校プールに部署した。概ね鎮火後鳴尾中分団が応援に来た。倒壊家屋の火災は折り重なるがれきのため死角が多く、消しても消しても下から火がでる状況で完全鎮圧まで約5時間を要した。

当日の活動を通して痛感したことは、大自然のパワーのものすごさに、人間はなすすべもなく打ちのめされ、現状を見るにつけ背筋の凍る思いで

あった。この様な現状の中で、市民が近隣愛護の精神を発揮し救助活動をする姿を見るにつけ、広域大災害に際しては消防の組織力だけでは限界があり感慨深いものを感じた。又、“備え有れば憂いなし”とよく言われるが、我が消防局も含めて阪神間は地震がないと言う神話めいたものがあり、あまりにも備えが無かったと思われる。私たちが意識付けとして持っていた地震に対するマニュアルは全く役に経たなかったことも大きな反省点である。

以上のことより、再びこの様な大地震が発生した場合一人でも多くの人命を救い被害を最小限にとどめるべく、消防組織力及びその対応策等の整備を図るとともに、民間活力の導入をもっと強力に推し進める必要がある。

そのため

- ①救助資器材の充実強化
- ②消防団との連携強化
- ③自主防災組織のさらなる育成強化
- ④行政と市民との一体化と防災意識の高揚及び広報の充実
- ⑤消防教室の実施内容の見直し
- ⑥消防訓練実施内容の見直し
- ⑦各地域毎に市民組織による防災巡視員等を設け住民の意志を吸収し行政に反映する
- ⑧各行政間の連携強化

等々の防災計画の見直しが急務であると痛感した。

まだまだ地震の爪痕はいたる所に残され、危険斜面・擁壁等梅雨期を迎え早急な対応とこれに対処出来る体制を図っているところであると共に、復興に向けて市民に信頼される消防人となるべく更に精進努力して行きたいと思っております。

無我夢中

北消防署

中野勝博

これは大変な事かと思っても、！まさかまさか！あんな修羅場を誰が想像できたでしょう。

先ずは受付前に並んでいた市民の列におののき、人一人居ない真っ暗な消防署に驚きました。

119番のやりとりさえも騒音と化しており、非常電源のエンジン音だけが、やけに大きく聞こえたのです。

私は火災現場への出動でしたが、負傷者が戸板で運ばれて行く様を横目に見ながら放水していますと、中年の婦人が「おばあちゃんが埋っていますので助けて下さい」と言い寄って来ました、野田係長の勇気ある決断のもと、一旦放水を中止し燃えていない家の人に「奥さん、すみませんちょっと行ってきます」と断って行こうとする時、けっして怒ることはなく、「早く帰って来て下さいね」と縋るような目と言うのです。

案内されて行きますと、壁土で白っぽく煙った倒壊家屋に文机が梁を支え、布団を被った昨晚と全く同じ姿のままの老婆が、奇跡的にも圧死を免がれていました。

病院前の駐車場には、布団を敷いて手当を待つひと、そのままの人、点滴台を傍らに置いて横たわっている人、看護婦さんをお願いして帰る際、老婆が無言のまま、両手を合わせてくれている姿に熱いものを感じました。

午後には、「御主人、ここに居ますが冷たくなっていますから、生きています人の方に行かせて下さい」と、立ち去っても「そうしてあげて」と涙ながらに納得してくれたのです。

こんな現場の生々しさに、「後を頼む」と妻に託して飛出して来たものの、母や子の身を寄せる場所とは案じながら、気が付いてみれば防火水槽を3つつも空にして飲まず喰わずの奮闘に、言葉でしか知らなかった「不眠不休」も、無我夢中の中で皆と共に頑張れたんだと思います。

あの震災直後、ただ事無しと直感した職員の手が短時間に参集し、出動していった事実、原付や徒歩で28時間掛けて何が何でも職場にの精神は、理屈やない消防としての自覚が自負が、そうさせたのだと思います。

この大災に、水の尊さを悟り、人の和の有難さを痛感した今、我々はなお一層強いチームでありたいと願う所存です。

女々しい私としましては、親父と勤めた5年間

を含め、嫌な時もありましたが続けられたお陰で、大きな夫婦喧嘩もなく子供等とも係わり多く持てたこと、仮家住いになっても恙なく過ごせること何よりと、感謝していますとともに出来ることなら息子達にも、祖父と父のこの仕事を、意気に感じて「よし、俺も」と心密かに願いつつ、大事にしたいですこの仕事。

大地が揺れた数10秒

山口分署

西田 秀 昭

大地が揺れたほんの数10秒、平成7年1月17日午前5時46分は、一生忘れることのできない一瞬であった。

突然の大きな揺れがあり自宅で寝ていた私は目を覚まし、何事が起ったのか一瞬判らなかったが、我に返ってみると今までに経験したことのない強い地震であることに気付いた。

揺れが止ってから、家の中を駆け巡り家族の無事を確認し、ほっとひと安心したところ、急に自分の両親のことが気に掛かり実家へ電話をしたがつながらない、何度もするが駄目である。

そこへ、親しい友人からの電話があり「お前の実家が全壊し、その中に両親が生き埋めになっている。近所の人救出しているので、すぐ来い」との連絡があった。

その時に、JR西宮駅周辺はどうなっているかを尋ねたら、殆ど家が倒壊し多くの方が生き埋めになり、悲惨な状況であると聞いた。

早速、妻に西宮の実家へ行くよう指示し、私は作業服に着替え自動車で勤務している北消防署山口分署へ向った。

私の管轄する山口町地域は家屋の倒壊などもなく、それ程の大きな被害はなかったので、内心「良かったな」と思った。

山口分署へ到着してみたら、消防車両は全て出動した後であったが、その時管制室から当署に待機している非常招集職員4名で一隊を編成し、消防局応援隊として出動命令があった。

消防車両は既に出払らっているため、某消防職

員の乗用車で消防局へ出動するも、出動途中での甲山下り坂で段上・広田・北口・建石辺り数箇所
で火災が発生しているのが見受けられ、さらに甲陽園・河原町・中前田町では家屋や共同住宅が倒壊し、見るに見兼ねる状態であった。

消防局へ到着後、西宮12号車分隊に編入され4名で第1現場である馬場町5-2・便利市場へ救助活動に出動した。

出動途上は、道路上への家屋倒壊による交通障害や交通渋滞による消防車の走行障害が多く、早く現場へ行かねばとの気の焦りから一般車両の運転者に「進路を譲れ」と大きな声で何度も叫んだことを覚えている。

便利市場へ到着すると学生風の若い男が「この2階に夫婦が生き埋めになっているので、早く助けてな」と言ってきた。

便利市場の棟全体は、1階が押し潰され2階は建物の瓦礫の山で埋って倒壊し、その2階中央部で就寝中の夫婦が地震に遭い、生き埋めになったのである。

車載の梯子を使い2階の屋根伝いにベランダへたどり着き、バールや手作業で瓦礫を除去しながら屋内進入し「大丈夫か」と声を掛けると奥さんの返事があり、さらに瓦礫を除去しながらやっとの思いで奥さんのいる位置までたどり着いた。

2階の床板が抜け天井の大きな柱2本が、奥さんの下半身を食い込み挟まって身動きできない状態ではあったが至って元気であった、「ご主人は何処にいますか」と尋ねると「私のすぐ左で瓦礫に埋もれて駄目かもしれない」との返事があった。すぐさま、奥さんの左側の瓦礫を取り除くと、うつ伏せの状態で返事もなくうずくまっていた。

ご主人は、胸部を柱で圧迫されて呼吸困難なため声もだせずうずくまっていたのである。

「しっかりしろ、今助けるからな」と声を掛けると、返事はないものの首を上下に振ったのでひと安心し、ご主人を先に救出することを決め、バールや人力で柱を動かそうとしてもビクともしない、気はあせるが作業はかはどらない、もっと救助の人手と救助器材があればと悔やみながら時間だけが過ぎ、そうしているうちにも余震が続き、我々もいつ生き埋めになるかもしれないと不安で

あったが救出活動を展開した。

ご主人の呼吸がさらに弱っていくのが伝わってくる。そこへ、誰が連れてきたのか判らないが近所の医者が来て、衰弱しているご主人に注射と点滴をしてくれた。

さらに、見知らぬ人が鋸や自動車のジャッキ数個を持って来て、鋸を使って柱を切る者、瓦礫を手作業で取り除く者、バールで柱を持ち上げようとする者とが消防隊と一致協力して必死になっている姿を見た時、人を助けることの重大さを改めて知らされた。

そして、救出作業が続くなか柱の下部に小さな空間ができ、やっとの思いでジャッキを柱にあてがうことができ、徐々にジャッキアップをすると、今までびくともしなかった柱が少し動いた、これはいけると思いさらにもう1個のジャッキを咬まし、2個のジャッキで柱を持ち上げることができた。「今だと叫び」隊員全員でご主人を引出し作業をすると、ご主人が痛さのあまり悲鳴があったが、「今がチャンスだ」と言い聞かせ、ご主人の悲鳴を無視して身体を引出し救出に成功した。

続いて奥さんを救出するが、ご主人と違っていとも簡単に救出でき、この夫婦を一般車両のワゴン車で最寄りの医療機関へ搬送するよう依頼した。

約3時間の長い救出作業ではあったが、二人を助け出したときには消防人としての使命感に浸ることができ胸が熱くなった。

しかし、それも束の間第1現場の救助活動を終えたことを無線に入れると、第2現場である北昭和町に要救助者がある旨指令が入り再び出動し、その後も次々と救助活動に転戦した。

当日、西宮市内では多くの要救助者がいるなか、私が助け出した人数は僅かではあるが、その現場での救助活動は必死であり、精一杯頑張ったと自分自身を納得させる以外になにもなかった。

また、消防組織の活動問題、人員、資器材の不足など消防としての色々な問題があるものの、今回の震災により消防人として多くの貴重な教訓を得ることができ、さらに、消防は地域住民の先頭に立って、震災に強い街づくりに貢献する立場に

あると痛感した。

震災時に給水活動にも従事

西宮市市民局長

清原 進

この度の震災は、我々が未だ経験したこともない大災害であった。その中で、消防団の活動は、自分の家族のこと、家のことを省みることなく、地域の消火活動に、壊れた家屋からの住民の救助活動等に大いに活動されたことを、よく耳にした。この活躍ぶりは、内閣総理大臣表彰、消防庁長官表彰の受賞を始め、全国各地に配布された消防団の啓発ポスターに本市の消防団の消火・救助活動の様子の写真が用いられていること、などが如実に物語っている。

昨年秋、消防局とタイアップして河川を堰止めての放水訓練を実施したことが、今回の震災での消火活動に直ちに生かされたということも聞いた。このことは、消防団の日常訓練の賜物であり、日常訓練が如何に重要であり、貴いかということ、改めて認識されたのではないかと思う。

震災後のある日、私は、消防団の消防自動車が黄色の大きなポリタンクを載せて走っているのを見かけた。その時は、水道の配水管が壊れているので、万一の火災の発生した場合に備えた消火活動用のものとばかり思い込んでいた。しかし、後日、そのポリタンクは、地域の方々に対する給水活動用のものであることを知った。地域の方々には、この給水活動は、大変喜ばれたのではないか。このように、この度の震災では消防団には、本来の職務以外にも市民の方々のために、活躍していただいた。有難いことであった。

消防団長を始め団員の皆さんには、自営業に従事したり、サラリーマンとして勤務するなど日常の生活を営みながら、防火思想の普及、万一の火災・災害発生時には、我が身の危険性をも省みることなく、率先して、市民の方々の生命と財産を守るために、日夜活動していただいていることに対して、改めてお礼申し上げますとともに、今後とも、市民の方々が安心して日常生活が送れますよ

う、活躍されんことをお願い申しあげる次第です。

阪神大震災の体験

副 団 長

松本 光 央

平成7年1月17日午前5時46分、観測史上初の震度7の激震が文教都市西宮を巨大な力で襲った。自然の恐ろしさグラグラと横揺れドカンと一発、一瞬の衝撃を受けた。瞬間、体は家具、テレビ等の下敷きになっていた。幸いにも頭から蒲団をかぶったので命は助かった。重くて蒲団から体が出ない。いつも置いている枕元の懐中電灯も飛んだのか物の下敷きになってしまったのか判らない。やっと力をふりしぼり這い出して事務所の懐中電灯を見つける。家の中の有様に蒼白となる。ここが今、自分が生活していた家かと目を疑う。足の踏み場もないガラスの破片で一杯の中を土足で歩く。頭が痛い、家具の下敷きになった時頭を打ったらしく、瘤が2つ3つ出来ているが、すぐ外に出て近所の見回りに行く。倒壊家屋を見て啞然とする。町内が一変している。一軒、一軒声を掛けて安否を確認する中で、怪我人を見つける。一人住まいの中年女性が骨折して動けない、すぐ息子と車に乗せて松本整形外科に運ぶ。医者は来ていないが、病院の事務局に頼んですぐ引き返す。次は、倒壊家屋の階下で老人が生き埋めになっている。助けを求める声が聞こえる。近所の人と力を合わせて救出にかかるが工具がなく、各自ノコギリやバールを探し出してくる。今津分団も現場にかけつけて救助にかかってくれる。ノコギリ、バールでは仲々進まない。イライラしてくる。生き埋めになっている老人に「頑張れ、頑張れ」と声をかけて励ます。約3時間が過ぎ、やっと救出すぐ畳の上に乗せ消防車で協立病院に運ぶ事が出来た。病院の中は頭、手足から血を流して苦しんでいる人、骨折で動けない人で一杯だ。怪我人を病院に頼み、すぐ引返し再び倒壊現場へと向かう。津門で生き埋めの人々の救助を求められる。倒壊現場に行き、いくら大声を掛けても中か

らは何の返答もない。救出する道具がなく、どうする事も出来ず消防局に連絡を取り救助を頼み今津分団に引き返す。分団員は3班に分かれ、地区の倒壊現場の救助に出動している。17日、今津地区で生き埋めになった被害者9名を救出したが、重傷のため2名の方は死亡された。火災は上甲子園地区、高木地区で発生したが、各分団長の素早い活躍で大きな火災にならず最小限度でくい止め鎮火出来たのはすばらしい事です。各分団員の皆様には自宅の倒壊、親族に死傷者があるにも関わらず住民の救助活動火災消火活動、又、1月20日から1ヶ月間の給水活動には各分団員交替で朝9時より夜8時過ぎまで、各地区に給水して回り市民の方々に喜んでいただいた。17、18、19日は食料も少なく飲まず食わずで活動してくれた各団員の方々には頭が下がる思いです。この大震災の救助活動に当り今さらながら救出器具の整備の不足、緊急時の通信器具不備等を強く感じさせられた。被災者の人々も何をどうしていいのか、電話は不通、公的な情報も何もない不安の中で近所の人達との励まし助け合いで、どれだけ救われ人の心の優しさを改めて発見する事が出来たと思う。この震災災害に北部の生瀬、名塩、山口地区の各分団員の方々には道路状況の悪い中救助活動に馳せ参じていただき、又給水活動には1月20日から1ヶ月間、早朝より夜遅くまでご活躍いただき深く感謝いたしております。今度の災害に直面して我々消防団員が一致団結してこの震災を乗り切ったことを誇りに思っています。

平成7年1月17日を振り返って

上甲子園分団

分団長 茂 木 清

それは突然何の前触れもなく、1月17日午前5時46分、私たちを地面の底から一撃の「ドン」という音と共に襲ってきた阪神・淡路大震災でありました。これは、誰も経験したことのない未曾有の大災害でした。上甲子園分団の活動範囲においても、前日と全く違った光景が、朝の開ける光の下でまざまざと見せつけられる結果となつてし

まった。地区内では、全壊60軒、半壊120軒、一部損壊280軒の被害を受けたにも関わらず、あの朝は、自分たち周辺の災害の大きさに驚くと共に、次に来るかも知れない余震に怯えながら、倒壊家屋の下敷きになっている人達の救出に、団員各人が各々の住居周辺で活動していたことはいまでもありません。団員の話によると、

「救出したにも関わらず、死亡された人、その家族と共に涙し、次の救出に我が身を奮い立たせた。」

とか

「梁の下敷きになって重傷を負っている人に頑張るよう声を張り上げても、砂塵の中で命の灯が遠くなっていく姿を見て、一人の人間の力のなさを思い知らされた。」

等々言葉に言い表せない現実を各団員が経験することになった。しかし、この騒動の中で人が人や遺体の搬送先は、病院と分かっているものの、多くの怪我人にどう対処すべきか分からず、各団員が110番、団本部、消防局、消防署に電話するも、全て話し中がか呼び出し音のみで会話ができなかったと聞く。止むなくその家人や近隣の人が病院に送っていたようである。

災害発生後1時間前後だと記憶しているが、小林班長と数人の団員が、消防自動車で私の家へ来て、

「広田地区で大きな火災が発生しているらしく、出動要請があった。」

と私に出動の了解を求めに来た。分団長の私は、5名程度で出動することを了解し、赤色灯を回転させサイレンを鳴らして出動しようとしたとき、近所の人達が、

「あの家屋の下に母親が埋まっているので助けてください。」

とか

「怪我人がいるので運んでほしい」

とか声をかけられるが、この地域より広田地域の方が大変らしいので、とにかく1度出動させてくださいとお願いしながら、近隣地域の惨状が気になるものの出動することにした。国道2号線瓦木交差点を北上し、広田地区へ向かおうとしたが、JR陸橋の登り口で車は完全に渋滞に巻き込ま

れ、前にも後ろにも進めることが困難になってきた。広田地区へいつ着けるか分からない状況の中で、広田の人達には申し訳ないが、自分たちの地域の人命救助にあたるのが大切と判断し、広田地区を断念し、次の防災指令に備え車を車庫に戻し、各人の住居地区で救出活動をすることにした。

地震発生後1時間30分頃だと記憶しているが、「火事だー！」

との叫び声で振り返り見上げると、私の家の1軒おいた西側の倒壊した文化住宅の南側から真っ黒な煙と赤い炎が我が物顔で立ち上がっていた。周囲にいた団員に私が指示し、車庫へ駆けつける者、又、火事現場の整理にあたる者と自然に分散し、分団の消防自動車が来るのを待ったが、その間苛立ちを覚えるほど長い時間が経過したように思える。そして、安江部長が消火栓の筒先とホースを持って駆けつけてきた。すぐさま消火栓に接続し、バルブを全開にしたが、圧力がなく全く役に立たなかった。今思えば、当たり前なことではあったが、その時は全く気が付かぬまま接続していた。そこに、サイレンとともに小曾根分団が応援に来てくれた。どれだけ有り難く思ったか知れませんが、水利を上甲子園ビューハイツマンションの防火水槽から取り、消火にあたったが、火の勢いは強く、文化住宅の南側から北側へと燃え広がっていった。そこへ放水が開始された。数分後、我が上甲子園分団の車が到着したので、各団員は奮い立ち各々の持ち場へ展開した。水利を防火水槽としたが、火勢が北へ北へと燃え広がって行った。このため、北側道路下の河川より取水を決定。水量が少なく、吸管が浮き上がり給水できないため、止むなく倒壊家屋の木材等にビニールシートをかけることにより、水位を上げ消火活動ができるようになった。この間、何分経ったか分からないが、火事の勢いと合わせるように日頃の訓練の成果が現れ、私の指示に従い団員はテキパキとした行動で放水できたが、2分団の放水では収まりが付かないほど火勢が大きくなっていった。この頃になると、周辺全域で消防、救急車、警察、企業車等のサイレンの音がけたたましく鳴り響き、全ての車両がこの火事場に来てくれるのかと想像し

てしまうほどでした。消防局、署、津門、今津、甲子園口分団と応援車両が増え、いつの間にか猪名川町の消防車が到着して応援していただいたのには本当に驚いた。

皆様のお陰で、午前8時30分頃から午後10時頃までかかりましたが鎮火でき、倒壊した文化住宅1棟だけで済んだことを本当によかったと言葉では言い表せないほど感謝しています。日頃、消防団活動を行っている私たちは、なかなか活動の中身について理解してもらえなかったのですが、今回の震災で私たちの活動を目の前で見ていただいた近隣の人達に熱いアピールが出来たことは、今後の消防団活動の温かい理解が得られるのではないかと考える。鎮火を確認し、応援車両が帰った後、再失火を警戒するため、車両と数人を残し、他の団員は各々の家の整理と片づけに帰宅させることとし、朝の明けたときからの活動で、家の状況すらはっきりと分からず、無我夢中の一日でした。家族をおいての活動で、ご家族のご心配はいかほどのものであるかを考えると、この地震への憎しみが増長しているほどである。

余震・火災等の災害が予想されるため、夜警を行うこととした。夜警をしている際には、消防団本部からのおにぎりの差し入れでお腹も心もホッとすることを覚えている。その夜の活動としては、鎮火したはずの上甲子園の火災現場で、倒壊した1階の布団等夜具が再出火し、その消火活動の出動と阪急北口駅東側の高架下の南北道路が水没し、その排水処理を本部から依頼され、高木分団及び芦原分団とともに排水した2件でした。

余震が続く中、平成7年1月17日の長い一日が終わり、振り返って見れば団員とその家族にも大きな怪我人も出ずに無事に一日を終えたとき、改めてこの日の恐ろしかったことを思った。掛け替えのないこの日、消防団の制服、ヘルメットに集まってくれた近隣の何人かの学生や若い人や、又ご老人に至るまで自然体で手を貸してくれ、応援をしてくれた方々に感謝し、名前も分からず手助けをしてくれた人達を忘れることは出来ません。本当に終生忘れることなく、今後の消防団活動に日常の社会活動に素直に生かしていきたいと思えます。

身体中疲労の固まりであっても、改めて消防団に入団していて、今災害時の救援活動に参画できたことに喜びと感謝の気持ちを感じずにはられません。

遠い夢

中野分団

分団長 北 浦 治

私は戦争の体験はありませんが、戦争を体験された方に聞きますと、あの光景は戦争の時よりも数倍も大きいと言われた方がおられました。私の生まれ育った山口町中野地区は、裏六甲の有馬温泉より北へ約1キロのところであり、有馬川が流れ、緑の多い田舎です。あの日17日は、生涯忘れることの出来ない日であります。私は、毎朝5時半過ぎに起きるのですが、当日は何故か5時過ぎに目が覚め、トイレに立ち、その後約10分程ボーッとしていたのですが、その後あの大きな揺れを感じ、すぐに地震とわかりました。

初めはゴーッと地鳴りのような音がしたように思えますが、はっきりと覚えていません。すぐに家の下から何かが揺すっているように思え、ガタガタと大きな音がして、すぐに電気が消え、地震とわかりましたが、誰かが家の外でいたずらをしているようにも思えました。でも、本当に危ないと思い、大きな声で

「地震や！」

と叫び、妻の上にかぶさり、少しの間じっとしていましたが、真っ暗闇の中を懐中電灯をつけ、すぐに作業服、ヘルメット姿で外に飛び出しました。私の家は、公会堂の側ですので、そこへ行くと既に約20名の方が集まっていました。その中に団員もいましたので、川向かいの老夫婦のことが気になり、二、三人で駆けつけたところ、主人がタンスの下敷きになっていると言われたので、他の人に頼み、私は器具庫に走り救急車の代わりかと思ひ、消防自動車でそこへ戻りましたが、何とか無事と言われましたので、器具庫に戻りました。その後、3人4人と団員が自発的に集まりましたので、すぐに徒歩にて地区内を回り、ハンド

マイクで「大丈夫ですか？ガスの元栓を閉めて」と回りました。一瞬の出来事で、正直言ってなにがどうなったか分かりませんでした。家を飛び出したのは、6時10分頃と思います。団員の一人一人が自発的に集まってくれたのが本当に嬉しく思え、徒歩巡回の後、すぐに車両にて西山地区や付近のパトロールに出ました。この時ほど、団員一人一人の力強さや団結心というものを感じたことはありませんでした。分団長として何かジーンとくるものを覚えました。

それからが大変でした。団員の一人の携帯ラジオからはいる神戸市内の大火の情報や、西宮、芦屋の情報の入る中、本部の指示により消防局への集合の命を受け、私と5名の団員で西宮へ走り、分団器具庫には副分団長を指揮者として待機又は時間的に徒歩調査等に残ってもらいました。私は、市内に入るにつれ、頭の中が何がどうなっているのか真っ白になりました。ラジオの情報よりも遙かに事の大きさに絶する思いがしました。団員の誰もの初めて発した言葉が、

「何やこれ」

の一言でした。しかし、それが現実であり、物語ではありませんでした。消防局に入り本部の指示により、現場へ行き救出活動を開始しましたが、言葉等で表現の出来るものではありませんでした。当日より3日間は救出活動、その後は給水にと走り回りました。電気はもとより、我々人間一人が生きてゆくには、電気、水そして隣近所の方々の温かい心一つ一つが生きてゆく心の支えになっている事が、初めて分かったような気になりました。

給水活動で一番心に残っているのは、一人のおばあちゃんが小さなポット一つを持って、これに水を一杯でよいから入れて下さいと言われた時です。尋ねると、一人住まいやし、足と腰が痛いので、重いものは持てないとのこと。もっと他に大きい入れ物はと聞くと、あると言われたので家まで行き、給水をして家に運んであげました。帰る時におばあちゃんが私の方に何度も頭を下げ、

「消防の方。有り難う。有り難う。」

と言って両手を合わせていました。おばあちゃんの家は今でも覚えています。あの姿は私の目の奥

に焼き付いています。消防団員であって良かった
と思い、あの時のことを思い出すと熱いものを感じ
ます。

私は、戦争の体験はありませんが、この震災に
より見知らぬ方々と語り合うことが出来て、自分
で言うのも恥ずかしいのですが、一回り大きくな
ったように思えます。私の父は戦死したため、
顔も覚えていませんが、今は消防団員の一人とし
て、いろんな意味で大きくもなり、少しは人間性
が出来てきたように思えます。これからは、戦争
とこの大震災を体験した母を大切に、妻を愛
し、この生まれ育った中野を愛し、日一日を大事
に生きていくことに喜びを感じています。あの日
を忘れることなくも遠い夢であって欲しいと思
う。

大震災の体験

生瀬分団

分団長 浦 入 稔

突然、身体が宙に浮いたと思うと大きな横揺れ
となり慌てて飛び起きる。電気が消えて暗がりの中、
横に寝ていた妻は倒れた三段重ねの簀笥の下敷き
となり夢中で簀笥を持ち上げ引きずりだし、階下
で休んでいる祖母（84歳）の様子を見に行くと
ベッドで何もわからず寝ていて安心する。辺り
を見回すと真横には簀笥や人形ケース等が倒れたり
落ちたりして、足の踏み場もない程散乱している。
自分は消防団分団長、家の片付けは妻子に頼み、
すぐに団員を非常招集し受持ち区域内の状況把握
に出動する。ある団地では至る所でガス漏れが
あり消防車で住民に対して、ガス漏れが発生して
いるので火気を使用しない様に広報させる。区域
内の1ヶ所で家が倒壊し4名が下敷きになっている
との連絡があり現場へ急行する。現場に着くと2
階建ての家は見るも無惨に押し潰されており警察、
消防署員も到着しておらず付近の住民の方々は、
なす術もなくただ騒いでいるだけだった。団員と
共に救助活動を開始したが、どこから手をつけたら
よいのか、廃材置場の様な中で作業を進めていく
うちに母親の腰から下が見

え、反対側では子供の足首が見えてきた。大声で
呼ぶと母親は元気に返事をしてくれ、子供の方は
足を動かして答えてくれた。救出作業を進めてい
くとどうしても土埃がして母親が息苦しいと訴え
るので、私は咄嗟に作業を見守っている近所の人
にタオルを水で濡らして来てくれる様に頼み、そ
れを母親に渡し口と鼻に当てている様に言い作
業を続けた。開始から2時間余りで無事母親を救
出し、子供の方は髪の毛が崩れた梁の下敷きにな
っており髪を切って救出した。到着した救急車で
母子2名を病院へ搬送した。残りの子供2名はそ
れから30分後に救出したが、既に冷たくなってい
た。又、この救出活動中に新たに1ヶ所裏山のコ
ンクリート擁壁（高さ5m、幅1m、長さ9m）
が崩壊しているとの連絡が入り団員半数を現場へ
と急行させ救出に当たらせ、私は4名の救出が終
わり現場へ行くと消防署員と合同で必至の救出活
動中であつた。現場を見ると、とても座敷からの
救出は無理と判断し床下からの救出に変更するよ
う指示をし作業を進め、ようやく昼過ぎに救出す
るも既に息絶えていた。消防団本部より応援に
来るよう要請があり、分団役員の奥様方の炊き出
しで食事をとり団員3名を連絡要員に置き残り
団員33名を消防車2台と自家用車に分乗し消防
本部へと走る。本庁に近づくにつれ地震の規模の
大きさに改めて驚く。本部に着くと生瀬分団は
香榊園地区の救出に行くよう指示され現場へ行く
途中、住民の方が私達の車を止めて、

「この家（倒壊家屋）に、まだ1名いるので助
けてくれ！」

と懇願され、それを振り切ってまで行くことは
できず、まずそこで作業して次へ進むといった
具合で仲々目的的にたどりつく事ができなかった。
指示された場所に着くと道路を挟んで反対側の
家が6軒並んで倒壊しており、まだ中に逃げ遅
れている人が居るという事で、機動隊員4名と
合流して救出活動を行った。現場は2階建ての
集合住宅で1階部分が押し潰されており、まず
2階の畳を取り除き床板や梁、1階の天井板を
取り、倒れている簀笥を裏から壊し中の衣類を
引張り出した。簀笥の引出しを取り払うと手
が見え、その下から簀笥を支えるような形
で遺体が見つかり担架もない

ので畳に乗せて運び出した。この現場では3名の尊い命を救出する事ができた。この後は、他所で作業をしている団員と合流し、ここでも4名を救出したが、3名の方は亡くなられていた。最後に救出した84歳の老女の方は、生存が確認されての救出活動だったので活気がみなぎっていた。それ以上に救出活動を見守っておられた家族の皆さんの喜び様は言い表せないものがあり、改めて命の尊さを知らされる。慎重に作業を進め無事救出し、救急車がないので消防車にて県立西宮病院へ搬送した後、消防局へ引上げたとき時計の針は午後11時を指していた。遅い夕食は、おにぎり1人1個であったが分団員一人として不平不満を言わずによく頑張ってくれた。その直後、団長より生瀬分団の1車輛は津門分団と共に津門協立病院に急行し、三田市よりの救援給水車の水を屋上タンクまでポンプアップする様指示を受ける。直ちに協立病院に急行する。断水のため屋上タンクの水は既に消費し給水車の水では圧力なき為、手術等が出来ないのでポンプ車を要請したとの事である。津門分団と協力積載している「トーハツ」小型ポンプを有効に利用して屋上タンクに送水することに成功した。足の踏み場もない位の負傷者を何とか早く十分な治療が出来る様にせねばと気が焦るばかりであった。任務を終え分団車庫にたどりついたのが真夜中の2時でした。一度に色々な体験をした本当に長い日々一日でした。翌18、19日は、朝8時より市の防災中心部へ応援、土埃や瓦礫の中での救助活動でしたが、分団員誰一人として不満を漏らさずに黙々と活動してくれたのには敬意を表します。20日からは消防自動車に1つの水タンクを積み給水活動、主に市が設けている給水場所より遠く離れている所への給水で特に、老人世帯の人達には大変喜んでいただいた。2月20日まで実施、この時ほど普段何げなく使っていた水の有難さが身に染みてよくわかりました。

今度の反省として

■ 消防車1台に「担架」 1基

■ 原動機の「チエンソー」1台 を設備
出来ないものかと思います。

1月17日その日その時

甲子園口分団

副分団長 難波洋三

その日、ダンパー、ブルドーザーが走るような地鳴りの音で目を覚ました。横で寝ている妻に、

「おい！地震や！」

とたたき起こし、布団の上に座ると同時に、

「ドンドンーン」

と激しい縦揺れ、身体を起こしかけている妻が飛んできた。(バッシャー) 停電、暗闇の中に、閃光が3、4筋走る。どこかで電気がショートしたようだ。腰にしがみつく妻の頭を左手で抱え、右手は自分の頭を抱え、隣で寝ている息子(20歳)に、

「和樹、布団をかぶれ」

と声をかけるが、建物のきしむ音、家具の倒れる音、マンションのあちらこちらから女性の悲鳴…。横揺れに身体が左に右に振り回される。

「何でこうなるんや！」

「負けてたまるか！」

「くそったれー！」

と大声を上げる。目の前に窓があり、いつの間にか2人とも向きが違っていった。

「和樹、大丈夫か、怪我ないか。」

「どうもない。」

と返事が返ってきた。

「ガスの元栓閉める！玄関あけろ！」

と言いながら、パジャマの上からズボンをはいた。いつもの夜中の火災出動と同じ動きである。時計を見て、窓の外を見ると、火力発電所の煙突、阪神高速湾岸線、天保山大橋のイルミネーションだけが瞬いている。何という不気味な静けさだろう。立花方面で火災か分からないが煙が見える。風はないようだ。箆筒を乗り越え、懐中電灯を探すが、いつものところがない。諦めて立ち上がると、足に懐中電灯があたった。玄関の方から和樹が、「西宮北口の方で火事や！煙が3本見える。」と言った。リビングの床が濡れている。数日後に分かったが、風呂の残り湯が激しい揺れで溢れたらしい。下駄箱を起こし、長靴、ヘルメットを探

しだし、やっと外に出られた。隣から、

「助けて！出られない。ドアが開かない。」と声がし、1、2の3で中からと外から押して引いてようやく開き、みんな無事に出てきた。600号室からドアをたたく音、又、

「1、2の3」

で引っ張って開いた。あと1時間ぐらいすると夜が明けるから、それまで廊下にいる方がよいと言いついて残して6、7階の全室のドアをたたいて回る。

「助けてー！」

「中におばあちゃんがいて出られない。」内開きのドアで簞笥、本棚の下敷きになっているとのこと。幸い、ドアと天井の間にガラス窓がある。ガラスを割って中に入ることが出来た。既に、男手も大勢いたので、後は任せて分団車庫へと走った。30分ぐらい経過したかと思う。途中、外に出ている団員に

「行くぞ！」

と声をかけ、又、団員の両親の住んでいる家に立ち寄り、無事な顔、声を聞き安心する。消防車の赤色灯が見える。走る。走る。現在、分団長以下4名出動。他の団員の安否が心配。

西宮北口、夙川方面で5、6箇所の火災が見えると報告。市内全域で倒壊家屋があると分団長から聞く。当分団地区内は甲子園口分団だけで対処しなければならぬと覚悟する。倒壊家屋からの救出。1人、2人、1軒、2軒と廻っていく。知り合いの人から、難波さんこっちに来て、

「〇〇さんが2人まだ出てこない。」

と言われ、そちらへ向かう途中別の人から死にそうな人がいると手を引っ張られていく。路上に布団が2つ。1人は男性。

「ワシは大丈夫やからそっちをみてくれ。」もう1人は女性で顔色は悪い。呼んでも返事がない。すぐに応急手当をしなければならない。なにぶんにも経験不足。やらざるを得ない。聴診器を持った人が声を掛けながら走ってきてくれた。近くの耳鼻科の先生だ。よかった。心強い。消防団の研修でやった救急講習会を思い出しながら、気道確保、先生が心臓マッサージをする。1、2、3、息をフーツと吹き込む。胸が膨らむ。1、2、3、フーツ、1、2、3、フーツ。胃液が上がっ

てくる。思わずむせる。1、2、3、フーツ、何回しただろうか。その時先生が、

「駄目だ。もういい。しなくてよい……」残念でならなかった。

消防自動車で団員数名と甲子園口3丁目方面へ向かう。3丁目の現場は、梁の下敷きになった女性1名、家族の人が小さな鋸で梁を切っていた。隣の3階建ての屋上より、ロープで梁を引き上げる方法をとる。屋上に上がった人から、

「駅の北側で火事みたい。」

と教えてもらう。すぐに団員に消防自動車を回すように指示する。やがて救出し、家族の人が病院へ搬送した。直ちに火災現場へ向かう。JR甲子園口駅前のホーキビルが倒壊している。そのビル北側の店舗2軒が火災現場。既に防火水槽に部署し、3線放水していた。団員10数名出動している。防火水槽の水もなくなりつつある。スコップを持って近くの新堀川へ向かう。普段川底は15センチ位なのに、50センチにも水位が上がっていた。あとで分かったが、下流で川底が1メートルも上がり、自然のダムが出来ていた。ホーキビルは倒壊というよりも、爆弾が爆発したようで原形をとどめていない。倒壊した建物は、駅前ロータリーを乗り越え、向かい側の歩道にまで達していた。どこかに進入口がないかと見て回るが、丸腰の我々ではとうてい無理である。電話が不通のため、現況報告を自転車で瓦木消防署へ向かう。

「午前9時過ぎ現在、甲子園口地区、火災1件、倒壊家屋多数、甲子園口北町で7階建て雑居ビルホーキビル倒壊、入居20世帯、入居人数不明、30名ぐらい中にいると思われます。」と報告。

午後2時過ぎ、大型レッカー車が到着。その後すぐに自衛隊、警視庁レスキュー隊到着。火災現場のガスが止まらず、午後10時まで放水する。自衛隊と共に、ホーキビルの救出作業を午前2時まで行う。明朝7時より救助活動再開。その後1週間救出作業が続いた。

生存者 1名

死者 17名

救助にあたって

下大市分団

団員 岡 島 豊

1月17日、家族の無事を確認した私は、分団の詰所へと向かいました。すでに数名の分団員が集まっていますが、地震の直後で、情報も少なく今まで考えもしなかった大惨事に正直戸惑っていました。集まった団員の間では、自宅の被害状況及び自宅周辺の被害状況の情報交換が行われ、被害の増大が予想されたため、招集がかけられることになりましたが、停電のため通常のサイレンが使えず、消防車のサイレンが代用されました。

時を同じくして、近隣住民の方から家屋が倒壊し、住人が下敷きになっているとの通報があり、私たちは現場へと向かいました。薄暗い中、懐中電灯を片手に現場へ到着すると、家屋は、完全に崩壊し、2名が下敷きになっているとの事でした。家族の方は、懸命に下敷きになっている家族に声をかけて励ましていました。はっきりとした声で、

「助けてくれ！」

という返事もあり、救出作業が始まりました。瓦礫の山を一つ一つ手作業で取り除く以外に方法はなく、家族の方と共に、3～4名で作業は行われ、時折声をかけ勇気づけながらの作業が続きました。辺りが明るくなってきた頃、近隣の方も作業に加わり、10名を超える人手になっていました。その介もあり、間もなく2人とも救出することができました。救出後、病院に搬送した時、この地震での被害が甚大であることを痛感し、恐怖を覚えました。病院内はパニック状態で、処置室に入りきれない怪我をした方達が至るところで治療を受け、寝かされていました。この光景は、今でもはっきりと脳裏に焼き付き、おそらく一生忘れることはないと思います。続いて私は、救出作業が行われている次の現場に向かいました。現場では、同じく2名の方が下敷きになっていました。先の現場とは違い、家屋の2階部分がそのまま1階に乗っているため、身体が挟まった状態になっていた。中心になって作業を進めている分団員が、ジャッキが必要だという。しかし、ジャッキ

は車載の短いジャッキしかなく、試行錯誤を繰り返しながら、何とか身体が引き出せるだけの隙間が確保でき、無事に救出することができました。他の分団員の現場では、亡くなられた方がでいるという情報も入りました。また、住民の方からは、新たなる現場の通報が次々に入ってきました。通報者も興奮しているため、言葉も荒くなりがちで、分団員とのやりとりが続く。限られた人数で、道具もなく、技術も知識も少ない我々は、一箇所ずつこなし、生存が確認されている現場を優先し、救出していく以外なすべがなかった。次の現場では、完全に身体が挟まった状態になっている。ほとんど意識がないようで緊急を要した。しかし、この現場では、車載ジャッキだけでは間に合わず、ジャッキの確保に走り、トラックの所有者からジャッキを借りてようやく救出することができた。意識がない状態のため、少しでも早く搬送しなければならないが、道路は車でごった返しているため、サイレンを鳴らし走るが渋滞して動かない。私は、焦りと腹立たしさが入り乱れていました。病院には、自家用車で搬送してくる人も多く、かなりの人がこの渋滞に歯痒い思いをしていたと思う。その後休む間もなく、救出、搬送そして次の現場に向かうという活動が繰り返されていました。この日の救出活動は、懐中電灯の灯りをたよりに午後8時過ぎまで続けられました。この日の最後の救出者は、70歳を超える一人暮らしのご老人でした。家屋は、完全に崩壊し、どこにいるのか全く見当もつかない状態で、瓦礫の取り除き作業を行っている、僅かなうめき声が聞こえてきた。少数で作業していたのが幸いしたのか、現場にいた全員の耳に入った。生存を確信した私たちは、少しでも早く助けなければと、応援を呼びに行き、懐中電灯の灯りの中、救出することができました。この日一日の救出者は11名で、うち遺体での救出は3名でした。救出活動を終え分団詰所に帰り、ようやく我に返ったような気がしました。まだ、気が張っているせいか、疲労感や空腹感は余り感じませんでした。この日一日の出来事が、頭の中を駆けめぐりましたが、現実として受け止めたくなかった。悪夢であってほしいとも思いました。しかし、現実はこのからの

余震にも備えねばならず、夜通しの警戒が続きました。

1月18日、昨日の反省からチェーンソーやジャッキなど必要な作業用具が確保され、救出作業に臨みました。受け持ち区域で、昨日手の付けられなかった現場で、自衛隊の救出活動を見守りながら遺体の出されるのを待ちました。そして、遺体の搬送、病院には汚れた毛布で覆われた遺体が、床に何体も寝かされていました。病院内は、昨日のパニック状態が信じられないほど落ち着き払っている様に私の目には映り、なぜかほっとした気分になりました。幸い受け持ち区域では、火災の発生が1件もなく、救出活動も順調に終わったため、隣接する分団の応援に向かいました。まだ家屋の下敷きになっている現場がかなりあるとのことで、他の分団からも応援がきて救出作業が行われていましたが、どの現場も生存者はなく、遺体で出されていました。

翌日は、消防署との合同作業となり、かなり複雑な崩れ方をした家屋での作業となりましたが、懸命に作業を続け、ようやく遺体を出しました。この日を以て分団による救出作業は終わりました。

私は、自宅の倒壊が免れていたため、最初に倒壊現場に行ったとき、正直行って恐ろしかった。また、私たちは、今回運良く救出する側にまわっただけであり、今後は今回の教訓を生かした万全なる備えをしなければならないと思いました。救出作業を迅速に行うための作業工具の充実もその一つだと思います。今回工具の確保に手間取り、救出作業に支障を来した例が度々あったと思います。救出した後、数名の方が亡くなられたと聞きました。もう少し早く救出できていれば、助かっていたかも知れないと思うと悔しくてなりません。

最後に、残念ながら遺体での救出となった方々、また、この阪神大震災でお亡くなりになった多くの方々のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

阪神大震災に思う

小曾根分団

団員 宮田 良浩

まず冒頭に、この度の震災により不幸にも犠牲となってお亡くなりになられました方々には心よりご冥福をお祈り申し上げます。そして、被災されました方々に心よりお見舞いを申し上げます。誰もが予想もし得なかった突然の惨事が、これほどにも大きな被害に発展してしまった事は、単に地震の大きさだけではなく、様々な状況が重なり合った事実があると思います。消防団員として、地震の当日から今日まで、いくつか感じてきたことを少し述べてみたいと思います。

まず最初に、今回の地震で恐らく大半の方が感じられたのではないかと思います。全てのライフラインがストップしてしまった時、何よりも急を要したのは何と言っても「水」だったのではないのでしょうか。電気は懐中電灯などで多少の代用はききます。が、水だけはそれではなりません。事実、地震直後、スーパーやコンビニなどから食料と共に飲料水が不足し、かなりあちらこちらと苦労して確保されたのではないかと思います。ですが、水道が止まってしまったことで苦労したのは、飲み水だけではなく、ご存知の通り、その直後から西宮市内でもかなりの火災が発生していました。出動要請があり、現場へ駆けつけたときには既にかかなり炎上しており、直ぐ消火活動を開始するにも消火栓が断水で使いものになりません。先に到着していた分団と相談して、とりあえず近くのマンションの貯水槽を使って放水したのですが、水量に限りがあるため、鎮火するまでには至りません。漏れたガス管に引火し、時々「ボン」と音をたてて小さな爆発が起きます。いつ大きな爆発が起きるとも判らず、またいつその建物が炎と共に倒壊するかも判らない状態の中で無念にも放水の圧力が下がってきます。

「水利さえあれば消せるのに……」

これが一番最初に感じたことでした。普段消防団ではそれぞれの担当区域が決まっており、その区域内の水利については、消火栓を始め河川や学校

のプールなどの場所を把握しているのですが、今回のような緊急時にはそれ以外の区域へも出動することがあり、その場その場で水利を確保しなければならないのです。それぞれがお互いのためにも、今一度身近の水利を確認し、例えば消火栓の上への違法駐車や河川の水量の確保など、町ぐるみでの取り組みも必要なのではないかと思うのです。もちろん、今後の復興にあたって、地下の防火用貯水槽など行政による整備も望まれるところですが。

次に感じたこととして、道路の渋滞がありました。当日、既に早い時間帯にどの道も車で溢れかえっていました。勿論、怪我人や急病人を病院へ搬送していた車もあったでしょう。電話も通じず、身内や親類の安否を確認するため、現地へ向かっていた車もあったでしょう。しかし、あんな状態の中で、あまりにも皆が車を使いすぎたとは言えないでしょうか。救急車や消防車など緊急車両がもっと早く現場に到着できていれば、命が救われた方がどれほどいたことでしょうか。重傷にならず軽傷で済んだ方も沢山居られたかも知れません。あの日、市内の消防団は全て西宮消防本部に集結し、次々と入る119番通報で出動していったのですが、当然救急車があちらこちらへ出払っていましたので、当分団の車両も瓦礫の下になった方々の救出にかなりの件数出ていきましたが、現場へ向かうどの道もこの道もまるで駐車場のごとく渋滞していて、まるで身動きがとれませんでした。実際119番に通報しているのに、いつまで経っても来てくれないとイライラされた方は少なくないと思いますが、いくらサイレンを鳴らしてもマイクで叫んでも、バイクでさえ通れないようななか、はっきり言ってかなり苦労しました。到着してみたら、倒壊した建物の隙間から足の先だけが見えています。声を掛けても返事がなく、その足は既に冷たくなっているのです。家族の人の悲痛な叫びに何と言って説明すればいいのか言葉を失います。もしかしたら、つい今まで生きていらっしやっただかも知れないと思うと、何とも言えない無念を感じました。そこにいると判っていながら、救い出せなかった無力さと苛立ちが交差する悔しい気持ちは、今思い出しても残念でなりませ

ん。ご近所の方々のご協力で

「この人は助け出しましたよ」

と言っていた現場では、ホッとする一瞬ですが、あるところでは

「今頃のこのこやって来ても、助かる訳ないでしょ！」

と言われたときは

「すぐに来たくても、道が混んでしまって来れないんだ！」

と心の中では悔しさを覚えつつも、かなりショックでした。さすがに地震の翌日からは、規制されていて緊急車優先になりましたが、この現実もそれぞれが「我先に」の気持ちを持たず、緊急時におけるモラルを再確認しなければならないのではないのでしょうか。ちなみに、午後11時頃に神戸へ向かうために来てくださった三重県下の消防車がやっと西宮を通過されたような始末だったのです。

3番目には、通信手段でありました。停電のためにテレビによる情報収集が出来ず、電話もほとんど使いものにならないので、携帯ラジオだけが唯一情報を入手する手段でした。私は、趣味でアマチュア無線をしていますので、地震直後にハンディトランシーバーで友人に無事を知らせることが出来ました。又逆に、皆の安否を確認することもできました。その後に消防無線を傍受してみましたが、どれもこれも混乱しきっている様子がありありと感じられました。消防団の使用している消防車にも無線機が設置されていますが、受信するのみで電波を送信することは許されていませんので、本部からの指令は確認できても、それに対して返事をする事が出来ないのです。こちらからの確認や連絡は、電話を使わなければならない訳ですが、これがまたなかなか通じないために手間取りました。これはあくまでも私の個人的な見解に過ぎませんが、今後のためにも非常時の通信手段の充実を期待したいと思います。

さて、話は多少前後しますが、時間が経つにつれ消防団の活動は、給水活動に変わって行きました。消防車の後ろに給水タンクを載せ、それぞれの区域の給水を行いました。ここでもどれほど皆が「水」に困って居られたか改めて痛感する

日々でした。初めのうちは、こちらも要領がつかめず、どこへどのように回ればいいのか暗中模索でしたが、事前にマイクで広報しておいて、そこへ集まっただけの方法をとりました。最初は、広報しても車が消防車だけに、不思議そうに家の窓から覗いて居られましたが、何人かが来られるのを見て、慌てて走って来られる様子でした。出来るだけ毎日同じ時間に同じ場所へ行こうとスケジュールを立てましたが、鳴尾浜へ来てくださる給水船の時間によって多少のズレがあり、首を長くしてお待ちいただいていた方々が沢山居られたことと思います。特に、団地やマンションなど高層の建物の多い地区では、みるみる行列が出来るために一回の給水ではとても間に合わず、途中で汲みに戻るあの寒空の中にじっとお待ちいただいたこともしばしばありました。ですが、同じ時その寒空の中で船から1台1台に水を入れてくださった給水船の作業員の方々がおられたことを、改めてお伝えしておきたいのです。全国各地から何時間もかけて駆けつけ、休む間もなく給水していただいた有志の方々の善意がこもった「美味しい水」だったはず。この場をお借りして改めて感謝申し上げたいと思います。

これから復興に当たっては、容易に解決できないことが多いでしょうが、この教訓を無駄にすることなく、今後は「全国のモデル都市西宮」にならなければなりません。それが生き残った我々がなすべき義務だと言っても過言ではないと思います。皆の協力ですばらしい西宮を再建していきましょう。

最後になりましたが、救援いただきました全国の沢山の皆様に心より厚くお礼を申し上げます。ご支援本当に有り難うございました。

阪神・淡路大震災

西宮市消防の活動記録

平成8年3月発行

監修 西宮市消防局

西宮市消防団

〒662 西宮市池田町13-3

Tel (0798) 26-0119

